

逗子市文化財調査報告書

第三集

山の根・久木

逗子市教育委員会

逗子市文化財調査報告書

第三集

山の根・久木

逗子市教育委員会



法性寺墓地からみた「おさるばたけ」大切岸の一部

目 次

刊行に当って	小川重太郎	1
山の根の歴史		4
久木の歴史		5
逗子の古建築		6
東昌寺		7
海宝院		9
妙光寺		13
岩殿寺		14
寺史と彫刻・絵画		25
妙光寺の寺史と彫刻・絵画		26
法性寺の寺史と彫刻		37
岩殿寺の寺史と彫刻		40
古 文 書		47
法性寺文書		48
岩殿寺文書		51
妙光寺文書		56
東昌寺文書補遺		56
考 古		58
あ と が き		105

刊行にあたって

逗子市教育委員会教育長

小川重太郎

このたび逗子市文化財調査報告書第三集が刊行されるはこびとなりましたことは、まことによろこばしい次第であります。

地域に現存する文化財は、逗子という自然、風土、歴史的環境のもとに、幾世代を経て今日まで残されてきた貴重なものであります。

現代に生きる多くの市民は、先づこの貴重な文化財の理解をもつことに始まり、これを後世に守り伝えることで文化財保護の使命が果されるものと思います。以前、文化財は、土地の古社寺、旧家などの所有に限られていたため、一般市民には無縁のものでありました。戦後は文化財の認識が広くなり、一般市民、国民の理解を必要とする方向が打ち出され、文化財保護法は、こうした考え方の中から生れたものであります。しかしながら個々の文化財の解明は、何といたっても専門家の調査による学術的な見解が下されなければなりません。そうして解明されたものを、広く市民に理解していただくよう努めることが、文化財保護行政の基盤となるのでしよう。

第三集は、山の根、久木、両地区の主要な文化財について、学術的な調査結果をまとめたものであります。

この報告書が、広く文化財に関心をもつ方々の、お役に立つことを願うとともに、文化財保護への強力な基礎になることを期待するものであります。おわりに調査ならびに執筆にご協力を賜った関係各位に深く感謝申し上げます。刊行のことばといたします。

山の根・久木の歴史

貫 達 人

- (1) 山の根の歴史..... 4
- (2) 久木の歴史..... 5

山の根の歴史

山の根は逗子市中央部にあり、東と北には池子、西北は久木、南は逗子、桜山に連なっている。横須賀線逗子駅の少し西より、横須賀線と京浜急行線とが交叉するあたりまでの、線路の北側が、大体、山の根である。方0.52平方キロメートルの字である。久木との境は山で、東側から、松本谷戸、中ノ谷戸、山の根谷戸と三つの谷戸になっている。

山の根の歴史はほとんど伝わらない。ただ「小田原衆所領役帳」には、

一 同（石上寄子） 遠藤源八 三拾老貫百七拾五文 同（三浦） 山根
とみえている。

「新編相模国風土記稿」によると、

松本寺 雲見山医王院と号す、古義真言宗^{延村}_末本尊薬師
とあるが、これは明治初年廃寺となった。この寺の本堂を移したのが、山の根の熊野神社の社殿であると、綾部泰助氏が語っている。（「逗子市誌、第2輯」）

山の根の戸数は、東昌寺所蔵の「相州川東」宝暦11年(1761)によると、名主年寄ら5人をのぞき、家数16軒とみえており、「三浦古尋録」文化9年(1812)では、戸数拾八戸、とある。「新編相模国風土記稿」天保12年(1841)には、家数十九とあって、殆んど変化がなかったことを知る。

「逗子市誌、第2輯」には、古老の言として、明治初年のことを

山野根は中ノ谷戸五軒、松本谷戸八軒、
山野根谷戸五軒で、合わせて十八軒あった。

とのべている。

「同第1輯」によれば、昭和25年10月1日現在の調査で、山の根の世帯数は418であり、人口は1,782であった。

現在は、東京・横浜のベッドタウンとして、国鉄逗子駅のすぐ近くにあたるから、いよいよ発展している。

久木の歴史

久木は逗子市の中心から北西方にあり、西北は鎌倉市に接し、東は池子、山の根、南は逗子、新宿、小坪に連なる。方2,57平方キロメートルの字である。

久野谷の名は、ふるく「吾妻鏡」に建保元年4月2日、和田義盛の代官久野谷弥次郎の名がみえ、この人が、このあたりに住んで出字としたのであろうといわれている。「小田原衆所領役帳」には、

一 山中馬寄 平山源太郎 八拾六貫七拾文、 従前々役有之 三浦 久野谷
とみえる。

江戸時代は久野谷村と、その東方池子に近い部分に柏原村（かしわばらむら）にわかれており、山根村と三村合わせて久野谷郷とよばれた。柏原村は延宝3年高百石の分を久野谷村からさいて、鎌倉の光明寺領とし、別村となったという。しかし、「小田原衆所領役帳」には

一 石上寄子 石上弥太郎 廿貳貫四百八十四文 柏原 普請半役 寄親 = 付而可致之、
とみえるから、このころは別村であったのかもしれない。

明治7年、久野谷村と柏原村が合併して久木となった。なお久野谷村の名主松岡氏、柏原村名主関氏は共に現存しており、所蔵の古文書は多いが、本調査の対象とはなっていない。

「逗子市誌、第二輯」によると、松岡氏は足利持氏の臣で、永享の乱後、久木へ隠退したと伝へ、妙光寺の開基日那でもある。伝説としては、名越トンネルの近くにある新筈（にいはし）の宮のいわれがある。これは、悪源太義平の郎従久野谷六大夫とその娘広緒が、源頼朝に会い、急なことで、粟の食事を出すのに新しい筈がないので、茅を切って筈にしたことによる祠である。

久野谷村は明応頃には岩田村とも云ったというが、「新編相模国風土記稿」に、もと岩殿村と称したとあり、村内にはその名にちなむ岩殿寺（曹洞宗）がある。このほか、日蓮宗の法性寺、さききのべた妙光寺があるが、くわしいことはそれぞれの寺史にゆずりたい。

「逗子市誌、第一輯」所収の「松岡家文書」文禄2年9月の久野谷郷水帳によると、畠は19町7反9畝15歩、田は50町8反6畝6歩であり、戸数27軒、米石高四百四拾五石四升五合である。また文政8年3月の地誌御取調書上帳の中には、

村人は薪を刈り、鎌倉の材木座又は逗子の小坪へ運んで商売をしたこと。
鎌倉から、三崎へ通ずる街道の道巾は二間（約4メートル）であったこと。
鎌倉の報国寺から、山続きに岩殿寺までの道巾は二尺であったこと、
などがみえる。

久野谷村の人家は、さきの二十七軒のあと文化9年の「三浦古尋録」には、久野谷村戸数、三十戸余、柏原村戸数十八戸とあり、「風土記」には五十三、十六と見え、弘化二年の「三浦古蹟集」には久野谷村、三十戸余、柏原村、十八戸余とみえており、嘉永7年久野谷村の書上には五十四軒、人数二百七十六人とある。それが昭和25年には、所帯数が1,125になっている。現在は宅地造成により、更に飛躍的にふえて、住宅地として発展したわけである。

逗子の古建築 2

池子・沼間・久木・山野根地区

関 口 欣 也

1. 東 昌 寺 (真言宗) 7
2. 海 宝 院 (曹洞宗) 9
3. 妙 光 寺 (日蓮宗)13
4. 岩 殿 寺 (曹洞宗)14

逗子の古建築 2

(池子・沼間・久木・山野根地区)

昭和46年9月3日および4日の両日、池子・沼間・久木地区の近世建造物の調査をおこなった。調査寺院は東昌寺・海宝院・光照寺・法勝寺・法性寺・岩殿寺・妙光寺の7寺であるが、このうち近世寺院建造物の主なものはつぎのとおりである。

東昌寺：四脚門、阿弥陀堂

海宝院：四脚門、本堂、白山社

岩殿寺：観音堂

妙光寺：四脚門、本堂

このほか、神社に古い神輿のあることが知られているが、これについては稿を改めて報告することとする。

1. 東昌寺 (真言宗)

四脚門を入れて右手に阿弥陀堂、左手に本堂・庫裡がたつが、本堂は昭和8年の建立になり、庫裡も近年改築された。寺蔵(明治28年古図『逗子市文化財調査報告書第2集』所収)によると、もとは四脚門の正面に本堂と庫裡が並立していた。東勝寺の建築に関する近世の沿革を貫達人氏の調査から抄出するとつぎのようになる。

寛文年中(1660)：阿弥陀如来移坐・御堂建立

延宝3年(1675)：再興(文書)

宝永4年(1707)：客殿造替(文書)

享保12年(1727)2月：焼失(文書)

寛保4年(1744)2月：庫裡造立(棟木銘)

延享元年(1744)3月：庫裡完成(棟札)

宝暦6年(1756)6月～同7年3月：阿弥陀堂再建(棟札)

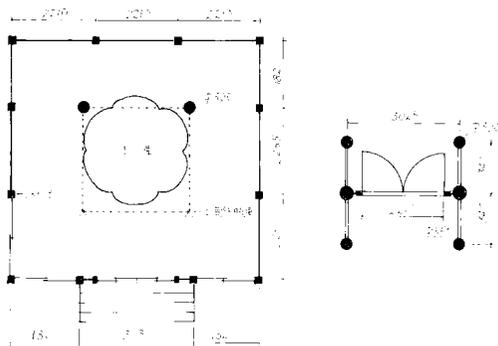
享和3年(1803)1月：阿弥陀堂葺替(棟札)

安政4年(1857)8月：阿弥陀堂屋根修覆(文書)

これより、東昌寺は享保12年(1727)火災の16年後、寛保4年(1744)に庫裡が再建され、29年後に阿弥陀堂が丈六阿弥陀如来像とともに再興されている。本堂についての記録はないが、庫裡の建立と前後するころであったろう。また東昌寺の18世紀中葉の再興にたずさわった工匠は庫裡については、寛保4年(1744)棟木銘に「大工君嶋政右衛門」、延享元年(1744)棟札に「大工当村政右衛門」とあるのにより、池子村の大工君嶋政右衛門であったことが知られる。しかし、東昌寺の建築に震災で大被害をうけ、いま残る近世再興の建築は四脚門と阿弥陀堂の2棟である。

〔四脚門〕

東昌寺表口の門であって、桁行3.025 m、梁行2.68 mの切妻造瓦葺の門である。当門のように棟通りの主柱2本（径33cm）の前後に4本の副柱（径30cm）をたてる形式の門を四脚門といい、一般の寺院に広く用いられた。建立年代は文献史料がなく、棟木下に明治41年葺替を記した棟札があるにすぎないが、技法と細部からみて江戸時代後半とみられる。当門の様式は柱上下の粽や柱上の台輪など主として禅宗様になる。鎌倉を中心とした地方におけるこの形式の室町末風の古例（逗子・海宝院四脚門、葉山・新善光寺四脚門など）は主柱と副柱のつなぎに海老虹梁を用い、主柱上部だけ台輪をのせて、軽快な姿の意匠をみせる。これに対し当四脚門は主柱と副柱の繋ぎに海老虹梁の代りに貫を用い、台輪は副柱の頂部にものせる。したがって柱上の台輪が目立ち、重々しい感じが強く、妻では貫と台輪の水平線が強調されている。おそらく、これは室町時代の軽快な意匠よりも、江戸時代には細部を充実させて、建物を立派にみせようとしたためであろう。細部上では側の中備を一具とし、棟通の中備も組物の代りに蓑股を用い、側と棟通りとも中備を二具の平三斗とする古例と異なっている。今回調査した四脚門3棟のうちでは海宝院がもっとも古く、ついで妙光寺となり、当門はそれに続く後期の例となる。なお、現在棧瓦葺であるが、もとは茅葺であったと考えられる。



東昌寺阿弥陀堂（左） 四脚門（右）

〔阿弥陀堂〕

宝暦5年(1755)造立の丈六阿弥陀如来像をまつる堂であり、宝暦8年阿弥陀如来像胎内銘札（『逗子市文化財調査報告第2集』）に「右之本尊木地作り宝暦五亥四月七日ヨリ同十二月九日迄ニ作り畢、夫レヨリ堂建立宝暦六年子ノ六月ヨリ寅十月迄ニ皆令成就也、沙門海乗、令造立者也」とあるのにより、阿弥陀像の造立にひき続いて宝暦6年(1756)6月から翌7年3月まで約10ヵ月で造営されたことが知られる。当堂は現在かなり荒れて、外からみると、とりたててみるほどの堂にはみえない。しかし、堂内に入ると、阿弥陀如来像胎内銘札に記すとおり宝暦6年建立時の姿をとどめ、禅宗様の虹梁大瓶束架構を用いた手法がみられる。

堂は桁行3間、梁行3間、宝形屋根の三間堂であって、側柱は角柱を用い、細部上では柱上に絵様肘木をのせる簡単な堂であって、縁も長押もない。しかし、これは関東震災で倒壊後の再建に省れたもの

であって、もとは周囲に縁をめぐらし、内法長押と縁長押付の堂であった。前面は中柱2本が入替えられ、内法の構も再建時の改造である。このように当初の姿に復しても外観は簡素な三間堂にすぎないが、注意をひくのは内部の構成である。すなわち、当堂は中央方3mの部分の天井が一段高くなり、本尊後部の来迎柱から前面に禅宗様の虹梁大瓶束架構をかまえ、中央部の高い天井をうける。中央部の一段高い部分は柱上に頭貫・台輪を配し、その上に出組斗拱を詰組に配る。この手法は方1間の主屋の周囲に裳階をつけた禅宗様仏殿の内部とほぼ同じであって、当堂はこれを外観上二重屋根とせず、一屋根に簡単にしたものである。禅宗様重層仏殿の内部を用いながら外観を一屋根に簡略化するのは鎌倉地方の近世禅宗様仏堂にみられ、当堂の基本構成はその一例とすることができる。ただし、外観上の細部では禅宗様を用いず、簡単な絵様肘木を用いるために、ごく普通の小堂にみえるのである。このように中央部を高い室内構成にしたのは像高2.59mの丈六阿弥陀如来坐像をまつるためであろう。細部上では大瓶束先端、中央方一間部分斗拱の拳鼻、中央部と側を結ぶ繫虹梁など、いずれも時代相応の細部をしめし、斗拱の木割に若干古風な点を残すだけである。要するに当堂は法壇の大きい丈六阿弥陀如来像をまつるために、中央部の高い禅宗様方一間裳階付仏堂の内部を採用し、それを外観上一屋根に簡略化し、外観ではふつうの和様三間堂としたものとみてよからう。

2. 海宝院 (曹洞宗)

徳川家康の代官であった長谷川長綱が之源臨乎和尚を開山として開いた寺であって、天正19年(1591)横須賀郷の内に18石の地を寄進する旨の朱印状(『逗子市文化財調査報告第2集』所収)を賜わった。この寺は朱印状からみると、天正19年当時は横須賀に寺があったが、開山之源臨乎は文禄4年の示寂と伝え、『寛政重修諸家譜巻866』によると開基長谷川長綱は慶長9年(1604)歿して海宝院に葬られている(墓地現存)。また長綱の弟長次についても「慶長十五年五月廿日死、年六十二、法名道忠、相模国三浦海宝院に葬る、のち代々葬地とす」と記しているのをみると、おそらく慶長年間には現地に移ったらしい。

現地に移された当初の海宝院伽藍がどのような建築からなっていたかは不明であるが、18世紀末寛政2年(1790)9月の絵図によると、表門・山門・本堂・庫裡・衆寮をはじめ多くの建物がたっていた。この絵図は「朱引之通者焼失□御座候」と傍記し、本堂・開山堂・書院・小庫裡・山門・廻廊を朱引しているのに大庫裡と衆寮が朱引されていないのはやや疑問であるが、あるいは、廻廊は焼失せず破壊消防のため取毀したために、廻廊を焼失建物に数えたのかもしれない。

寛政2年焼亡後、寺伝によると本堂は享和2年(1802)11月20日に再建されたが、山門は『新編相模風土記稿』編集時にもまだ再建に至らず、明治19年1月当時の建物は『寺籍財産明細帳控』によればつぎの通りであつた(『逗子市文化財調査報告書第2集』参照)。

「伽藍殿宇部

一本堂 竪八間横九間半 但茅葺

一庫裡 豎拾壹間 横六間 但茅葺
 一物置 豎貳間半 横七間半 但茅葺
 一廊下 豎五間 横九尺 但茅葺
 一元関 豎貳間半 横三間 但茅葺
 一木小屋 豎三間 横貳間 但茅葺
 一下屋 豎貳間 横四間 但茅葺
 一雪隠 豎四尺 横貳間 但茅葺
 一表門 貳間四方 但茅葺
 一冠門 丈ヶ壹丈
 一冠門 丈ヶ壹丈

境内堂塔

鎮守堂

一鎮守 白山権現
 一建物 豎貳間 横九尺 但杉皮葺
 以上 」

この堂宇には寛政2年の火災をまぬかれた衆寮はなく、また山門もみられないから、寛政火災後の復興は旧規に復せず、衆寮も退転してしまったらしい。現在残る明治以前の建造物は本堂・鎮守白山権現社・表門の3棟であり、庫裡は昭和37年改築され、本堂につづく開山堂は昭和13年の再建である。つぎにこれら近世古建築をしるす前に寛政2年絵図について解説する。

〔海宝院寛政2年絵図〕

前述のように本図は寛政2年火災の報告のために作成されたらしい。焼失をしめす朱引した堂と焼失をまぬかれた堂についてともに豎横の規模を記し、海宝院の盛時の配置をしめす。本図にみられる海宝院の堂宇配置の特色をあげてみよう。

- 1) 表門・山門・本堂が中軸上にある。
- 2) 山門と本堂の中軸線の左右に庫裡と衆寮が相對する。
- 3) 本堂・庫裡・衆寮・山門を廊で結ぶ。

以上の特色は左右対称を基調とし、曹洞宗小木寺としての性格をよくしめしている。よく知られているように、中世・近世の左右整然とした伽藍配置は鎌倉後半から南北朝期にかけての臨済宗五山伽藍にもっとも典型的なものであった。五山では惣門・山門・仏殿・法堂・方丈を伽藍中軸上に一直線に配し、山門と仏殿間の左右に庫院と僧堂を相對立させ、山門両翼より仏殿两侧に達する回廊に庫院・僧堂を連接させた。しかし、臨済宗五山では鎌倉末より塔頭の設立が相ついで、本寺の僧堂を中心にした修行生活はすたれていく。加えて臨済宗五山は鎌倉・京都の2大政治中心に営まれたために鎌倉府および室町幕府の衰退とともにかつての壮大な伽藍は失なわれ、塔頭がかろうじて法灯を守るにすぎなくなった。このような事情にあったため近世に復興された臨済宗五山ではもっとも復興の進んだ京都の大徳・

妙心の2寺をみても伽藍中軸上の山門・仏殿・法堂を整えたにすぎず、鎌倉・南北朝期のように山門・仏殿間に僧堂と庫院を配するに至らなかった。しかし同じ禅宗でも道元が開いた曹洞宗では当時の政治の中心からはなれた北陸地方に本拠を求め、厳格な禅院の日常生活の規矩を守り、伽藍も簡素ながら占制を守ったらしい。曹洞宗伽藍の研究は横山秀哉博士により詳しく体系だてられている（『禅院の建築』）。横山博士の研究によれば、曹洞宗の中心寺院である永平寺・大乘寺等では先にのべた臨済宗五山の盛期の配置が江戸時代でもほぼ保たれていた。もちろんこのように多くの堂宇を持つ寺院は大本寺に限られ、中小級の小本寺では永平寺または大乘寺式配置から仏殿が省略され、山門の正面には当海宝院絵図にみるように本堂とよぶ建築に面することとなった。曹洞宗での近世本堂は寛政火災後の再建になる現本堂にみられるように広い畳敷の室をもち、説法に便利な堂であり、曹洞宗に限らず広く一般の近世寺院に用いられた堂の形式である。海宝院絵図にみる配置は横山秀哉博士の分類された曹洞宗伽藍配置では大乘寺式よりの仏殿省略形すなわち、山門・本堂間の東に庫裡、西に衆寮と僧堂を配し、これらの建物を廊でつなぐ形式に近い。ただし、海宝院には僧堂がなく、衆寮のみとなっているが、横山博士が集められた実例からみると、海宝院のように僧堂がなく、衆寮が山門・本堂間の西に建つ例はかなりみられるから（例、尾張・乾坤院、肥前・玉峯寺、信濃・谷敵寺など、山門の位置に中門を配するものでは信濃・海心院、肥前・天祐寺）、一規格であったようにみえる。禅宗寺院における衆寮は本来古教看読の学の道場であって、鎌倉末の建長寺では僧堂の後方に設けられていた。近世の曹洞宗寺院の衆寮は看読と講堂の機能をもち、大広間と修行僧の居房を数室設けた例が多かったらしく、修行のための建築である。

また本図では衆寮に相対する大庫裡の北に小庫裡とよぶ建築があり、小庫裡の後が書院となっている。普通の寺院では庫裡は1棟であるが、本図にみるように庫裡が大小の2棟に分れるのは鎌倉末の建長寺指図にみられ、小庫裡が住持の住む方丈の近くに設けられたのに対し、大庫裡に相当する庫院は僧堂に相対して、一山の衆の調食と寺務を司る所であった。曹洞宗ではこの古制が守られ、江戸時代末期の永平寺でも同様であり、海宝院もこの制がうけつがれていたであろう。

以上を要するに寛政2年焼失前の海宝院は単に多くの堂宇をもつ寺院であったというだけでなく、仏殿を省略しながらも伽藍中軸を通し、衆寮と大庫裡が山門・本堂間の左右に相対して、よく左右対称の配置を保っていた。加えてこれら4棟の主建築は廊で結ばれ、さらに大庫裡・小庫裡の制が守られ、末寺9ヵ寺を擁するにふさわしい曹洞宗中小本寺の配置をよくしめしている。

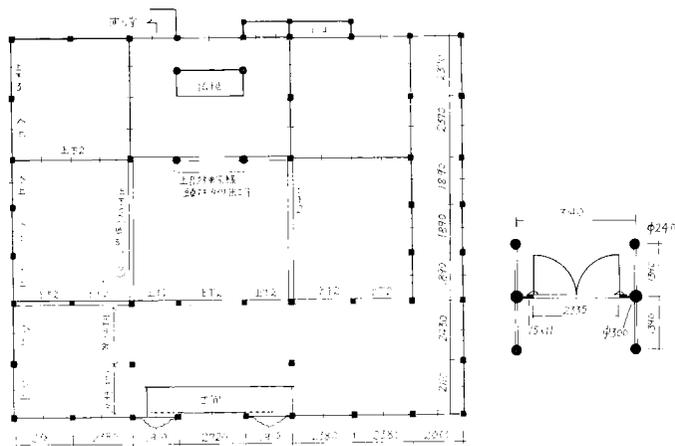
〔本堂〕

寛政2年(1790)焼失後再建された堂であって、寺伝によれば享和2年(1802)11月20日の再建という。もと茅葺であったが、昭和35年瓦葺にかえられた。堂は柱間数で数えて桁行8間、梁行7間の規模をもち、正面が偶数間であるのは東側に一間の入側縁をもつためである。大規模な堂であるが、外観上、柱上に組物をおかず簡素である。内部は前側に幅2間、東側に幅1間の入側を配し、主要部は整形6間取に割られ、後部中央を仏間とする。このような整形6間取平面は近世の一般本堂にもっとも広く用いられた本堂平面であって、遺構上では京都東福寺竜吟庵本堂(室町初期・臨済宗)、京都大徳寺大仙院本

堂（永正10年・臨濟宗）が古い。ただし上述の竜吟庵・大仙院両本堂とも、もとは塔頭客殿であったが、禅宗客殿平面が広く近世の本堂形式に普及した経過はまだ明らかでない。ふつうこの形式の本堂は方丈形式の本堂とよばれ、内部は住宅風意匠になり、仏間だけ仏堂意匠を採用する。当本堂も同様であって、仏間正面の中央2柱と仏壇を設ける来迎柱だけ丸柱を用い、柱上に台輪・頭貫をわたし、禅宗様三斗組斗椀をのせるが、他は住宅風意匠になる。

〔鎮守・白山社〕

当寺の鎮守は寛政2年絵図によると、表門と山門間の東にあり、朱引されていないから焼失をまぬかれたらしい。現在の鎮守白山社は寛政2年絵図とは反対側の西にあり、近年建った覆堂の中にある。鎮守は二間社流造の小社であって、桁行1.045m、梁行0.76mの身舎の前面に梁行0.63mの向拝をとる。高欄付の縁は腰組でうけられ、身舎斗椀を三斗、中備葦股、妻を虹梁大瓶束（笈形付）とし、向拝は海老虹梁でつながれ、向拝虹梁鼻を獅子鼻とする。細部よりみて江戸時代末期の建築である。



海宝院本堂（左） 四脚門（右）

〔四脚門〕

参道の正面にたつ茅葺の門であって、桁行3.14m、梁行2.78mの規模をもち、寛政2年(1790)絵図の焼失をまぬかれた表門に相当する。禅宗様四脚門の形式をもち、室町時代最末期ころの様式を色濃くとどめ、おそらく海宝院創建時代の建築であろう。また当門の様式は正統的な鎌倉地方の室町時代最末期ころの様式をもつことも重要である。構造は四脚門の通制どおり、径30cmの主柱の前後の副柱を径24cmに細くとり、副柱径は主柱のほぼ8割に相当する。主柱上は頭貫と台輪をわたして、実肘木付平三斗をあげ、中備も柱上と同じ斗椀を二具おいて棟木を支える。副柱上は主柱より軽い扱いになって、台輪を省き、実肘木付平三斗を詰組に配して桁をうける。主柱と副柱は腰貫と副柱の頭貫位置で通された貫、および主柱の頭貫下端と副柱頂の桁を海老虹梁で結び、棟木から桁に2軒の垂木をかけて全体の構造が形造られる。このような手法は鎌倉近辺の室町末の系統をひく江戸初期禅宗様四脚門（例、葉山・新善光寺四脚門、鎌倉・妙法寺四脚門、金沢・上行寺四脚門）に共通してみられ、標準的な禅宗様四脚門の形

式とみてよい。

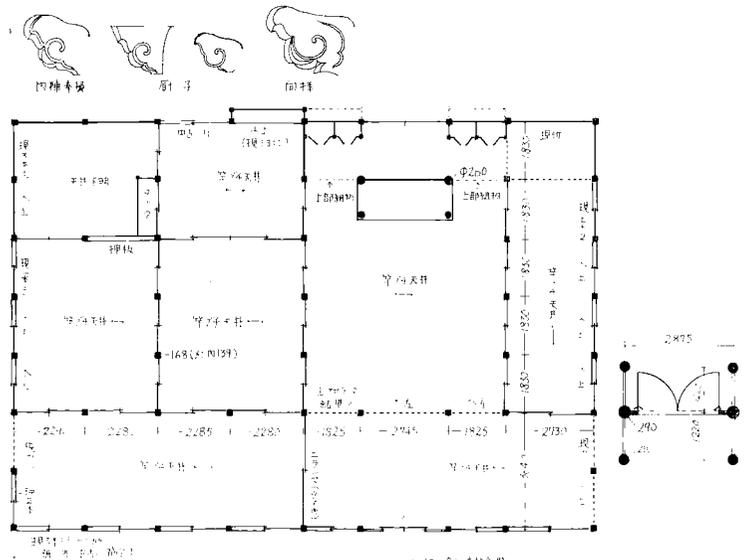
つぎに注意されるのは頭貫鼻の絵様線形であって、主柱・副柱上とも渦文は下から巻きこむ鎌倉地方室町時代絵様線形のもっとも一般的な系統に属する。上述の類例と比較すると、新善光寺四脚門、妙法寺四脚門とも渦文は上から巻きこみ、たとえ全体として室町末風をとどめていても、渦文に関しては近世に入って江戸を中心に入ってきた西日本系の絵様の影響をうけているが、当海宝院四脚門にはこのような江戸の影響はみられない。また渦文の下端は水平に引込まれているが、この点は鎌倉地方では15世紀末から日立ちをはじめたものであり、副柱上頭貫鼻の線形の鎔がやや誇張的なことや、海老虹梁の下端が屈曲しているのも鎌倉地方では室町末以来の特色である。なお、垂木はすくなくとも下から観察した限りでは反りがなく、破風板も江戸中期ころ改められているので、おそらく江戸時代の改修をへているらしい。ただし、桁には若干の反りがある。以上のように当四脚門は室町時代末期の様式をとどめる鎌倉地方の正統的な禅宗様四脚門である。しかし鎌倉地方の禅宗様が保守的であったことを考えると、実年代はおそらく海宝院が創建されたころであろう。

3. 妙光寺 (日蓮宗)

『新編相模国風土記稿』によると、文明3年(1471)の創建といわれ、正保3年(1646)に鐘がつくられ、また子院に善行坊および本成坊(慶長18年の造立と記す)の二坊があったが、詳しいことはわからない。今回の調査当時の近世建造物は表門の四脚門と本堂であったが、本堂は昭和46年10月に改築された。

〔四脚門〕

桁行2.875 m、梁行2.44 mの四脚門であり、現在瓦葺であるが、もとは茅葺であったろう。様式は海宝院四脚門と同様に禅宗様式になり、副柱(径21cm)は頭貫で結ぶが、主柱(径29cm)上は頭貫と台輪を配する。棟通りと側とも中備に二具の実肘木および拳鼻付三斗を配し、梁行は貫と柱頭部の海老虹梁でつなぐ。様式的年代は今回調査した3棟の四脚門の中では海宝院と東呂寺の間に入り、18世紀ころのものであろう。古例にくらべると基本的構成は同じであるが、斗拱が拳鼻付で賑やかである。



妙光寺本堂 (左) 四脚門 (右)

絵様線形も鎌倉地方では18世紀以降の系統に属し、渦巻は上から巻きこんで、やや平たくつぶれた形を示し、渦の筋彫も太く、副柱上の頭貫鼻線形は渦文を二つ上下に配した形式である。これら細部の性質は江戸時代末まではくだらないとみられ、海宝院・妙光寺・東昌寺の各四脚門を比較することによって、当地方の四脚門の変化がうかがえる。

〔本堂〕

柱間数で数えて、桁行8間、梁行7間の規模をもつ茅葺・寄棟造の堂であり、東から第3間目に向拝を設ける。外観は組物等を用いず、桁が柱天にのるだけの簡素な堂であり、軒も一軒である。しかし、堂の平面は一般の6間取を基本にした方丈形式の堂と異なり、住坊と堂を組合わせたような平面である。すなわち堂は、東側4間が桁行5間・梁行7間の密教本堂などに共通した堂形式から西の入側を除いたものに等しく、この西に田字割前面入側付の住坊もしくは客殿を組合わせた形式である。様式的には面取角柱・竿縁天井の住宅意匠になるが、仏間部分は仏壇をとり付けた柱を丸柱とし、その丸柱通り上に頭貫・台輪をとおして拳鼻付三斗組を配する。また仏間部分と前面入側の境は当初結界が設けられていた痕跡があり、結界上部を箆欄間とする。

仏間に隣り合う西側4間は入側の奥に前側15畳2室、後側10畳2室を配列して田字割となる。このうち後側10畳2室のうち東側の室にはもと背面に床（現状、書院）と書院（現状建具構え）があった。西側の室には古材が用いられていたが、当初外部に面する開口部は一間にすぎない閉鎖的な室であった。また西側10畳室とその前側の室との境には押板が一間設けられているのも注意される。このような西側4室配列のうち、後側の西側室は納戸（寝室）、後側の東側室は床と戸棚をもつから客間もしくは住職の居間と考えられ、西側4間に住坊もしくは客殿の要素が認められるのである。堂と住坊を組合わせた形式はおそらく古例を伝えるものであって、今後の口蓮宗関係の近世本堂の調査に示唆を与える。

つぎに様式上よりみると、柱の面が柱径16.8cmに対し面内13.9cmで約8割強と面が大きく、仏間部分の拳鼻や厨子の頭貫・拳鼻等は17世紀後半ころとみられ、軒の垂木に若干の反りと鼻の増しがあるのも従来の鎌倉地方の建築史上の知見では17世紀後半ころまでの特色である。以上によりおそらく当本堂は17世紀末ころではないかと思われる。ただし、当本堂には若干古材の混入がみられるので、あるいは移建等の事情があったかもしれない。なお、前面向拝は後に付け足されたらしいが、頭貫鼻や葺殿などの細部は17世紀末をくだらず、おそらく他の建築から転用したものであろう。

4. 岩 殿 寺（曹洞宗）

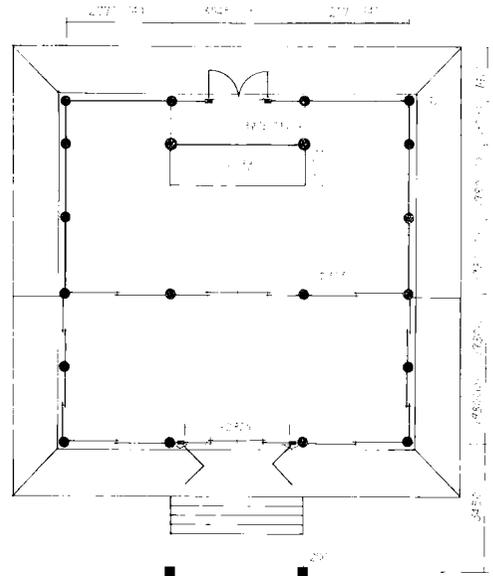
岩殿寺観音堂は古くは巖殿観音堂とよばれ、その創建時は明らかでないが、寺伝によると養老4年（720）僧行基の開創という。鎌倉時代に入ると『吾妻鑑』に頼朝の娘大姫の参詣（文治3年2月23日）や將軍実朝の参詣（承元3年5月15日）を記す。また、建久3年（1192）5月8日鎌倉勝長寿院で修された後白河法皇77日の追福百僧供に「岩殿寺二口」とあるのは、別当坊の存在をしめすものであろう。しかし、このころの岩殿寺の建築に関しては寛喜2年（1230）11月観音堂再建のため礎石を据えたことがみえるだけで具体的なことは不明である。

室町時代の岩殿寺の建築についても史料がなく、不明である。17世紀末貞享2年(1685)に編纂された『新編鎌倉志』に「寺僧の云、養老四年に、行基菩薩の開基なり、其後は寺絶たりしを、七八十年以前に再興して今は曹洞宗、海宝院の末寺也」とあるのをみると、ほぼ17世紀初期慶長ころ寺の再興があったことが伺われ、室町時代末期には相当に衰退していたらしい。また17世紀初めのころの再興は『新編相模国風土記稿』によると徳川家康の代官長谷川七左衛門長綱(慶長9年歿)によるものらしい。なお、岩殿寺文書には天正19年10月10日付の観音免に関する長谷川長綱証文が残されている。

しかし、現在の観音堂は様式上よりみて17世紀初までは遡らず18世紀初めころの様式であり、観音堂内の棟札により享保13年(1728)の再建であることが知られる。わずかに100年足らずで再建されたのは一見不思議であるが、おそらく近世初頭再興の堂が簡単なものであったか、あるいは鎌倉近辺の社寺に大きな被害を与えた元禄16年(1703)震災で被害を受けたためではないかと思われる。享保13年(1728)棟札によると享保再興は住持万英和尚の勧進によっておこなわれ、大工は鎌倉の蔵並本之助藤原政吉および工匠清右衛門であった。この大工名のうち清右衛門は鎌倉名越の長勝寺本堂元禄6年墨書(隅木上端)に発見された「蔵并大工市郎兵衛・三郎兵衛・清エ門」のうちの「清エ門」と同名であり、年代の開きが35年ほどなので、あるいは同一人かもしれない。つぎに観音堂の様式について記す。

〔観音堂〕

山の頂に近い山腹に建ち、桁行3間・梁行5間、寄棟茅葺の堂である。堂の平面は前側2間と後側3間の二部分に分れ、前側が一般信者の礼拝のための外陣、後側3間が本尊を安置した神聖な内陣である。内陣と外陣の境は格子戸で結界され、床の高さも内陣が一段高く、堂四周の縁も内陣と外陣の結界線で床高に一段差がつけられている。また外陣部分前面3間が中央間双折棧唐戸両開・両脇間と両側面各2間が舞良戸引違で、外陣は扉と戸を開ければ明るく開放的であるのに対し、内陣は背面中央間に戸口があるだけで、いちぢるしく暗く閉鎖的である。このように内外陣の結界をもつ点、および明るい外陣に対し内陣を暗く閉鎖的に構えるのは中世の密教本堂に典型的なものであって、明るい外陣に対し暗い内陣と対比させるのは内陣の神秘感を高めるためであった。当堂の堂構成はおそらく曹洞宗改宗前の古い伝統をもつと思われ、『新編相模風土記稿』によれば岩殿寺はもと真言宗であったらしい。また内陣の奥行は柱間数では3間であるが、後端間は他の側面各間の6割でせまい。これは来迎壁背後に通行可能ただけの空間をとつたためであって、当初は現在仏壇が設けられている所が背面中央間からの堂入口となり、内陣後方にたつ2柱の間には板壁が設けられて来迎壁となっていた。



岩殿寺観音堂

堂の平面の基本は和様の密教本堂形式であるが、構造細部は禪宗様を大きくとり入れ、それに和様の細部を自由に配している。すなわち縁付の建物であるのに柱頂には椀が付され、禪宗様の頭貫・台輪をわたり、上部の二手先斗拱をうける。二手先斗拱を用いることも注目すべきであって、当堂のような桁行3間の禪宗仏殿以外の堂で二手斗拱を用いるのは中世に一例くらいしかなく、近世でも霊廟建築をのぞくと例はあまり多くない。一般に中世の三間堂は舟肘木が三斗程度のもが多く、たとえ近世に入って小規模な堂でも程度の高い斗拱を用いる例がますます傾向があるにせよ、当堂が二手先斗拱を用いることは当堂の意匠が本格的であることを示す。当堂の斗拱は横の拡りをもたない和様であり、側面中備も和様の蓑股であるが、桁行方向の中備は各間一具の詰組となる。各間一具とすると中央間が脇間の1.28倍に広いため、中央間の中備間が間延びする嫌いがあり、当堂はそのため中央間の中備間だけ人字形に開いた蓑股を配る。なお、正面中央間および結界中央間の楣と内法間にもかなり彫刻の発達した蓑股を配するが、この手法と軒の彫刻支輪も中世にはみられず、江戸時代に入ってから用いられるようになったものである。また、正面1間に設けられた向拝は単に虹梁でつなぐだけでなく、繫虹梁上に大瓶束をたて、さらに大瓶束頂部と柱頂の斗拱を結んで海老虹梁が配され、意欲的な手法がみられる。ただし、向拝正面の彫刻は煩雑で享保13年としてよいかどうか若干疑問が感ぜられた。

堂の内部は内陣・外陣とも斗拱を出組の一段軽い扱いとし、一面の格天井をはり、あっさりまとめている。また内陣部分で注目されるのは、内陣の奥行が3間であるのに内外陣結界から2間のところで頭貫と台輪を通すことであって、この部分の中央間は柱に残る痕跡からみて当初は来迎壁であったから、内陣の梁後端間は平面的には庇の扱いである。なお、仏壇は簡単に仏壇上の厨子も年代は堂よりずっと新しい時期の作である。ただし、堂内には破損した厨子があり、仏壇内には組物の断片が収納されているが、これらが同一厨子のものか否かは今後の調査にまつこととした。

細部上では頭貫鼻の線形、鑄のない台輪、下端にあまり屈曲のない海老虹梁など、大きくみれば鎌倉地方の室町末以来の系統に属する。しかし、渦文の彫りは太くなり、頭貫鼻の渦巻も上から巻きこみ、鎌倉地方18世紀初めころの特色をしめす。さらに人字形に脚の開いた蓑股や彫刻支輪を用い、鎌倉大工が保守的伝統から離れて江戸の手法を駆使するようになったことがわかる。

以上のように当堂は中世以来の伝統的な密教本堂形式の堂であり、本格的な二手先斗拱を用い、細部の扱いは18世紀に入って鎌倉地方の建築がようやく江戸時代意匠を發揮するようになった過程をしめしている。当堂は棟札により享保13年の年代と鎌倉大工の作であることが判明し、鎌倉地方近世寺院建築様式の展開を知る上で重要な作の一棟といつてよい。

棟札銘（高さ102.8cm、上幅32cm、下幅30cm、山形高さ3cm、厚さ1.2cm、松）

鎌倉郡相州路之大藩民俗殷逸可也而山水之奇亦擅名天下山巒々万水洋々而嶺嶽色之芳瑞飯溪寒之清流宝坊精舍一宗異派分如星如林粵隣郡久野谷郷巖殿寺在鶴岡舊城之東基構古代盡古形勝接寺古記養老年間大和國長谷之菽祖道一上人植福之地也次天平年間行基薩羅開闢而安置大土十一面之像仁王七十七後白川法皇落髮行脚到于此處拜大土之上光明藏從是為坂東第二之靈場也可尚矣草創以來八九百餘歲于今有禱必應于福于智如響如影實四民依怙一方之古禪刹也此年堂宇危傾不能無上雨旁風之憂而寺乏恒産單力難辨是

可忍乎住持萬英持錫踰遍叩朱門白屋且暮十方四衆漸^レ積年而大土之堂落成土梁之日萬英特于山請余曰精神非文字莫足以德願文而以昭後世不得辭系辭其詞曰 得道之識記 行基之遺蹤瑞像現窟窟 法皇謁道場坂東稱第二今古度生莊四民為依怙頂禮世仰皇堂宇久荒涼來往空歎傷住僧化衆檀丹心構一堂再挑好佛日重^レ整光明藏此功德之利地久兮天長玉法與佛法山呼壽無疆 享保第拾三龍集戌申臘月十八日大日本東海路相州三浦郡現住海寶禪院沙門釋悅巖英欲撰誌

海雲山巖殿禪寺現住

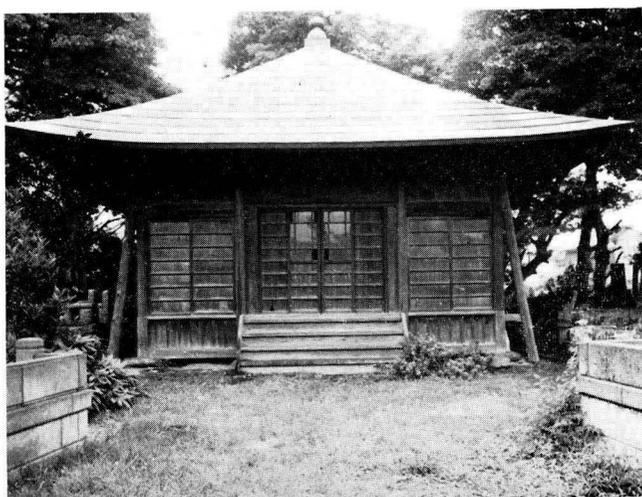
萬英謹言

相州鎌倉郡亂橋村藏並本之助藤原政吉

工匠 清石衛門



東昌寺四脚門



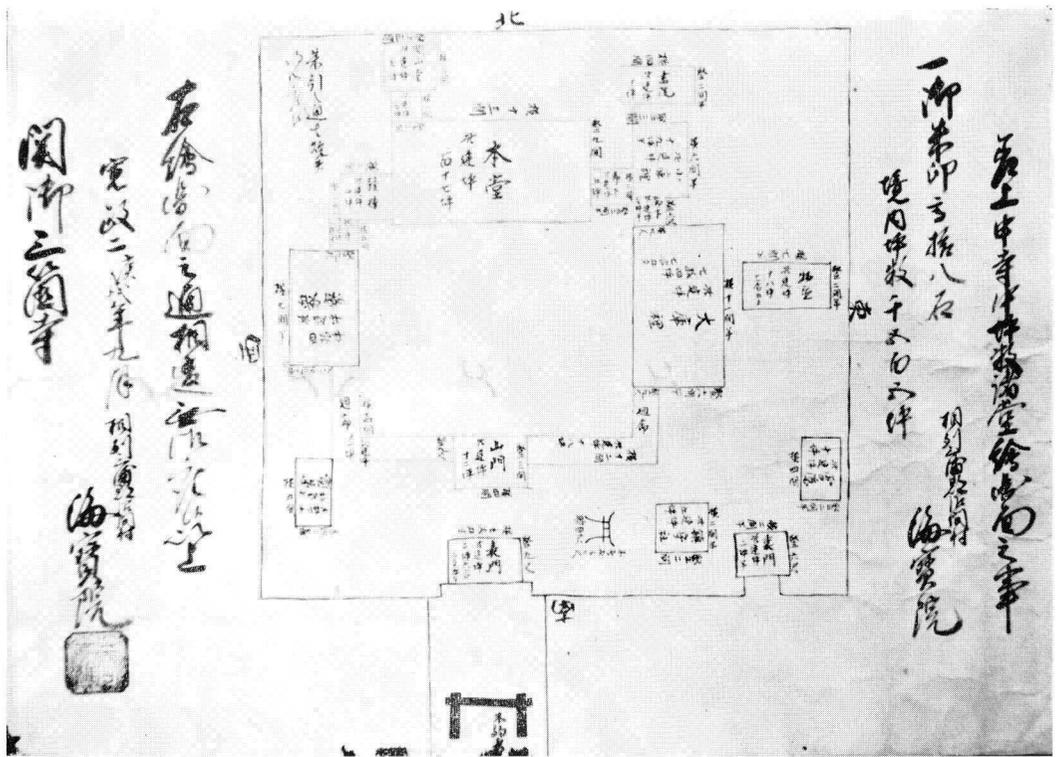
東昌寺阿弥陀堂



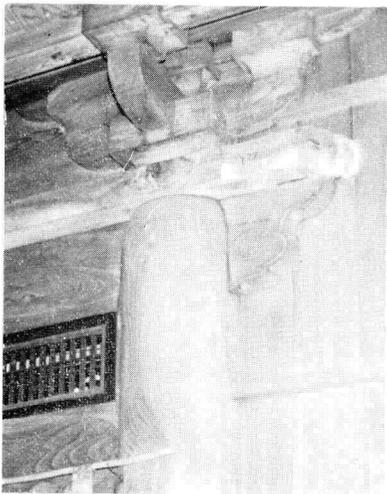
東昌寺阿弥陀堂部分



東昌寺阿弥陀堂内部



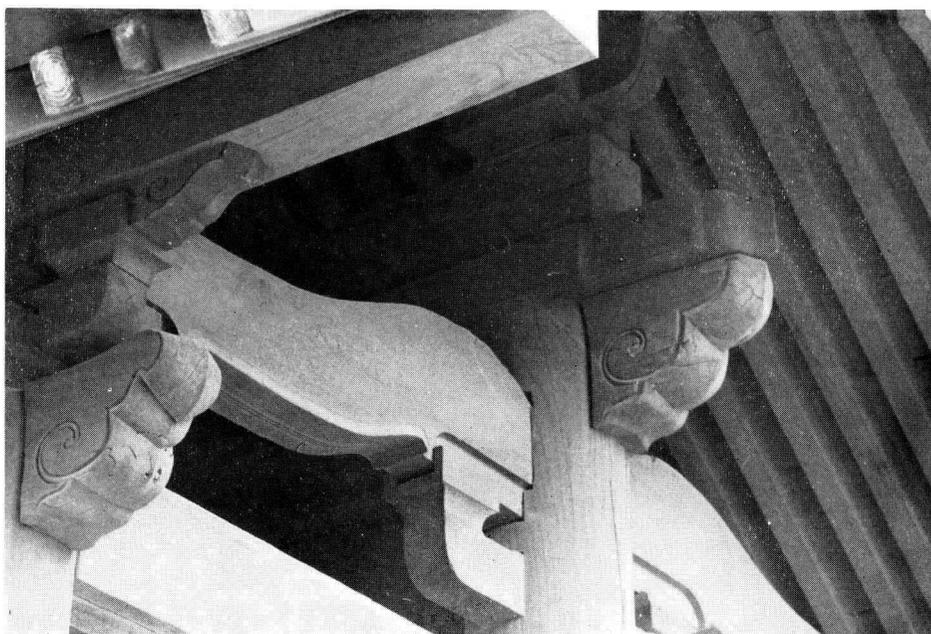
海宝院寛政2年繪図



海宝院本堂内陣部分



海宝院鎮守部分



海宝院四脚門部分



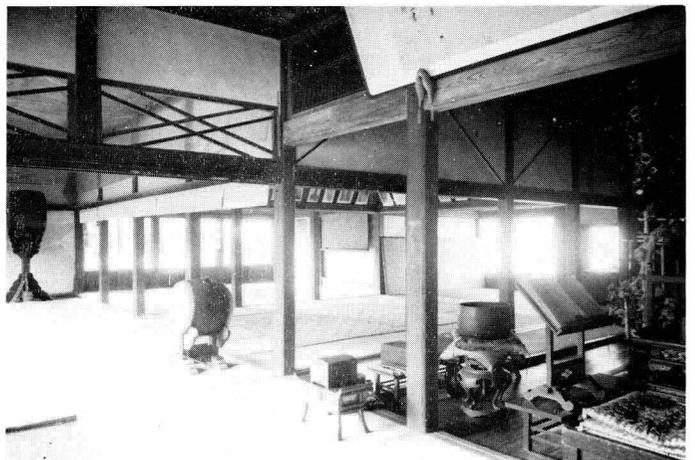
海宝院四脚門全景



妙光寺四脚門



妙光寺本堂外觀



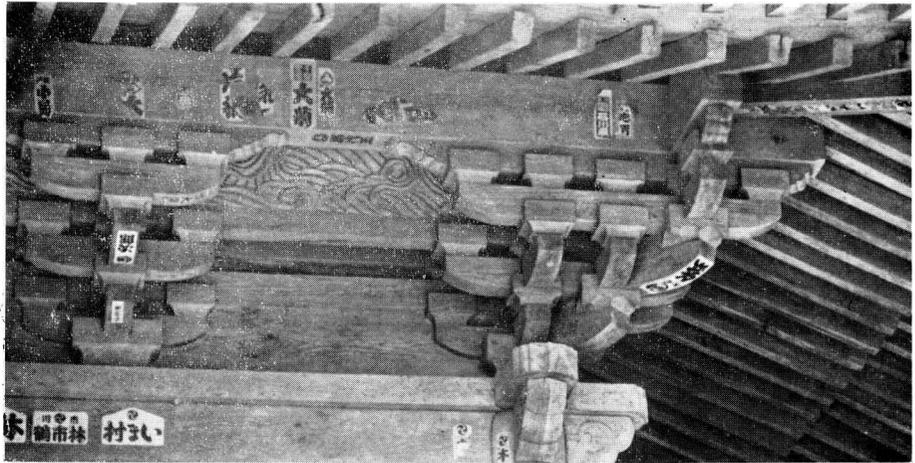
妙光寺本堂内部

岩殿寺観音堂全景

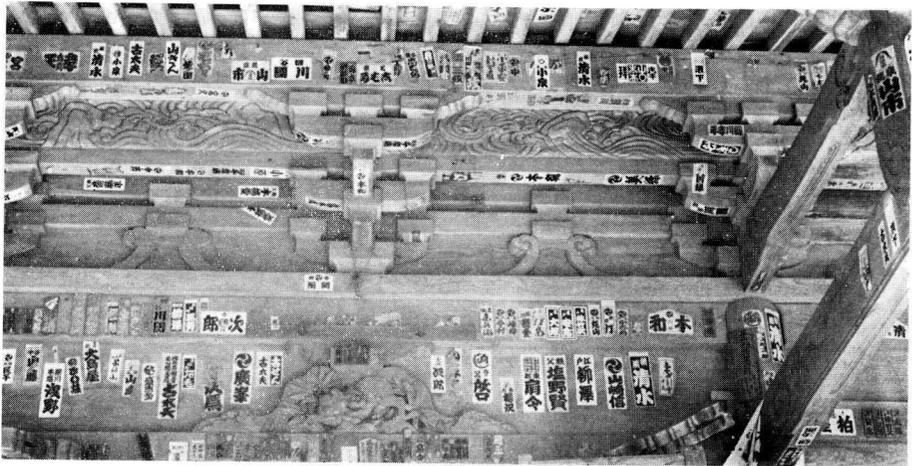


岩殿寺観音堂向拝





岩殿寺観音堂隅斗拱



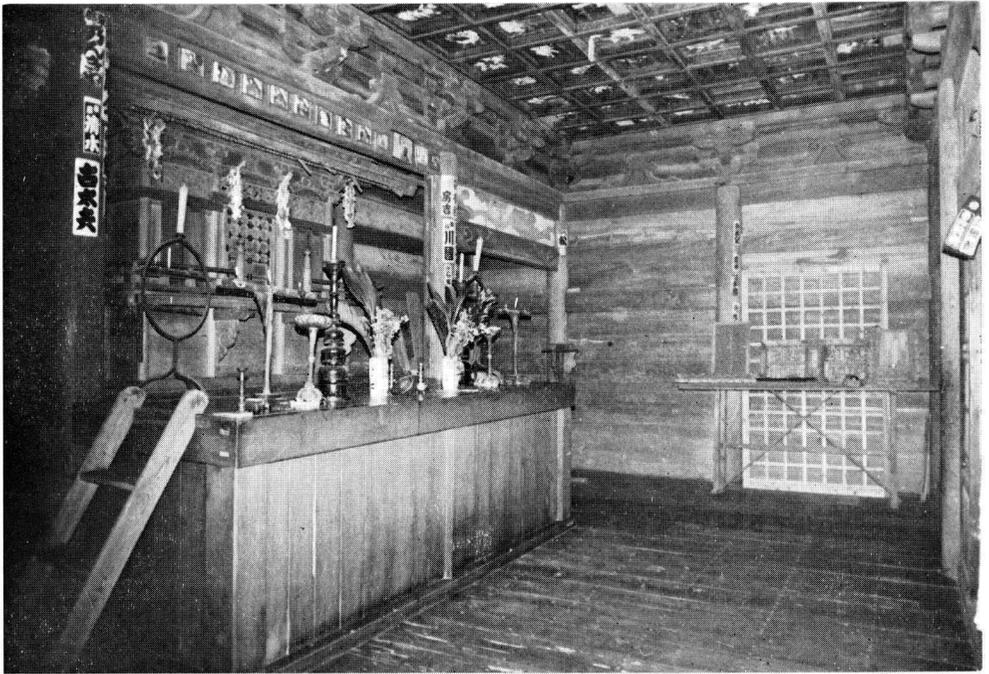
岩殿寺観音堂正面斗拱



岩殿寺観音堂向拝部分



岩殿寺観音堂外陣



岩殿寺観音堂内陣

寺史と彫刻・絵画

三 山 進

妙光寺の寺史と彫刻・絵画

I 寺 史	26
II 彫 刻	26
(1) 木造日蓮上人坐像	(8) 木造不動明王坐像
(2) 木造日蓮上人坐像	(9) 木造愛染明王坐像
(3) 木造日朗上人坐像	(10) 木造四天王立像
(4) 木造日昭上人坐像	(11) 木造大黒天立像
(5) 木造文殊菩薩坐像	(12) 木造三十番神及び隨身像
(6) 木造普賢菩薩坐像	(13) 木造清正公坐像
(7) 木造妙見大菩薩坐像	
III 絵 画	34
(1) 紙本着色仏涅槃図	

法性寺の寺史と彫刻

I 寺 史	37
II 彫 刻	37
(1) 木造釈迦如来立像	(3) 木造日蓮上人坐像
(2) 木造釈迦・多宝両如来坐像	(4) 木造天照太神及び両脇侍像

岩殿寺の寺史と彫刻

I 寺 史	40
II 彫 刻	42
(1) 木造釈迦如来坐像	(3) 木造聖徳太子立像
(2) 木造韋駄天立像	(4) 木造十一面観音立像

妙光寺の寺史と彫刻・絵画

I 寺 史

妙光寺は日蓮宗、山号は法久山。文明3年(1471)の開創、開山は日円(文明4年没)。開基は松岡雅楽助。松岡家については『新編相摸国風土記稿』三浦郡久野谷村の条に、

「旧家六郎兵衛 里正なり、先祖富永三郎左衛門、永享中鎌倉持氏に仕へ、松ヶ岡に居住す、後故有て当所に整居し松岡を家号とし富永を実名とす、応仁二年死す、其子大炊助早世し次子雅楽助跡を襲ぎ、里正となりしより世々其職に居り、今の六郎兵衛に至ると云ふ」と記している。

さらに同書によれば、妙光寺の開創事情は次のようなものである。

濃州の沙門賢信が富永三郎左衛門の家に逗留中、ある日、どこからともなく読経の声がきこえてきた。不思議に思ってたずねもとめたところ、その声は地中からひびいてくる。そこで賢信がその場所を掘ってみると、岩窟のなかに日蓮上人像があった。賢信は奇瑞におどろき、像をまつるための一堂を建てたが、やがて文明3年になって松岡雅楽助が父母の菩提を弔うべく、規模ととのった寺院に改めた。それが妙光寺であり、山号は父の、寺号は母のそれぞれ法名からとった――。

そして、賢信の発見した像が、いまも根本本尊として尊崇されている小像だ、とつたえる。〔彫刻の項参照〕

かつては境内に番神堂〔日蓮像出現の地に最初建てられたのがこの堂で、妙光寺完成後は三十番神像をまつり、本の坊と称したという〕をはじめ、慶長18年(1613)造立の善行坊・本成坊などの子院があった。江戸時代、村内だけでなく、江戸あたりの信者にも支えられ、かなり栄えたことは、以下にみる彫刻の造立・修理等の銘文からわかる。

II 彫 刻

(1)木造日蓮上人坐像

像高16.6cm

寄木造、玉眼嵌入。首は襟間でさしこみ。彩色は厚い。右手に笏、左手に経巻をもち、両袖を左右にひろげた通常の日蓮上人像の形である。現在は本堂向って右側の壇上に厨子に納めてまつられているが、以前は現本尊の祖師像〔後述〕胎内に納入していたといい、寺では上中出現の像と伝えている。『新編相摸国風土記稿』妙光寺・番神堂の項に、

「相伝ふ濃州の沙門賢信当時、富永〔寺史を参照〕の宅に逗留せしに読経の声聞へしかば其声^(ママ)を跡して爰に到り、地を穿見るに岩窟あり、中に日蓮の像を得、依て一字を結て安置す、爰に文政元年なり、其後文明三年に至て当寺建立ありしかば則其像を移して本尊とす、よりにて此堂に番神を安置せしと云故

に此堂を本の坊と称す」

と述べ、さらに寺史のあとに、「本尊三宝祖師 祖師は土中出現の像なり」と記しているのがこの像にあたと伝えているわけである。〔番神堂項の文政は前後の年紀から考えて文正の誤りであろう〕

文正元年(1466)の発見とすれば、像の造立は遅くとも15世紀半ばということになる。いま、胎内には文書が納入されており、それを読むことができたなら、あるいは伝来についてもより詳しい事実が判明するだろうが、現状では取りだせない。従って造立年代についても推測を重ねる外ないが、袖張も21cmという小像とはいえ、全体にまとまりは良く、とくに面部の彫技はしっかりしている。一見、桃山時代ごろか……との印象をうけるものの、小像の場合、制作時期の判定がきわめてむづかしい。ここで一応断定は避け、胎内納入文書が読める折を待つことにする。

(2)木造日蓮上人坐像

像高53.2cm

現在の本尊。寄木造、玉眼嵌入、首さしこみ。厚手の彩色がほどこされてお、台座框底に次のような墨書銘がある。

『日法聖人御作有折仏之御躰像内躰

奉彩色日蓮大菩薩

維時享保元貞稔

日相(花押)

七月日 』

日蓮上人像としては通常の形で江戸時代の作である。

(3)木造日朗上人坐像

像高27.5cm

次の日昭上人像とともに、上記祖師像の左右にまつ。寄木造、玉眼嵌入、首さしこみ。岩絵具の彩色が厚い。台座下框底に以下のような墨書銘があり、文政6年(1823)の造立であることがわかる。

『(文)□政六癸未正月廿一日

(日朗)
□□菩薩御像

奉安置之 』

『昭朗兩像共(ママ)当時常題目□

之山内木成坊江安置之□□者

祖師堂御宮殿兩脇 可奉安置

変也。』

(妙)
『□厚日場尼。』

『開眼』

文中にみえる本成坊は妙光寺子院で、『風土記稿』によれば、慶長18年(1613)の建立という。今は廃。

(4)木造日昭上人坐像

像高27.2cm

寄木造、玉眼嵌入、首さしこみ。彩色は厚い。日朗上人像と同様、両手は合掌。やはり台座框底に次の墨書銘があり、文政6年(1823)の造立である。

『^(ママ)老僧日昭上人御像当時本成坊正安置之 文政六癸未正月廿一日 願主妙厚日場尼□元』

『越後三嶋郡□武村法輪

出来ニ付

□岡建之

一像ナリ 』

『□朗二造□

時常□□□

□塔中本□

□安置

後ニ者

祖師堂宮

両脇正安置

□□立 当山廿五嗣法還如院□□(花押) 』

(5)木造文殊菩薩坐像

像高18.3cm

獅子上の蓮華座の上に、両袖を長く垂らして安坐し、左手に蓮華をもつ。(台座総高35.8cm) 寄木造、玉眼嵌入。全体に彩色は厚い。最下部の板状台座裏に次のような墨書銘がある。

『 願主新倉佐兵衛息災延命者也

奉造立処 為妙柳菩提也 □□(花押)

文殊師利菩薩 為妙項菩提也

奉彩色 為□□□□□ 丁時明曆四成年

五月吉日

□□師□□□ 現当二世

願主日義(花押)

□□ 大願成就之処

□□ 願主森谷角左衛門 』

長嶋十良左衛門

小林庄左衛門

□扇ヶ谷□

今小路住

大仏工

伊沢運貞

董能（花押）

、作之 』

これらの銘から、慶応3年(1867)、妙光寺内の善行院に納めるべく、伊沢運貞によって造立されたことがわかる。運貞は銘に明らかな通り、鎌倉扇ヶ谷に仏所を構えていた鎌倉仏師の1人である。鎌倉仏師では後藤・三橋両家の活躍がとくにめだつが、伊沢姓の仏師は江戸後期にはいつてから史料がふえる。運貞の事蹟としては安政2年(1855)、相模大山寺の木造五大明王像の修理・再興のことのほか幾つかが判明している。妙光寺像は人形風の小品で彫技も硬いが、幕末の鎌倉仏師を知る上、資料的に興味深く、また、当時の妙見信仰をさぐる上にも好箇の作品といえよう。

(8)木造不動明王坐像

像高19.7cm

いわゆる^{しつしつ}瑟瑟座(高35cm)上に坐し、火焰光背を背負い、右手に剣、左手に鞆索をもった通常の不動明王像。寄木造、玉眼入り、彩色は新しい。像底部に次の墨書銘がある。

『文政七中

□月吉日

(不動カ)

□明王

□崑□

□ □ □ 』

次の愛染明王坐像とともに文政7年(1824)に造立された像である。

(9)木造愛染明王坐像

像高22.0cm

光背がたて長の卵形に近い形なのを別にすれば、六臂三日の通常の愛染明王像で、寄木造、玉眼嵌入、彩色は新しい。(光背高34.2cm、台座高19.7cm)像の底部に次の墨書銘がある。

『文政七□

江戸

三崑屋藤□

三崑屋□□

御再興

愛染明王

□五世日□（花押）』

文政7年(1824)の造像に際しての銘とみてよい。

(10)木造四天王立像 4 軀

像高：持国天像40.2cm

増長天像41.7cm

広目天像40.5cm

多聞天像41.5cm

いずれも岩座上で邪鬼を踏まえて立つ。寄木造、玉眼嵌入、彩色は厚い。それぞれ台座裏に次のような墨書銘がある。

〔持国天像銘〕

『十九世

日述（花押）

施主

飯田源兵衛』

〔増長天像銘〕

『享保□□

十九□□』

〔広目天像銘〕

『十九世 日述（花押）』

〔多聞天像銘〕

『享保九^甲辰年七月十六日妙光寺

十九世日述（花押）

□□彦十良 』

これらの銘文から、享保9年(1724)にそろって造立されたことがわかる。持国天・増長天両像は一応強い動きの表現を試み、4軀それぞれの姿に変化をつけるものの、全体に形式化していることは否めない。

(11)木造大黒天立像

像高15.4cm

米俵上に立ち、右手に小槌をもち、袋を背負う。(台座高7.5cm)寄木造、彫眼。きわめて素人的な感覚の作品である。台座底に墨書銘の書かれた痕が残るが、現在は判読できない。ただ、おなじ場所

に、

『慶長拾七年 日応花押』

と記した紙が貼りつけられている。銘を写したものとすれば慶長17年(1612)の造立、ということになるわけである。

(12)木造三十番神及び隨身像 32軀

像高10.5～14cm

三十番神は一月三十日間、毎日交替して国家の安穩を祈るように組み立てられた次のような神々をさす。〔佐和隆研編『仏像図典』による〕

熱田大明神・諏訪大明神・広田大明神・気比大明神・気多大明神・鹿島大明神・北野大明神・江文大明神・貴船大明神・天照皇太神・八幡大菩薩・加茂大明神・松尾大明神・大原大明神・春日大明神・平野大明神・大比叡大明神・小比叡大明神・聖真子権現・客人大明神・八王子権現・稻荷大明神・住吉大明神・祇園大明神・赤山大明神・建部大明神・三上大明神・兵主大明神・苗鹿大明神・吉備大明神。

一説によれば三十番神の信仰は最澄が平安初期比叡山を開いた折にはじまるというが、実際には平安後期、いわゆる本地垂迹説が発展したころから素地が出来、平安時代も末期ごろから鎌倉時代にかけてしだいにひろがっていったものと考えられている。〔以下、三十番神信仰については宮崎英修氏『日蓮宗の守護神』による〕そして、日蓮宗がこれを取入れることによって一層さかんとし、のちには三十番神は日蓮宗の守護神といわれるまでになった。

伝説では、日蓮が叡山で修行中、毎朝読経の時異形の人物が現われて耳を傾け、経が終わると姿を消すので、或る日名を訊ねたところ、法華経守護の三十番神だと名のつたため、日蓮は神名を記した上、神々の姿を画工に描かせ、以来、厚く尊崇したという。が、宮崎氏は日蓮宗が三十番神信仰を受容したのは14世紀にはいつてからで、日像がその最初であろうとされている。くわしくは同氏の著書によられたいが、日蓮宗ではその後番神堂の設置も相つぎ、法華経守護の神々としての信仰が興隆し、現在までうけつがれているのである。

妙光寺像は三十番神に随神像2軀を加えた32体からなり、いずれも寄木造、彩色は厚い。すべて人形風の小像だが、次のような銘文がみられ、造立時期が明確な点、資料的にも興味深い。

〔天照皇太神立像台座裏墨書銘〕

『正徳三癸巳十一月十五日

十日

再興施主江戸

靈巖巖

田井三右衛門妻

息災延命

法久山妙光寺

天照^{十八世}
日相（花押）』

〔八幡大菩薩立像台座裏墨書銘〕

『正徳三癸巳十一月十五日

十一日

施主江戸靈巖巖

田井三右衛門妻

為息災延命信力増進也

八幡^{十八世} 日相（花押）
』

〔隨身半跏像の内1 軀台座裏墨書銘〕

『正徳三〇

十一月
〇

奉造立隨身 』

〔隨身半跏像の内1 軀台座裏墨書銘〕

『〇正徳三癸巳十一月

奉造立隨身

右

妙光寺十八世

日相（花押）』

銘のある像の方がすくないが、すべて正徳3年(1713)の造立とみてよい。

(13)木造清正公坐像

台座共総高32.5cm

豊臣秀吉に仕えて功があり、関ヶ原合戦では東軍に加わり、戦後徳川家康から肥後一国と豊後の一部54万石を与えられた加藤清正(1562～1611)の名は余りにも名高いが、その清正を死後神格化したのが清正公である。清正は熱心な法華信者であり、「南無妙法蓮華経」のいわゆるお題目を書いた旗指物を用いた。日蓮宗寺院にその像をまつのも不思議ではない。

妙光寺像は岩座上の倚像。寄木造、木眼。ひげ題目を彫った旗指物もそえる。右目が欠落するのをはじめ、全体に破損がめだつ。背板は別木で、外すと胎内に木版の「妙法蓮華経」が納入されており、その巻首に次のような墨書がみられる。

『宝永三^丙戌年九月九日

読誦妙経開眼

遠沾院

日亨（花押）

清正公大神儀 』

宝永3年(1706)の造立で、人形風の小像の上、彫りは素人風な荒々しさを示すものの、逗子地方では珍しい作例である。

以上の外、妙光寺にはまだ数点の彫刻があった。そのうち、木造大天女倚像（総高11.8cm）には、台座背面に

『開眼師

日通（花押）

造立主

沙門林月^日』

の墨書銘がある。

III 絵 画

(1) 紙本着色仏涅槃図 1幅

寸法：画面たて190.2cm

よこ122.8cm

保存は良く、彩色・描線ともに鮮明である。通常の涅槃図だが画面上部中央に、墨および金泥で「南無妙法蓮華経」と大きく書かれているのがめだつ。また、箱には、

『涅槃絵 相州三浦郡久野谷郷

法久山

妙光寺^{常在}』〔蓋表〕

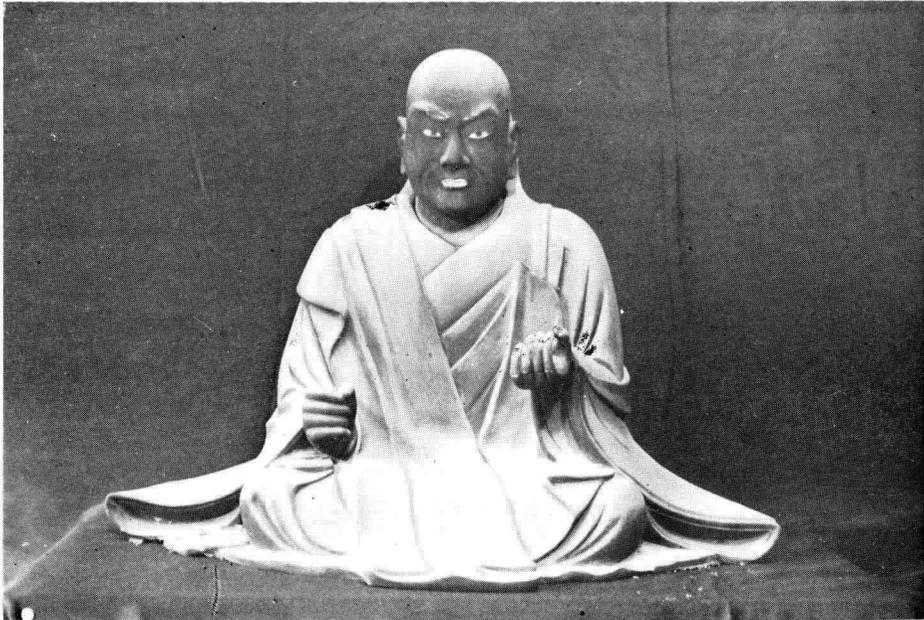
『正徳三^癸巳^巳稔二月中旬五日 施主^上武州江戸住田井源四郎妻』十八世日相代』〔底〕

のそれぞれ墨書がある。正徳3年(1713)ごろの作品とみてよいであろう。



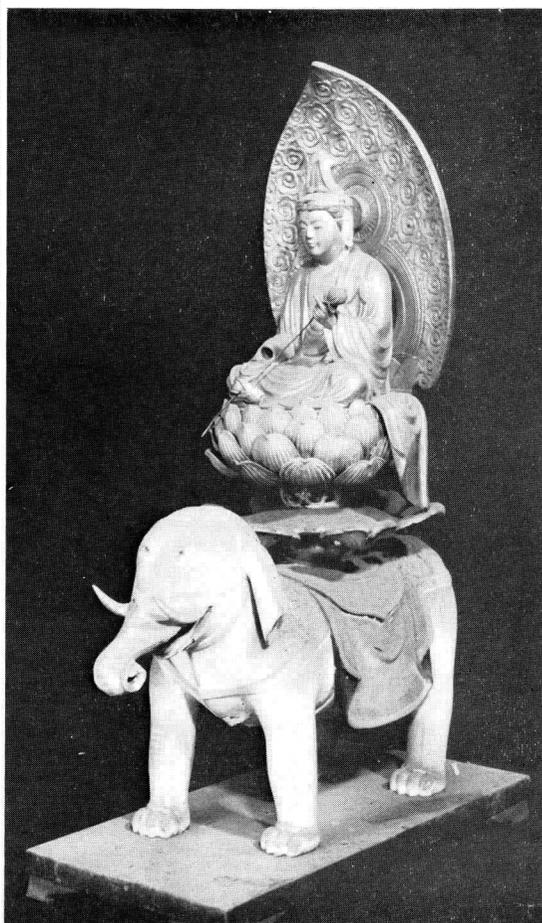
妙光寺
木造日蓮上人坐像

妙光寺 木造日蓮上人坐像





妙光寺
木造文殊菩薩像



妙光寺
木造普賢菩薩像

法性寺の寺史と彫刻

I 寺 史

法性寺は日蓮宗、山号は猿島山。開山は日蓮の高弟日朗(1243～1320)。開基は日朗の弟子朗慶。寺のおこりと山号の由来とについては、江戸時代の地誌にふた通りの話がみられる。

まず『新編鎌倉誌』では――。

「御猿島山(中略)相伝ふ、日蓮鎌倉へ始て来る時、此山の岩窟に居す。諸人未だ其人を知事なし。賤み憎て一飯をも不送。其時此山より猿ども群り来て畑に集り、食物を嘗て日蓮へ供じける故に名くと云ふ。其後日蓮、猿どもの我を養ひし事は、山王の御利生なりとて、此山の南に法性寺を建立し猿島山と号す。(中略)寺建立は弘安九年也と云ふ」

『鎌倉攬勝考』もこの話をうけて同様内容の記事をかかげるが『新編相摸国風土記稿』ではかなり異なる。すなわち、

「寺伝に文応元年八月廿七日夜祖師鎌倉松葉ヶ谷の厄に逢て此所に遁れ来り、幄中に籠居す、時に白猿三匹来て食物を供す、師喜悅し宗法弘通の後此所に一寺を建立すべき由を弟子日朗に命ず、朗其事を果さずして卒す、其弟子朗慶、志を継堂宇落成す、故に日朗を開山とし朗慶を開基とす」

というのである。いずれにしても伝説的要素が強いが、『風土記稿』の説の方が事実に近いとみてよいだろう。朗慶は元亨3年(1323)に没しているから、寺の完成は日朗没年の元応2年(1320)も間もない頃となる。なお、日朗は池上本門寺近くの南窪の草庵で死去したが、遺言により法性寺に納骨された。法性寺营造が日朗在世中からはじまっていたことがわかる。鎌倉妙本寺刊のパンフレット『日朗上人』は、

「蓋し朗師は十二才得度以来その一生の殆んど全部を鎌倉の地で過ごされた。朗師にとって鎌倉の地は、他の何処にもまして忘れ難い地であったに違いない。又宗祖の御命令により宗門弘通布教の根源地と定められた鎌倉を何時までも見守って行き度いと願われたために御墓所を此所に定められたものと拝察するものである」

と記している。以後、法性寺は本門寺・妙本寺の奥の院と号され、厚く尊崇されつづけてきた。

II 彫 刻

(1) 木造釈迦如来立像

像高49.4cm

寄木造、玉眼嵌入、漆箔。光背(高70cm)は後補。小像だが、全体に中世に流行したいわゆる宋風を模している。台座框裏に次の墨書銘がある。

『鎌倉扇谷仏師大朗作之

則大峯之旦那かたみ

正保四年い二月九日』

正保4年(1647)の造立時期と作者名も明かなわけである。が、いまのところ、鎌倉仏師大朗の名は他に見出されておらず、どの系統の仏師なのか定かでない。

(2) 木造釈迦・多宝両如来坐像

像高：釈迦21.4cm

多宝21.4cm

多宝塔高 47.4cm

多宝塔一基に釈迦如来(向って左)と多宝如来(向って右)の両像を配した一塔両尊像であり、この種の像は口蓮宗寺院によくまつられている。寄木造。次の2種の銘文から天保12年(1841)の造立であることがわかる。

〔多宝塔背面刻銘〕

『天保十二^辛年 前中山

勅賜僧都日任(花押)

九月吉祥日 満百世 』

〔台座下框墨書銘〕

『天保^辛年九月日 東都本町三丁目住仏師万屋新助作之』

江戸仏師がいつごろから仏所を形づくり、活動を開始したのか、明確な時期はまだ明かにされていないが、17世紀後半には成立していたことは確かである。彼らはたんに江戸においてだけでなく、相模国の寺院のための造立もおこなっており、幾つかの作例が紹介されている。万屋を名のる仏師では、寛保元年(1741)に鎌倉長谷寺木造観音三十三応現身像を修理した善兵衛がある。しかし、法性寺像作者の新助とのつながりなどは今の段階では定かでない。

(3) 木造日蓮上人坐像

像高85cm

祖師堂に安置。寄木造、玉眼嵌入。首・両手首先ともにさしこみ。面部肉色に彩色、眉は墨、唇は朱でいずれも鮮明。両手で経巻を開く通常の日蓮上人像で、膝張74cm、面長29.7cmと、全体に量感はやたかであるが、着衣のひだの刻出などは硬い。造立時期の推定は後考にまちたい。ちなみに、持経の奥書には大正3年10月の年紀がある。

(4) 木造伝天照太神及び両脇侍像

像高・中尊32.0cm

脇侍21.4cm

21.2cm

中尊は岩座上の倚像、両脇侍は立像。いずれも寄木造、玉眼嵌入。向って右脇侍像の面部前面と左脇侍像の左足首先とは後補。三体とも色彩はよく残る。寺伝では両脇侍を、フトダマノミコト、アメノコヤネノミコトとそれぞれよび、明治年間に千葉県から移されたという。江戸時代の作と思われる。



法性寺
木造日蓮上人坐像



法性寺
木造天照太神及び両脇侍像

岩殿寺の寺史と彫刻

I 寺 史

岩殿寺は曹洞宗、山号は海雲山。坂東観音札所の第2番として名高い。古くには海前山と号し、真言宗に属していた。禅刹に改めたのは、慶長20年(1615)に没した一機俊宗が中興した折である。開創は養老6年(722)といい、寺蔵の縁起〔註〕は次のような話をつたえている。

奈良時代、鎌倉に下向した徳道上人がこの地の霊地であることを知り、里人たちにやがて浄刹になるであろうと予言したところ、はたして間もなく行基が来てみずから石の十一面観音菩薩を刻んで安置した。これが養老6年のことで、岩殿寺の名は岩窟があたかも殿字のようであったところからつけられた――。

そして、さらに縁起は花山・白河両法皇の参詣もあり、鎌倉幕府が設置されると頼朝や実朝の尊崇を得て栄えたが、その後しだいに衰え、ようやく徳川家康の保護をえて復興するにいたった、とつづける。

現在、奈良時代の創建を裏づける確実な資料は残されていない。信頼できる史料に岩殿寺あるいは岩殿観音堂の名が現われるのは『吾妻鏡』からである。いくぶん煩わしいが、以下、同書の関係記事を引いてみる。

○文治3年(1187)2月23日。

依_二大姫公御願_一。於_二相摸国内寺塔_一。被_レ修_二誦經_一。(中略)姫公参_二岩殿観音堂_一給云々。

○建久3年(1192)5月8日。

法皇(後白河)四十九日御仏事。於_二南御堂_一被_レ修_二之_一。有_二百僧供_一。(中略)僧衆。鶴岡廿口。勝長寿院十三口。伊豆山十八口。筥根山十八口。大山寺三口。観音寺三口。高麗寺三口。六所宮二口。岩殿寺二口。大倉観音堂一口。(下略)

○建久4年(1193)8月29日。

御台所詣_二岩殿観音堂_一給。北条五郎被_レ候_二御共_一。

○同年9月18日。

将軍家令_レ詣_二岩殿大蔵両観音堂_一給。姫君御不例之時御立願云々。

○建久5年(1194)6月17日。

将軍家若公令_レ通_二夜岩殿観音堂_一給。其間有_二相摸_一。(下略)

○元久元年(1204)4月18日。

将軍家依_二御夢想之告_一。参_二岩殿観音堂_一給。遠州。并四郎。五郎等主、及広元朝臣以下扈從如_二雲霞_一。(下略)

○承元3年(1209)5月15日。

御_二参神嵩并岩殿観音堂_一。(下略)

○建暦元年(1211)5月18日。

御台所御參岩殿觀音堂。武州扈從云々。

○寛喜元年(1229)3月14日。

武州室詣岩殿觀音堂給。(下略)

○寛喜2年(1230)11月11日。

今日。巖殿觀音堂居礎引地云々。勸進上人西願云々。

○貞永元年(1232)12月18日。

岩殿觀音堂加修理之後。今日遂供養。導師三位僧都頼兼也。為滅門之由。陰陽道雖加難。就觀音緣日。勸進聖人西願宥用之云々。

12世紀末から13世紀前半にかけての記事がみられ、頼朝・政子・実朝などの尊崇がきわめて厚かったことがわかる。しかも、12世紀末ごろには相模国内でも屈指の名刹であった事実が、文治3年や建久3年の記載から推察できる。後白河法皇の四十九日仏事に当って僧衆を出した寺々の中で、鶴岡八幡宮や勝長寿院にくらべれば岩殿寺の2口はすくないとはいえ、それでも大倉觀音堂(杉本寺)よりは多く、当時相当の規模をそなえていたことは明かである。そしておそらく寛喜2年から貞永元年にかけての工事で、いっそう伽藍が整備されたに違いない。

これらの事実から、すくなくとも次のような推測を下すことは可能であろう。岩殿寺は神武寺と同様、鎌倉幕府設置以前のかかなり古い時期に成立しており、三浦半島の代表的な靈場のひとつとして信仰されていた、と。いまの段階では、正確な開創時期を示す信頼度の高い史料は見出されないため、縁起に従っておくほかはない。現在はすぐ近くまで住宅が建ち並び、背後の丘陵も裏側は切り開かれているものの、『新編相模国風土記稿』所載の境内図をみると、かつては、高い丘陵に囲まれて木々も多く、静寂な雰囲気にも包まれた一画であった。人びとに神秘感を抱かせるに十分な靈域だったと想える。奥の院とよばれる岩窟内の石造十一面觀音像がまずつくられ、それをまつための觀音堂が設けられ、ついで別当岩殿寺が成立……というような順序でまとまった寺院に成長していったのではないだろうか。

想像はともあれ、鎌倉幕府の保護をうけて栄えた岩殿寺も、幕府滅亡後は次第に衰えたいが、室町時代にはまだ相当の賑いをみせていたことは、

「相州三浦岩戸ノ觀音御戸開キ、嘉慶二戊辰三月廿八日ヨリ四月晦日マテ、四月卅日^子_日參詣申、寺中僧達多分參詣アリ末代ノタメ記也」という金沢文庫古文書の一通からもうかがわれる。〔註2〕が、室町末期にはかなり衰退した様子で、縁起のひとつは、

「七堂伽藍モ物換り星移リテ天正ノ頃堂宇破壊ニ及ビ云々」

と記し、『相模風土記稿』は以後の復興について、

「然るに年を逐て衰廢せしかば御入国の後泉令長谷川七左衛門長綱堂宇を再建し、且申請て堂領五石の御朱印を賜はる、是天正十九年十一月なり、其地小坪村にあり」

と記述する。徳川家康治下に再興がおこなわれたわけである。寺蔵の過去帳には、

「当寺開基海宝院殿節叟玄忠居士

長谷川七左衛門尉 長綱公

慶長九年四月十二日

「永平門下当寺開山一機俊宗和尚 慶長廿寅六月廿八日」

の記載がみられる。最初に記したとおり、この中興に際して新しく曹洞宗寺院として出発し直したのである。

以後、江戸時代から現在まで観音札所岩殿寺への信仰は連綿とつづいているが、明治年間、泉鏡花がしばしば訪れ、その作品中にも取上げただけでなく、晩年には観音堂前に池を寄進したこともよく知られている。いまでも残る鏡花の池がそれである。

註1. 縁起は、寛文6年(1666)・享保7年(1722)のそれぞれ年紀をもものものと、近時編まれたものとの3種がある。

註2. 金沢文庫古文書6767。引用は「金沢文庫研究」第148号所載のものによる。

II 彫 刻

(1) 木造釈迦如来坐像

像高24.5cm

九重蓮華座(高23.3cm)の上に坐し、定印を結ぶ。玉眼嵌入。首は襟間でさしこみ、底部布貼り。肉身部漆箔、衣は朱。いわゆる朱衣金体である。光背は透彫蓮弁形の挙身光。胎内に次のような墨書のあ
る文書が納入されている。

『 文化十^(二)□乙亥歳

本尊釈迦如来 彩建立

□月吉日 当寺九世太林叟

□^(仏)師 鎌倉扇ヶ谷加納伊織知寧□』

文化12年(1815)、加納伊織が造立したことがわかる。鎌倉仏師のうち加納姓を名乗る者は江戸時代も半ばごろからめだちはじめ、いままでのところ、元禄16年(1703)に横須賀市東漸寺木造地藏菩薩半跏像の修理にたずさわった加納甚兵衛と同数馬の名が知られている。数馬はまた宝永4年(1707)には鎌倉市白山神社木造毘沙門天立像の台座を造っている。今後の調査でさらに加納姓仏師の事績が明らかになってゆくことであろう。

像は小さく、造立年代も幕末に下るが、全体にひきしまった彫技を示し、面部や衣文の表現に鎌倉時代の作品にならった痕が明白である。江戸時代鎌倉仏師の作風を知る上に興味深い一例といえる。

(2) 木造韋駄天立像

像高28.4cm

韋駄天は周知のように、一説にはシヴァ神の子といわれ、走力がすぐれて邪神を除く威力をそなえ、

釈尊涅槃の折には遺法護持にあたったといわれる。わが国ではとくに禅宗寺院の厨佛にまつられることが多く、鎌倉地方では建長寺や浄智寺に遺例がみられる。

岩殿寺像は甲冑を着し、胸前で合掌する通例の形。寄木造、玉眼嵌入。面部の彫りは深くととのっているが、鎧の文様は刻出が簡略化され、背面もかなり省略した彫り方である。もとは彩色されていたのであろうが、いまは全体にくすみ、くろずむ。次のような数種の銘があり、天明8年(1788)の造立であることがわかる。

〔岩座裏墨書銘〕

『天明八戌申年十二月廿三日』

海雲山岩殿禪寺

韋駄天尊 老軀

六世善洞亮欲叟新造焉』

〔台座上框表墨書銘〕

『当寺六世善洞叟新造焉』

〔台座下框裏墨書銘〕

『時天明戌年申霜月』吉日』

〔台座下框内側前面墨書銘〕

『天明八年申霜月吉日』

相州鎌倉扇ヶ谷住人大仏師

後藤齊宮作之者也』

作者の後藤齊宮は天明2年(1782)に円覚寺正伝庵木造明巖正因像を修理したり、寛政2年(1790)に鎌倉熊野神社木造神像を修理した後藤齊宮義真と同一仏師である。

(3) 木造聖徳太子立像

像高42.8cm

頭髪を美豆良に結び、袍の上に袈裟を懸けた立像で、この種の像は聖徳太子が16歳の折、用明天皇のご病気に際して日夜看病された姿とされ、孝養太子像とよばれている。寄木造、玉眼嵌入。両手および首はさしこみ。彩色濃く、文様もよく残るが、右手首先と両足先とが欠失。首柄内側に次の墨書銘がある。

『願主』清海』宮台 利右エ門』同 弥右エ門』三田 半六』同 三右エ門』同 指右エ門』同 市左エ門』同 善右エ門』今里村道場』

造立時期について記す資料はないが、いくぶん硬い彫技などから推して、江戸時代もそう早くない頃の作品と想われる。

(4) 木造十一面観音立像

像高69.7cm

観音堂の本尊。四重台座上にやや腰をかがめてたち、右手は掌を前に垂下、左手に水瓶をもつ。寄木造、玉眼嵌入。化仏は頭頂仏以外5面を残すだけで、宝髻とともに後補。白毫も後補。両手や胴部も当初のものでない。結局首から上の部分だけ古い。表情はひきしまり、一種理智的などとのい方を示す。この部分は室町時代か……と想われるが、造立年次の判定がむつかしい像である。後考にまちたい。この外、堂には不動明王立像(像高39.5cm)、毘沙門天立像(像高38.2cm)の各木造像が安置されている。いずれも近世作。

[なお、現在本堂にまつられている木造十一面観音立像は、年一度1月18日のご開帳という秘仏であり、まだ十分な調査の機会をもたないため後日にゆずる]

岩殿寺
木造釈迦如来坐像



岩殿寺
木造聖徳太子立像





岩殿寺 木造十一面観音立像（観音堂安置）



同左上半身

古 文 書

貫 達 人

法性寺文書	48
岩殿寺文書	51
妙光寺文書	56
東昌寺文書補遺	56

法性寺文書目録

番号	文 書 名	年 月 日	形 態 数 量	備 考
1	日蓮筆本尊	文永11・正・5	1 軸	縦73.4cm 横35.0cm 裏書アリ
2	日蓮書状断簡	年月日未詳	1 軸	縦21.3cm 横3.0cm
3	日朗筆本尊	年月日未詳	1 軸	縦57.5cm 横28.0cm 江戸小日向水道丁 万屋松五郎覚書・折紙ヲ添フ
4	日像筆経文宝塔図	年月日未詳	1 軸	紺紙金泥縦42.9cm 横29.0cm 裏書アリ
5	加藤清正筆本尊	年月日未詳	1 軸	縦39.4cm 横13.1cm 裏文書アリ

コノホカ、日蓮筆本尊、紺紙金泥ノ経文断片等三紙貼交ゼ折込短冊形ノモノ、江戸初期ノ文学僧元政ノ歌等アレドモ便宜省略ニ従フ

○日蓮書状断簡

飢タル者ニ、或ハ一粒或ハ三粒四粒ナムド、
与ヘサセ給テ後、天ニ向ハセ玉テ、朕ハ一切

(上の右)

飢タル○朕ハ一切々大菩薩御真毫無疑者也、飯高五十四世貞明院日総（花押）

(上の左)

日印法飯山妙法寺卅六世 白河妙閣寺開祖□□□□□家門長久、嗣印也、

○日蓮筆本尊裏書

高祖大菩薩御真筆、文永十一年正月五日、授与 南部二良之御本尊也、謹而無疑、可致信心者也、
賜紫 身延四十九世日地（花押）

寛政十^八年三月十五日

○日像筆経文宝塔図裏書

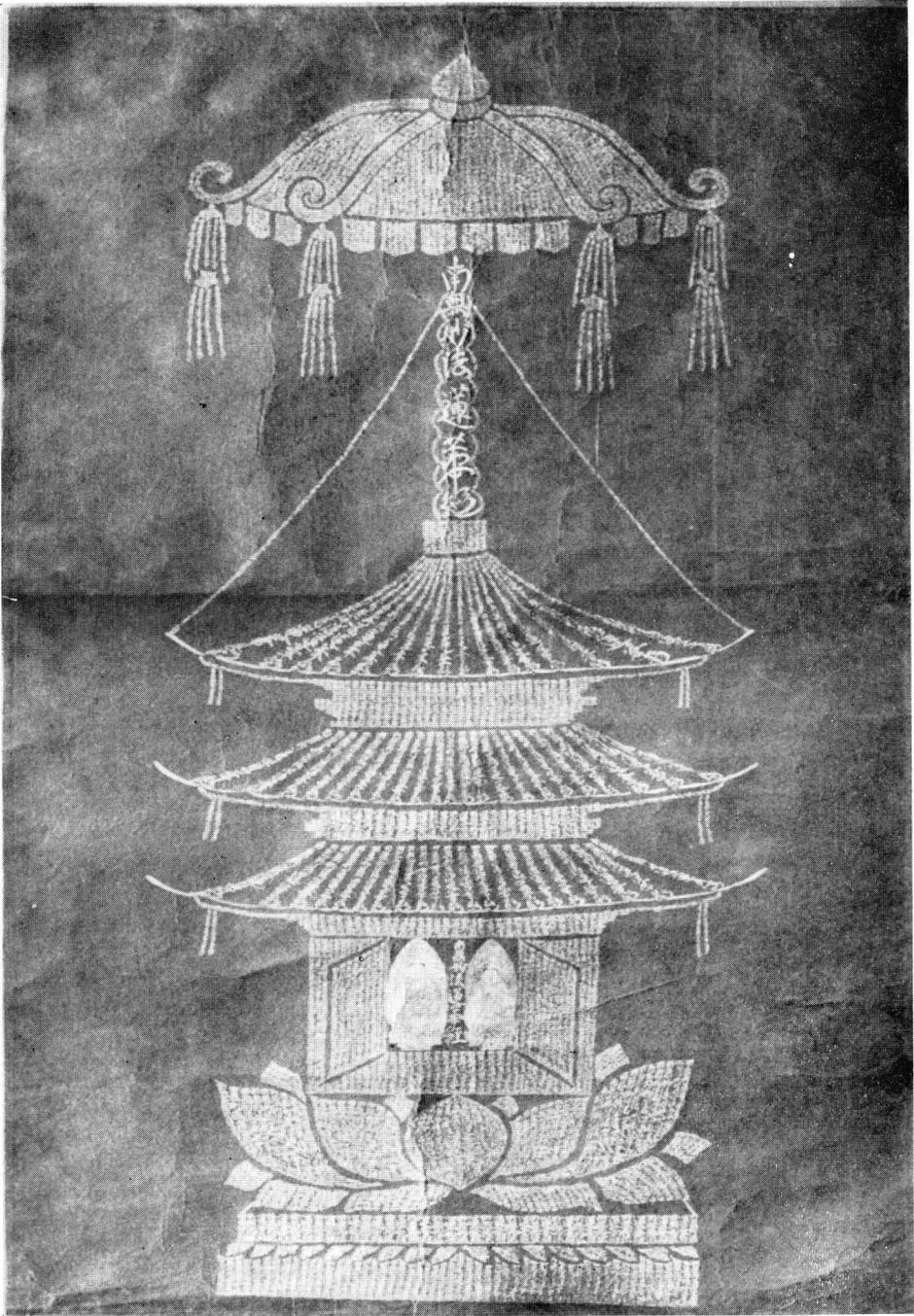
吾山第一之御霊像、奉図宝塔中両尊誠殊勝本尊、為家珍信心可守護者也、

寛政十二年庚申閏四月 泉南堺妙法寺勸説之刻 四海唱導三十八世 賜紫日遂（花押）

金泥宝塔 日像菩薩之御真翰、無疑者也

元禄十三^{庚辰}季春良日 正中山四十五世、本法寺廿三世嗣日近（花押）

為後代令染毫画也



日像筆經文宝塔圖



日蓮書狀断筒



日朗筆本尊



日像筆經文宝塔図裏書

岩殿寺文書目録

番号	文 書 名	年 月 日	形 態 数 量	備 考
1	岩殿寺観音之縁起記	寛文6・6・18	1 卷	縦32.2cm
2	相州三浦郡久野谷郷巖殿寺略縁起	享保7・9日	1 卷	縦26.5cm
3	定規	宝暦11・夏結制日	1 通	参禪の掟 縦39.5cm横53.8cm
4	頼朝房控四国九箇条之事	文化9・3・吉祥日	1 通	回国行者の心得 縦35.5cm横49.2cm
5	乍恐以書付奉願上候	天保9・5	1 通	朱印状虫喰等の詫 縦32.8cm横93cm
6	東叡山御定日之事	年月日未詳	1 通	回国行者の心得 縦35.0cm横52.3cm
7	過去帳	年月日未詳	1 冊	

コレラノ文書ハ、貞享元年ノ銘アル黒漆塗ノ御朱印箱ノ中ニ収メラレ、保存状況ハ普通デアル。ナホ本堂ノ棟札ハ建築ノ部ヲ参照ノコト。

○岩殿寺観音之縁起記

改岩殿寺観音之縁起記

按古縁起、相州三浦郡久野谷郷海前山岩殿寺観音、坂東三十三番之為札処、順礼崇敬之靈像也、遠鳴州里、平頭郷党、梵音潮音、不可具状、慶者以敬、憂者以禱、衆苦者以多掛願、僉無不成就也、經云、觀世音淨聖於苦惱死厄能為依怙、誠乎哉、此經大為万世之要文、想是聖前雖無花瓶香炉之盛、淨光慧日亦足以照破諸暗、夫人之相与信仰諸仏、或留心弥陀、願十萬億之土、或託念藥師、立十二等之誓、雖歸依万殊趣向不同、当其感二世暫論勝彼決然自信無不歸此大士、他之順礼所以曾崇敬亦如斯、孰可不以之興信耶、况考古人安此像之由、蓋亦有年、豈止創一時、起一刻哉、昔仁王四十四代元正天皇、当于養老五年、大和国長谷寺開山得道上人、下向鎌倉、当德被生民法施社稷、一見岩殿之巍々、越余境、此地欲開寿域、移心身之相、時慈眼祝衆生耶、又是無刹不現身乎、仏光頓輝、三浦、伊勢、熊野兩社之幣、忽亦現此地、当郷之童男童女、悉無不成希有之想、依之、德道上人、開創此地、愈欲安尊像、同六年^{丙午}当于六月十八日、行基菩薩、亦來迎此地大士御長刻六尺二寸、籠^于岩殿、示世心身之相、然則此為開地、新興道上人之功、其為立像、既成^于行基之作、爾來、坂東順礼之拜詣、如麻粟石捨之、無到彼也、誠如南方之普陀山、似西域之給孤園、故開張仏像、或及二十稔、或到三十年、亦未懈也、雖然、今年世態、及澆薄、衆生不重仏、像殿既大廢、僧宝独枯槁、祖師云、衆生薄福、難調制、嗟夫先師論、将来明哉、予於是不能自休歇、常盍一粒米、兼奉一文錢、以為法再立門戶、葺古殿、興起万分一、卒復旧基乃止、且又索順礼之縁起、密按大士之起縁、得備于茲、為新添了、庶此功之不朽也、于時寛文六歲^{丙午}

六月十八日

東海路相州三浦郡久野谷郷

海前山岩殿寺住持

飴 牛 敬 誌

○コノ縁起ノ料紙ニハ、蘭に蝶、山水図ノ下絵アリ。

○過去帳

(表紙)
「永久保存

過去帳

岩殿寺

第二番 岩殿寺縁起

相州三浦郡久野谷郷海前山岩殿寺ノ由来ハ、皇統四十五代聖武帝馭属大和ノ長谷寺ノ開山本願徳上人、初テ当国ニ下向シ、遥ニ巽ノ方ニ当リ空中ニハ彩雲飄舞、地ヨリ光気ノ雲ニ衝キ入ルヲ見、爰ニ上人奇異ノ念ヲ発シ、錫ヲ飛シテ彼ノ光ヲ尋ル、三里余ノ山谷ヲ過テ、聳然タル奇峯アリ、其ノ險岨ナル、輒チ登ルヘカラス、意策シテ樛木ノ蘿攬ト葛藟ノ茎ヲ採テ、恰モ天台石橋、岐岨ノ棧道ヲ踏ガ如ク、漸ク攀テ陟テ瑞光ノ所ニ到ル、三方ハ自然ニ岩峙テ屏風ノ如ク、一方ハ海門遥ニ扉ヲ豁キ、近クハ三浦三崎ノ津ヲ臨ミ、遠クハ南海渺焉トシテ目力ヲ恣ニス、其ノ中央ノ地ハ、石平ラカニシテ苔莓ノ滑カナルヲ踏ミ、案ニ、清浄無塵ノ禅岨ナレバ、余所ニ変タル霊場モ有ルベシ、上人繩床ニ座シテ勸誦シ玉ヘバ、夜モ三更ニ及フ頃ニ、三方峙テル岩壁ニ響テ、何処トナク十一面陀羅尼ヲ唱エル声アリ、上人不思議ノ懐ヒヲナシ、但シ彼ノ陀羅尼ヲ念誦シアレバ、一方ノ岩壁赫突トシテ、十一面觀音影向シ玉フ、時ニ麓ノ方ヨリ一ノ老翁来リ、同ク其ノ尊容ヲ拝シテ、上人ニ対シ、此所ハ大悲垂応ノ霊洞ナリ、我レ跡ヲ垂テ守護スルコト久シ、我旧栖ハ花ヲ祭ルノ山ナリト語り畢リテ、化シ去リス、越上人思ヒラク、彼ノ翁ハ熊野権現ナルベシト、則チ木材、石ヲ疊シテ、社ヲ構ヘ、祠ヲ仏場興隆ノ鎮守ト崇ム、然シテ麓ノ里人ニ告ケテ曰ク、此ノ山後チニ大悲ノ淨刹ニナルベシト、斯ク叮嚀ニ遺囑シテ、大和国ヘゾ帰リ玉フ、案ノ如ク、数年ヲ経テ、行基大士此ノ地ニ来リ、瑞光ヲ見テ此ノ峯ニ登リ、大悲者影向ヲ拝スルコト徳得上人ノ時ノ如シ、是ノ故ニ大士十一面ノ尊像ヲ造リ、永ク青門利生ノ霊場ト成シ玉フ、仍テ当山ハ徳道・行基両聖人ノ開基ト云フ、又大悲殿前南海ヲ見徑セバ、山ヲ海前ト名リ、岩窟ノ日違迹自然ニ殿ノ如クナレバ、寺ヲ岩殿ト号ス、養老五年、徳道上人来リ玉フ、同六年丙午八月十八日、行基菩薩、十一面觀世音尊像ヲ安置ス

正暦元年庚寅春三月十七日、花山法皇来リ給フ、從僧ハ仏眼上人、弁光僧正、良応上人、元密上人、僧光僧都、満願上人、威光上人、都テ八人ノ御同行ニテ、百僧御法要御供養、御自身導師トナリテ營ムコトナリ、又承安四年四月十八日ノ御幸臨後白河法皇来リ給ヒ、坂東二番ト御定メ給フ、次ニ頼朝卿、蛭ヶ児島ニ在ス時、文学上人ノ勸メニ依リ、厚ク当寺ノ本尊ヲ信ジ、時々夢想ノ告ヲ蒙ルニト度々アリ、戰場ノ危ニ臨ンデ、幾度カ大悲ノ冥助ヲ得テ、中ニモ石橋山敗軍ノ時ハ、觀世音船人ト化シテ公ヲ房洲々崎ニ渡シ、忽チ十一面妙容ヲ顯シテ、三浦ノ方ヘ飛去リ玉フ、是ノ故ニ、御報恩ノ為メ、御朱印下賜アリテ、公治世ノ間ニハ毎月ノ御参拝アリ、御願皆此ノ尊ニ祈リ玉フ、又頼朝ノ姫ハ文治三年正月廿三日参詣、建久三年二月廿三日乙未、頼朝公暮下御参岩殿觀音堂、三浦ノ介、同左衛門尉以下又御供大多和二郎猷院(坑)飯、同年五月八日巳卯、後白河法皇四拾九日御仏事、於南御堂被終之百僧供早旦各

群集ス、口別白布參段、袋米一也、主計允行政、前ノ右京ノ進行業ヨリ、奉行之、次ニ承元三年五月五日、実朝將軍觀世音參詣シ玉フ、

東鑑建久二年子三月、三浦次郎義澄、同六兵衛義村御供奉、頼朝公岩殿寺觀音へ御參詣有之、

又承元三年五月五日、実朝將軍当寺へ御參詣アリ、然レドモ、其ノ頃ノ伽藍ハ大破ニ及ビテ、再建有リタリ、

新箸宮ト云フアリ、此レハ昔シ、此処ニ賤女アリ、頼朝公御休ミノ時、粟飯ヲ奉ル時、何カト清浄ニセントテ、新萱ヲ折ツテハントシ、粟飯ヲ奉ルナリ、頼朝公御悦ビ斜ナラズ、是レ源家ノ吉瑞ナリト、夫レヨリ嘉例トシテ、今ニ三浦郡中ニテハ、六月二十二日、新箸ノ節句ト名付テ、家毎ニ祝之トナリ、三浦史、

右大将実朝、寛喜二年十一月十一日、大僧正院豪并ニ十二院ノ別当、日夜法要ヲ修行ス、其刻、鎌倉殿ノ依敵命、西願トイエルニ、同年地形并ニ礎等ヲ造立ス、シカノミナラズ、三代ノ盟主、三七日昼夜祈念シ玉事アリ、東鑑ニモ顕然タリ、七堂伽藍モ物換リ、星移リテ、天正ノ頃、堂宇破壊ニ及ビ、則チ東照神君ノ御仁恵ニ依リ、境内并ニ田畑山林御朱印頂戴被仰付、其徳沢ニ潤ヒ、堂宇ノ莊嚴モ再ビ相整ヒタリト旧記ニアリ、

当寺開基海宝院殿節叟玄忠居士

長谷川七左衛門尉長綱公

慶長九年四月十二日

永平門下	当寺開山	一機俊宗和尚	慶長廿寅六月廿八日
	当寺二世	物山洲万和尚	元禄十丁丑八月廿二日
	当寺三世	奇胤万英和尚	元文元丙辰十一月廿四日
	当寺四世	実参虎禅和尚	宝暦六丙子十二月十六日
	当寺五世	英山亮雄和尚	宝暦五乙亥六月廿五日
	当寺六世	善洞亮歆和尚	享和元酉二月廿四日
	当寺七世	彌外教道和尚	享和二壬戌六月五日
	当寺八世	齡翁享渠和尚	文政三亥八月廿七日
	当寺九世	太林寛量和尚	文政十亥六月廿七日
	当寺十世	敬朝探宗和尚	天保三辰十二月廿九日
	当寺十一世	<small>前永平</small> 太昔金猊大和尚	明治十四辛巳一月廿九日
	当寺十二世	証道無参和尚	元治元子十二月四日
	当寺十三世	玉鱗金龍和尚	
	当寺十四世	<small>再興</small> 惠寛勝熊和尚	昭和十六年二月四日
	当寺十五世	仏山良正和尚	昭和十九年八月二日
		大東亜戦争応召出征中、南方方面ニ於テ戦死ス、	
	当寺十六世	玄中実参和尚	昭和三十年十月九日

海古緣起相云之浦郡久野谷御
 海前山岩殿寺觀音緣起記
 三番之為相之順禮山宗致之
 靈像也書之為引其平顯御
 畫梵音潮音不可具狀者
 以故要者以得衆者者以多
 掛願余之不後就也經之觀世
 音海聖於苦惱不度能依
 惟願字成此經大為第世之受
 相是聖前雖以花瓶香燈盛
 淨之慧日亦足以照破諸暗大
 令相與信仰諸佛式留心施施
 願十萬億之土其說念以未師
 立十二等之誓雖歸依之殊報
 向石同當其感二世暫翁勝彼
 以然自信若不歸於大士德之順
 禮所以當其教亦如斯孰可
 不以此應言也

岩殿寺觀音之緣起記(首部)

之給流(因)故銅張佛像式及
 二千餘式到三十年垂垂也雖其
 今斗世熊及渡海之衆生不重佛
 像殿就大座僧室持柁祖師衆
 生降福雜初引若夫先師諭將
 未明哉予於是不能身休歇常
 畫一粒米兼半一文錢以為法衣
 立心戶以算古殿與起一合一年
 渡舊基乃止且又索順禮之
 緣起家授大士之說願保備
 予茲為新添了之庶其功之不
 朽也十時宣文六歲 丙午
 六月十八日
 東海路相之浦郡久野谷御
 海前山岩殿寺住持
 船平教誌

岩殿寺觀音之緣起記(尾部)

相州三浦郡久野谷鄉岩殿寺略緣記

當寺者坂東觀音須禮
 札所第二番之靈場也
 山號海前者尤東海石
 鎌倉山嶺綠高直吞南
 海波瀾平沙萬頃臺前
 坐者人物來往林巖殿
 者窟有山中人曾無識
 得道之光趨始行基之
 彫刻露窟則殿矣

案舊記往昔仁玉四十四
 代元正天皇御宇養老之
 間大和國長谷寺開山得
 道上人下向吾輩遊鎌倉
 里登男山頂遙見比山會

相州三浦郡久野谷鄉岩殿寺略緣記

第二番 岩殿寺緣起

相州三浦郡久野谷鄉海前山岩殿寺由東皇
 統四十五代聖武帝敷厲大和長谷寺開山本願
 德上人初當國下向遠巽方當空中
 彩雲霞地光氣雲衝入見爰之上
 人奇異念之欲錫之飛之被光尋三里餘
 山谷過之得然之奇峯其險阻之極矣

過去帳(部分)

當寺開基海賢院殿節叟玄忠居士
 長谷川七左衛門尉長綱公
 慶長九年四月十二日

永平門下當寺開山一俄俊宗和尚慶長廿寅六月廿八日
 當寺二世物山利萬和尚元禄十丁丑八月廿二日
 當寺三世赤原若英和尚元禄九丙辰十月四日
 當寺四世實參虎輝和尚室曆六酉辰正月十六日
 當寺五世英山宗雄和尚室曆五乙亥六月廿五日

過去帳(部分)

古 文 書

妙光寺文書目録

番号	文 書 名	年 月 日	形 態 数 量	備 考
1	三十番神堂棟札	寛政3・10・吉日	1 枚	表ニ本尊ヲ書ス
2	七面堂棟札	天保10・6・26	1 枚	表ニ本尊ヲ書ス
3	棟札	天保11・5・吉辰	1 枚	表ニ本尊ヲ書ス
4	過去帳	文政7・6	1 冊	
5	草分稻荷社棟札	文政九・	1 枚	

コノホカ、地券等アレドモ便宜省略ス。

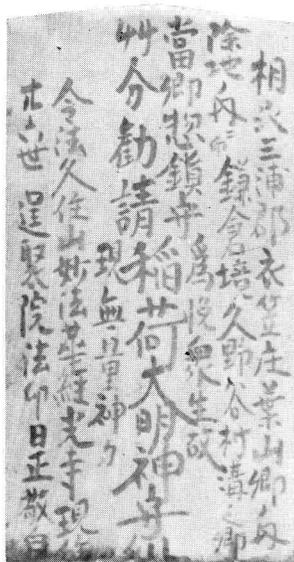
東昌寺文書補遺

番号	文 書 名	年 月 日	備 考
1	池子村惣社地帳	宝歴6年丁8月吉日	横冊
2	阿弥陀堂普請諸入用勘定帳	安政5戊午3月28日 池子東昌寺世話人	横冊
3	□□指出書上帳	安永2癸巳年	相模国三浦郡桜山村
4	相州三浦郡池子村地藏堂山証文之事	享保20年卯2月日	庵主□心代→君嶋藤助殿
5	借金証文	嘉永6丑年4月	東昌寺旦那家50軒→大山喜楽坊
6	山永代寄附証文	寛延2年己巳3月	石渡五郎右エ門→東昌寺
7	取立国役金未納催促状	卯10月15日	久保田十左エ門役所→村名主年寄百姓代
8	寺替請書	慶応3年2月	木古庭本門寺→東昌寺
9	寺証文	延享2年12月	東昌寺→延命寺 (名主源助)
10	高野寺ヨリ御朱印オ尋ネノ書状	9月11日	東昌寺へ
11	地券	明治12年14通 明治14年1通	

東昌寺文書補遺ハ第一回調査ノ際、未発見ノモノニシテ内田武雄氏ノ提供ニヨリテ、ココニ掲グ。



三十番神堂棟札



草分稻荷社棟札（裏）



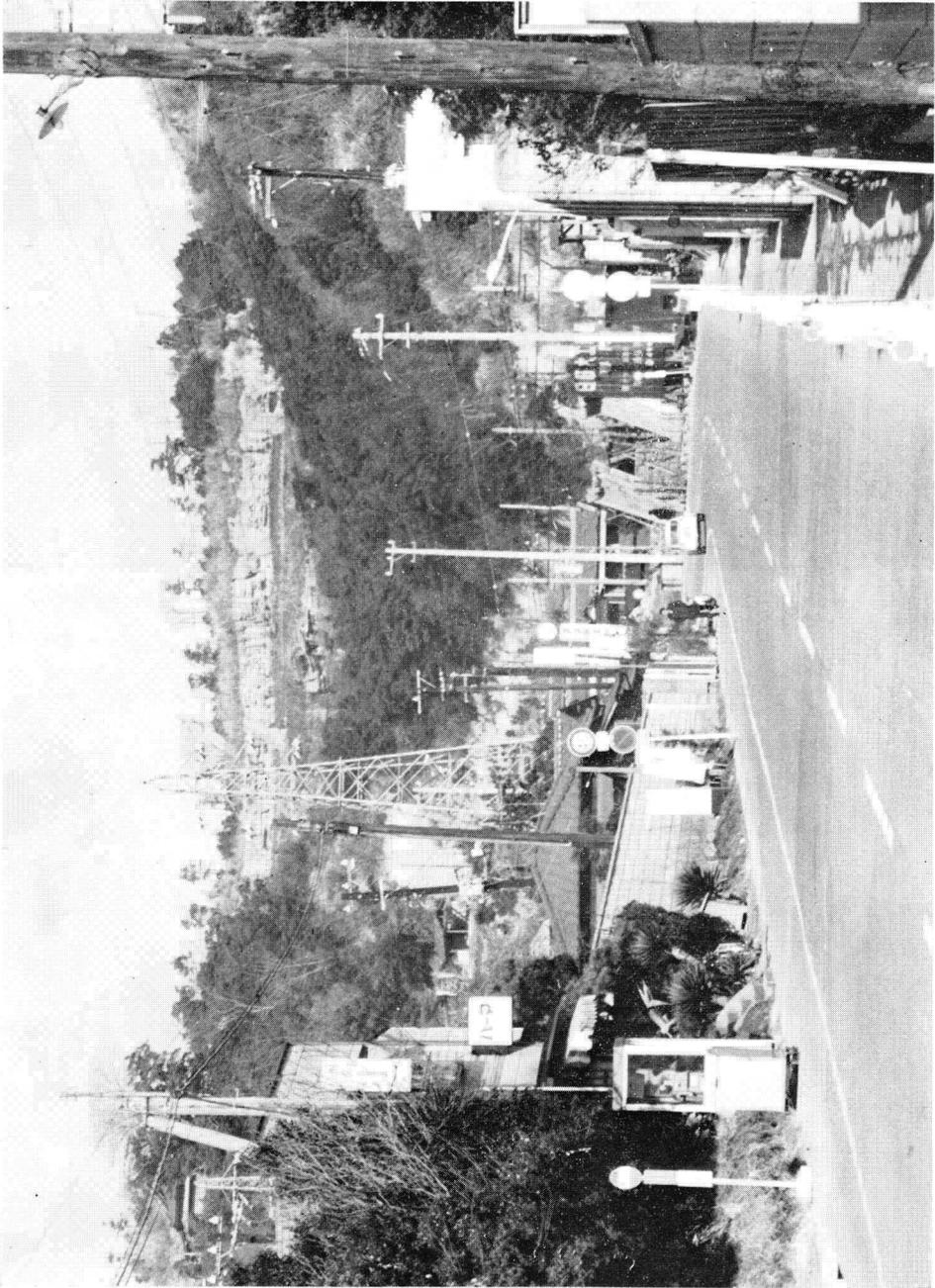
同表

考 古

逗子市山野根・久木

赤 星 直 忠

名 越 切 通	61
岩殿寺裏山の遺構	69
逗子駅裏山横穴群	70
山野根切崩山腹発見横穴群	72
山野根本田光氏裏山横穴群	75
山野根本田庄作氏裏山横穴群	78
山野根谷奥横穴群	83
山野根熊野神社境内横穴群	86
山野根居合口横穴群	89
山野根仲の谷横穴	91
山野根上師遺跡	92
久木小山氏裏山横穴群	93
久木岩殿寺横穴	94
久木岩殿寺蛇やぐら横穴	96
久木お猿島やぐら群	97
久木松岡氏裏やぐら群	99



久木新二級国道から見た法性寺裏山の切岸



法性寺裏山の切岸群 (91.3 m 高地付近)



法性寺裏山の切岸群 (81.3 m 高地付近)

名 越 切 通

1. 切通の意義

鎌倉全体が城とみなされ、鎌倉城の名でよばれたことさえある。前面に海をひかえ、馬蹄形に丘陵でとりまかれた鎌倉は頼朝が根拠の地として選んだ平安末には実に理想的な城であった。大手搦手の両方面から攻撃すべきものとの約束が、敵味方とも守られていた当時としては確かに理想的城郭であった。幕府が開かれ、諸国からの往来が繁しさを加えると、城郭の一部であった丘陵を越えて出入する交通路が自然に開け、やがてその交通路が公認されると峻険な道を交通便利な道に改めるべきだとする説が有力になる。そして所謂七切通の道が開発されたことは吾妻鏡にのせられている。現代人の考えからすれば交通便利な切通路を開発することは当然と考える。しかるにこの切通開発に意外なほどの日数を費しているのはなぜだろうか。この疑問は開発された切通を実際に見れば、時間のかかった理由が理解できるはずである。

我々が考える切通路は交通の便のための路である。しかるに実際切通として残っている路は確かに尾根を切り割って低くし、山腹を削って路がつけられている。それだけのことになぜ多くの日数を費さねばならなかっただろうか。

鎌倉は政治の中心地として全国からの往来が極めてはげしい地になった。しかし、鎌倉を中心として集まっていたのは將軍幕下の武士団である。鎌倉への出入が楽になることは鎌倉城の防禦の点で弱体化することであることは当然考えたはずである。交通の便のためとはいえ、いざ鎌倉というとき鎌倉城が何の役にもたないものにするはずはないのである。鎌倉をめぐる丘陵に切通をつくって交通しやすくすると同時に、この切通を外から攻撃された場合、如何に防禦するかという点に対して最大の考慮がそそがれたはずであろう。これは各切通に立って路と地形との関係を見れば充分うなずくことができることである。開かれた路に対して、必ず防禦陣地としての切岸とその上の平場との複雑な構築あとが各所にみられるのである。切通開発に従事したのは幕下の武士団である。彼らは交通の便のためとしての路を作ると同時に、この路を攻撃された場合、防禦すべき陣地を同時に構築していたのである。峠に達するまでの路をなるべく長くすることは平時の交通上、骨おらずに峠を越えることに必要である。しかし、万一の場合、楽に敵が侵入してしまうことである。そこで各所に切通路を作ったり、片側に谷をみおろす山腹路にしたりする。これは切通に逆茂木を切りつめて通れなくするためであり、切通は両側から、山腹路は片側の尾根上から石を落として攻撃できるからであるし、又切通は切りふさぐ方法もあり、山腹路は一部を切りおとしてしまう方法もあって、万一の場合防禦が充分できるのである。名越切通はこれを最もよく物語る遺構であった。しかし、敵がこの路以外の路を通ることがあっては何もならぬから、他の路は平常から通れなくする、又は通りにくくする方法がとられた。名越切通につづく久木のお猿島切岸はその最もよい例である。

2. 名越切通路の地形と防衛施設の概観

地形— 鎌倉の地は西・北・東の三方を丘陵にとり囲まれ、南に海をひかえたところであることは誰でも知っていることである。東側をささええる丘陵は北東隅の大平山（標高 150 m）から南へ延々 6 km にわたってつづき、南端は逗子と鎌倉との境で、60 m～70 m の丘陵となって海に達し、その先端は波のうちよせる絶壁となる。構成する岩石は第 3 紀層の凝灰岩・泥岩などである。

古東海道が三浦半島を横断して房総半島に通じていた奈良時代までの古道は、鎌倉海岸からこの絶壁の少し北側の尾根鞍部（光明寺裏山）を越えて小坪に下り、更に披露山を越えて逗子市新宿に下った。そのころは逗子の海が沼間辺まで入りこんでいたから、山裾を山野根から沼間へぐるっとまわり、更に桜山の山裾を鳴鶴崎へでて海岸伝いに葉山町堀の内に入り、山口・木古庭を経て横須賀市走水まで半島を横断したのである。光明寺裏山・披露山を越える古道を変えて、その北約 1 km に鎌倉市名越から逗子市名越に越える様に計画されたのが鎌倉七切通の一つである名越切通路である。ゆるやかな山腹路と切通路のくりかえしだったから、確かに楽な交通路になったのである。名越（なごえ）の地名が鎌倉側にも逗子側にもある。古くはこの地名を「なごし」とよんでいるのは「難越」の意であり、古い通路はあったがひどく困難なものだったことを物語るものであろう。名越切通のあるところは海岸から 1.5 km ほど北によった丘陵尾根であり、ここは東西両方から深く谷が入りこんだ部分であり、鎌倉市と逗子市との間にある国鉄名越トンネルの通っている上にあたる。山頂の切通はこの尾根にあり、尾根はここから南で幾つもの支尾根に分かれる。山頂切通を越えた路は東にのびる支尾根を伝って逗子市小字西名越の南側を経て小字白山で平地に下るのである。

防衛の概観— 前面に海をひかえた鎌倉をとりまく丘陵は、例えるならば取り取の三方の板にあたる。東側は三浦である。三浦は房総から鎌倉に至る通路でもある。頼朝挙兵に際し、一族をあげて応援にかけつけたが、折からの風雨にさまたげられて、石橋山合戦には間に合わなかったが、祖先のうけた恩義にむくいることをモットーとし、専心源家のために尽した三浦一族の根拠地である。源家の地位を奪うことに専念した北条氏が三浦一族の滅亡を劃策したことは明らかな事実であり、相次いでその一族を亡ぼし、やがては宗家三浦氏をも滅したことも事実である。この北条氏が鎌倉を守るために最も恐れた三浦側に最も厳重な防禦陣地を計画したのであろうことは想像にあまりあることである。名越切通路はその三浦との交通路として開かれた路である。その実際がどんなものであったかは切通路の構造の項に述べるとして、まずそれを概観しておこう。

名越切通防禦陣地の中心部は切通の北に位置する尾根最高部を中心に計画されている。平時は交通の便のために通行が楽になるように作られた路も一度戦時状態になれば、それは鎌倉攻撃路と変わるから、鎌倉の防備は切通を作ることによって半減せざるを得ない。したがって万一の場合に備えて強力な防禦陣地が切通の開さくと同時に計画されたとしなければならない。その構造については何も書き残されてはいないが、名越切通路が切通と山腹路のくりかえしであることと山頂の切通につづく尾根の切岸と平場の連続、特に三浦側尾根に延々とつづく高い切岸は如何に強力な防禦陣地であったかを物語るも

のである。この高い切岸が後世作られたものでないことは、この切岸を利用した中世墳墓穴（方言やぐら）が存在することによって明らかである。ここに切岸というのは中世城郭において多く用いられた防禦施設の名称である。敵兵が谷間に攻め入ってきた場合、谷奥の裾部分が高さ2 m程度垂直に切りとってあると、攻め入った敵兵はその切り立った崖下で立往生せざるを得ない。このような防禦施設を切岸とよぶのである。名越切通の場合、この切岸が極めて高く、久木に面する尾根部分に延々800 m余に及んで残存するといえれば如何に強力な防禦施設であったかがわかるであろう。

防禦陣地としての切通路は最高所の切通部分だけで防禦するものではない。それは最後の陣地なのである。ここに敵が攻めのぼる以前に大損害を与えなくてはならない。それにはここに達するまでになるべく長い距離が必要であり、その長い距離の各所で敵に損害を与えることが必要なのである。山頂の切通路とはいうものの実際にはその丘陵ののぼり口が防禦の第一線陣地であり、山頂に達するまでに切通路があり、山腹路があり、又切通路があり、山腹路があるといった長い困難な通路を伴うものであることを理解しなければならない。

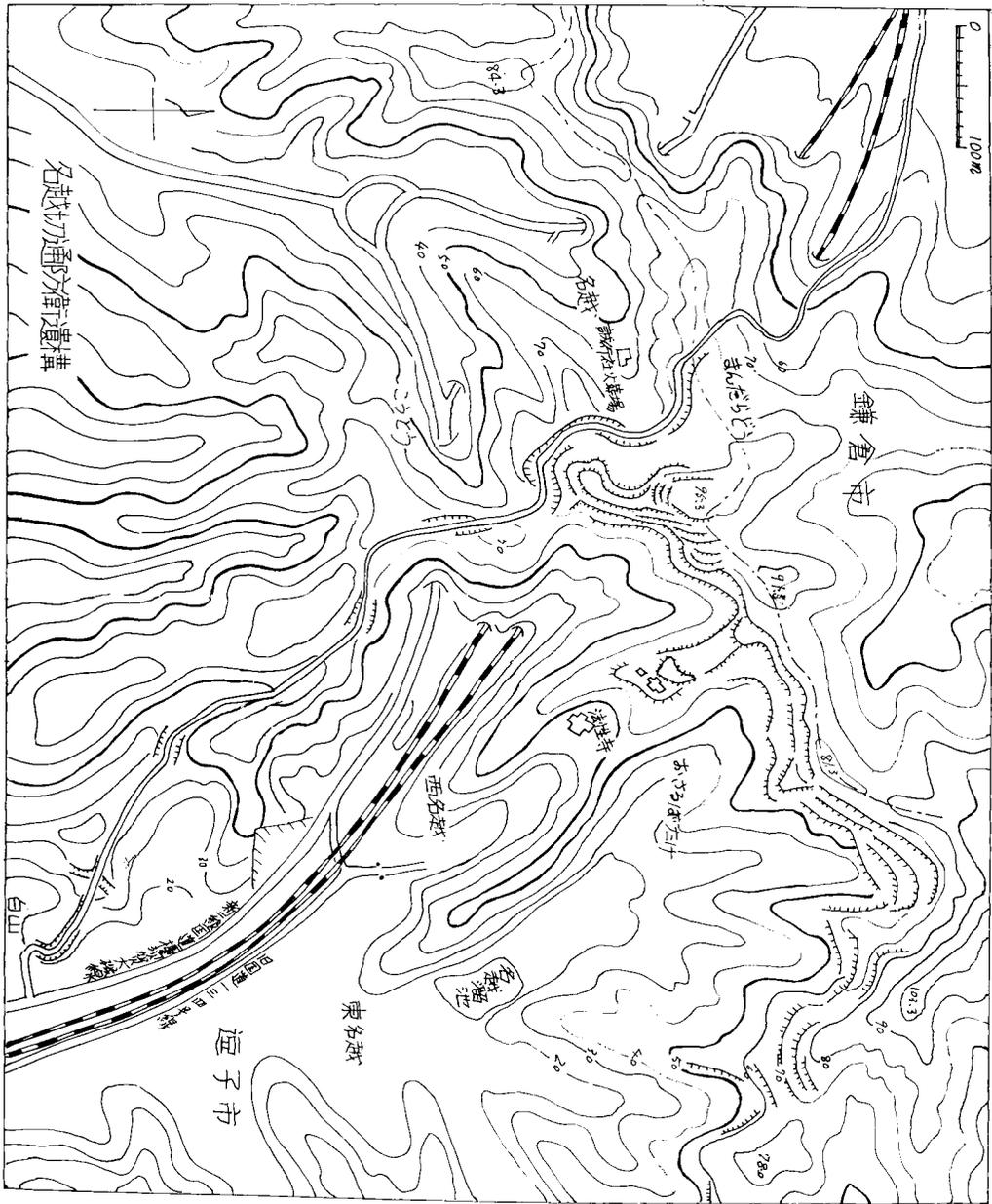
3. 名越切通路の構造

中世における切通の重要性という事情を最もよく理解することができるのは逗子と鎌倉との間に作られた名越切通の構造である。それは三浦から鎌倉へ入る路の重要な一つである。国鉄横須賀線名越トンネルの真上を通っているといっている。国鉄横須賀線の南側に新二級国道横須賀大磯線が走っている。久木4丁目17-33から西へ入る小路があり、この国道の南西側にせまる丘陵の南東の支尾根先（久木4丁目18-16）からこの丘陵にのぼる路が名越切通路のとっかかりである。現代の我々の通念からいえば切通とは尾根の線を直交する方向に切り割って通した路ということであるが、中世において防禦という観点からする切通ではそののぼり口が切通防禦の第一線となるのである。

名越切通ののぼり口……支尾根の先端部をたてにV字形に深く切りわってのぼり口にしている。この切割路は尾根の傾斜にしたがって次第にのぼり、100 m ならずで右側の側壁がなくなり、山腹の路に変わる。切割路の左（南）側は単なる急崖としかみえないが、実はこの左側尾根上は上下二段（東西方向）の平場をもつ小砦に作られていたことが残された地形から判断できる。堀りわり路が終わった部分で、この小砦は路と直角方向に堀り切られた空堀で背後の尾根から切りはなされている。この空堀はのぼって来た路を直角（南北）に横切って反対側にのび、この部分にある小尾根上を切りわっているが、その先は深さ3 m余の急な切岸になってたち切られている。

山腹路と切通路……のぼり路を直角に切った空堀を通過すると、国道の南西側にそびえる急な山腹を国道にそってのぼる山腹路となる。即ち左は急な山腹、右は急な崖である。この部分を含めて先は先年大宅造地として開発された労信亀ヶ丘団地造成によって全部削平されたため旧状はすべて失われたから、旧逗子市全図と記憶をたどって旧道について記すと大体次の如くである。

前述ののぼり路に直角な空堀のあるところから進む山腹は60~70 mで左側の山腹が北西に向を変える。路はこの部分で前面の尾根を切りわった切通路となって直進（東西方向）する。通りぬけると右側



に谷（甲一の沢）をみおろす山腹路となる。西北に向をかえて約 100 m 進むと狭い谷間を通る路となり、やがて南西から北東へのびる小尾根につきあたる。この小尾根を切通した切通路を通りぬけると、再び右に深い谷（西名越）をみおろし、左は急な山腹をみあげる山腹路（西々北—東々南方向）となる。約 200 m 進むと北から南へのびる支尾根につきあたる。路は左に折れてこの支尾根を東西に切り割った切通路となる。切通をぬけ、北西に折れると尾根の向い側に出て、こんどは左に深い谷（小字こうとう）をみおろす山腹路となる。労信亀ヶ丘団地造成はこの切通部分まで削り取ってしまったのである。この路は尾根から 6～7 m 下った山腹路となって北西に進む。路は次第に高くなるのである。50～60 m 進むと南北にのびる尾根が下手をさえぎる。この通路での最高所である。この切通部分が国指定になった名越切通である。三浦から鎌倉への切通路として最高の場所であるから、最も峻重な施設であったとみえ、今残るところでみると切通路はくの字形に作られており、しかも最高所は幅 1 m たらずの狭さになっているのである。しかも切通は左右の崖上が平場になっており、特に右（北）側は数段の切岸を持った平場の連続となり、これにつづく北東方の尾根は内外（東西）とも数段の切岸でとりまかれ、複雑な平場の連続地になっており、ここが切通をその一部に含む一大城砦地であることが推察できる。今はこの城砦中心地とみられるところに日蓮行者の庵がある。

切通を通りぬけると少しづつ下りになる。左側に谷（小坪火葬場がある。小字名越）をみ下ろす山腹路である。国鉄横須賀線名越トンネルはこの下あたりである。100 m 余進むと東西に走る支尾根にさえぎられる。これを切通した路は急な下り路となり、次いで左に谷をみおろす山腹路となり、国鉄横須賀線の北側にそって下り、鎌倉市大町小字名越坂の谷に下りるのである。

4. 名越防衛陣地の構造

名越切通防禦のために計画された陣地が名越切通そのものだけでなく、切通の北側にある尾根の最高部（95.3 m 高地）を中心に切岸でとりまかれ、多くの平場をもち、独立した砦としての性格を備え、しかもこれにつづく北尾根には大切岸が延々 800 m 余に及ぶとすれば、これを単なる砦とみなすべきでなく、むしろ長期にわたり多くの兵力をおいて守備しうる可能性をもつものであることから、これが大防衛地であったことは事実としてよからう。この最高部陣地は総指揮所とみなされるものであり、現在日蓮行者小山日哲老が庵（救世山妙行寺）を作って籠る部分である。もと庵のなかったときもこの地点は山頂の平場であった。以下それら遺構を説明し、名越切通が単なる切通でなかったことを証明したい。

まんだらどうの切岸と平場……小字まんだらどうは小坪火葬場のある谷の北東部谷頭にあり、山頂の広場になっている。この部分の最高標高は 95.3 m。90 m 等高線が南北に長い不正楕円形を形成し、その北半は鎌倉市域になる。この尾根は南にのびて国指定になっている名越切通のところに達する（標高 80 m）。切通のある尾根はここで南東と南西にわかれる。南東にわかれた尾根がすぐ南に折れて南へのびる。小字白山をのぼり口とした名越切通路は山腹をほとんど一直線に進んで、この尾根に達し、尾根を切り割った路は尾根の西側にて山頂の名越切通に達するのである。90 m 等高線の示す高地はこの尾根の東側に片よっており、西側にはかなり広い平場が続いている。この平場にいつの時代かに「まんだら

どう」とよばれる供養堂があったものであろう。これらの尾根は名越切通につづく部分として、尾根周囲が幾段もの平場と切岸のくりかえしとして作られていることはこの部分が万一の場合、城郭として役立つ仕組みになっていたと考えてよからう。尾根の東側がひどく高い切岸の連続として北方へ800m余のびているのは三浦側への厳重な防衛の役目を果たすものである。

まずこの最高所を中心として切通までの間にのびる約200mについて述べよう。名越切通は深さ約4～5mあるが、この北上には7～8m幅の平場があり、高さ約5mの切岸につきあたる。この切岸はその上の尾根の周をとりまいている。切岸の上には2～3m幅の平場がつづきこの部尾根をとりまく高さ3mほどの切岸でとりかこまれている。この尾根頂は東西約10m、南北約30mの長楕円形である。地形上これは名越切通防衛の指揮所であろう。この尾根平場の東側平場は、南から西へめぐる平場と東南部分で切りはなされており、この平場（幅3m～4m）には下の平場から別に北にむけて作られた石段により通じており、尾根平場の北端に達するがこの部に厚い土塁状部分があって行手をさえぎっているから、山頂平場との狭い切目を通らねばならない。尾根平場の北端には幅1.5m深さ1mほどの堀切りがある。又尾根平場の東側中央辺には東側の平場へ通ずる分割路のようにみえるものも残っている。

尾根平場につづく北側は細い尾根頂を削平した幅1.5mほどの長い尾根平場として95.3m高地へつづく。この細長い尾根平場の東側には約3mの高さをもつ切岸がつづき、切岸下には幅3～5mの平場が95.3m高地の東側山腹までつづく。この狭長な平場の東側は高さ約6mの切岸となりその東下に幅10m内外の平場がつづき、この平場の東側は約4mの切岸となってその東側の急山腹につづく。この高さ6m切岸と4m切岸は延々法性寺裏山まで続くのである。この急傾斜の山腹は国鉄と国道の通る西名越の谷底までつづく。

95.3m高地の東側山腹までつづく前述の狭長な平場は95.3m高地東側においてその上方に高さ約2mの切岸2段をめぐらしているが、特に東北部には4段乃至5段に切岸をめぐらした厳重な防備のあとが残っている。この95.3m高地は南側に高さ各2m～3mある5段の切岸をめぐらし、西側裾には2段の切岸をめぐらし、北西部から斜にのぼる坂道で山頂に達する。これら南及び西側の切岸には各多数のやぐら（中世墳墓穴）が造営されている。95.3m高地の西及び南には広い平場があるが「まんだらどう」の遺名からこれらの墳墓群に対する供養の堂が建てられていたものと推察される。これら切岸に造営された「やぐら」についての詳細は改めて「まんだらどうやぐら群」として記述するが、それらがすべて鎌倉後半期に既に存在したことは「やぐら」の形態からも、内部に残る五輪塔の形態乃至刻まれた造立年代からも証せられるものであり、これら切岸が名越切通造営当時のものであることから、名越切通防衛上構築された95.3m高地を総指揮所とする城砦の防衛施設であったとすべきであり、当初は防衛施設としての厳重な切岸の連続であったものが、三浦氏滅亡（宝治元年—1247年）後はその切岸を利用して造営された墳墓群の所在地と変わったものであろう。もっとも切岸にやぐらが営まれていても防衛陣地としての効力には変化は全くない。これら尾根の東側につづく高さ6m（北寄では10m近い）と4m（北寄では7～8m）の大切岸は三浦側からの攻撃を排除することのできる絶対的な防衛施設ということが出来るであろう。この大切岸も既に当初から存在したものであることは、この切岸に営まれた「やぐ

ら群」が鎌倉期のものであり、内部に残る五輪塔も鎌倉期のものであることによって証せられるであろう。

おさるばたけの大切岸……西名越の北東半部の谷は法性寺の谷である。法性寺背後山上にある祖師堂は国鉄横須賀線トンネルのある谷と法性寺の谷との間にある支尾根の頂を切り平らめて営まれている。この支尾根は「まんだらどう」の95.3m高地の北東にある尾根の瘤91.5m高地を頂点とし、東南にのびた支尾根である。95.3m高地—91.5m高地と北東につづく尾根は更に北東にのび81.3m高地を経て、その北東にそびえる103.3m高地につづくもので、その東南山腹及びその前面は小字「おさるばたけ」とよばれ、名越溜池を谷の出口にひかえた深い谷（俗称やと）に面し、谷の奥は四つの小谷に分れている。（この小谷を西から一のやと、二のやと、三のやと、四のやととしておく。）

95.3m高地の東山腹に高さ6mと4mの大切岸があることを前述したが、この切岸は91.5m高地の南山腹までつづく。91.5m高地の東南に接して馬蹄形に張り出した部分があり、この周も6mほどの高い切岸になっている。91.5m高地から北東につづく尾根があることを前述したが、この尾根の南東側はすべて切岸となり、103.3m高地の山腹までつづいている。切岸の高さは2m乃至4mに及び、馬蹄形張出部分の周の切岸も東北につづき、おさるばたけ一のやとの谷頭部に切岸をめぐらしている。今この前面は開かれて畑になっており、切岸前面に更に2段乃至3段の切岸状があるがこれは開墾による段々畑であるかもわからない。一のやとと二のやととの間に突出した支尾根頂も周が切岸となり、二のやとへとつづく。二のやとの谷頭にもすべて尾根東側の切岸前面の山腹に切岸が3段乃至4段に作られているが、現在ひどいやぶに覆われている。103.3m高地南山腹のものには切岸間の平場がかなり広いものがあり、一部には切岸を斜に伝う通路もあるから、非常の場合、防衛施設の役目をする切岸と切岸との間の平場が平時には邸宅地となっていたようにも考えられる。

103.3m高地南側山腹は樹木が茂っているため踏査が不十分であるが、三のやと谷頭には3段、四のやと谷頭には2段の切岸と切岸前面の平場があることが知られたがこの部分は更に充分な踏査が必要である。103.3m高地の東南につづく78m高地との鞍部までは切岸のあることが知られていたが、その後更に78m高地の南面山腹にも切岸がつづいていることが知られた。要するに名越切通につづく北方尾根の東側には尾根線にそって作られた高い切岸が延々800m余にも及んで遺存しており、或部分では3段にも4段にも及んでいる。

法性寺背後の遺構……法性寺背後は法性寺の谷の谷頭である。91.5m高地から東南にのびた支尾根の基部にあたる部分が、高地の東南に馬蹄形に張り出した平場であり、その周は高い切岸として防衛陣地の一拠点になっている。法性寺背後山頂には祖師堂・日朗窟・日朗墓堂があり、これに接する北西部に全周を切岸状にした山王祠のある高地がある。この高地と前述馬蹄形張出部との間は大きく切りとられて空濠状になる（現在この部は墓地となる）。馬蹄形張出部の地形が当時のものであることは南側切岸下部に「やぐら」のあることで知られる。四周を切岸状にした山王祠のある高地が当初からのものか後世のものかは不明だが、その東南側に日朗窟といわれるやぐらがあることと、この高地との間が空濠状に掘り切られていたであろうことは馬蹄形張出部を当時のものとする考えから当然その間に空濠が存在

しなくてはならなくなる。しからばこの山王祠の高地も当時のものと考えられる。とすれば祖師堂のある平場をふくめ大体このあたりの地形が当時のものと考えられ、この地が山王祠高地とその周辺平場をふくむ一つの拠点とみられ、これは法性寺の谷乃至おさるばたけの谷を攻め上る敵をくいとめる拠点としてふさわしい位置にあり、95.3m高地の背面防衛拠点としてふさわしいものと考えられる。尚、法性寺の谷と国鉄横須賀線の通る谷との間にある支尾根（91.5m高地から東南にのびた支尾根）の先端山腹にはこの尾根を攻めのぼる敵を防ぐためと考えられる切岸が残っている。

5. ま と め

切通は平時交通の便のために作られるものだが、中世にあっては万一の場合、充分防衛できるように計画された。したがって現感覚での最高所切通部分のみの保存では不備であり、中世切通の意義が理解できない。保存は切通を中心に如何ように防衛線が構築されていたかを考えてそのすべてを保存すべきものである。大仏切通でも、旭比奈切通でも同じである。中世切通の意義が最もよく理解できる状態で残されていた名越切通が最高所切通部のみが保存されて、逗子側にあった最も敵重だった複雑な切通と山腹路とのくり返し部分が残されなかったことは百年の悔いである。幸にして山頂切通の北方につづく切岸で囲まれた山頂部分と延々800m余にわたって尾根につづく大切岸が無きまま残っている。これらは現在となっては中世切通の意義を理解することのできる唯一のものであるから、残るすべてを保存すべきであろう。文献になくとも郷土の山野には郷土の歴史が刻まれているものであるとの感を深くする。

尚、最高部切通の南につづく尾根（労信亀ヶ丘団地工事によって失なわれた）、北方103.3mの東南につづく尾根（西部グリーンハイツ工事により失なわれた）、更に103.3m高地の北方尾根につづく尾根（西部グリーンハイツ工事により失なわれた）にも切岸などの遺構存在が推察されたが、それらの地域はすべて宅造工事で削平されてしまったから、今では遺構存否の推察さえできない。

岩殿寺裏山の遺構

所 在

久木岩殿寺裏山。

遺 構

観音堂の左背後から裏山尾根にのぼりつめた部分。左側には尾根の一部に人工を加えた土塁状にしたとみられるあとがあり、その間に一直線に山腹を下るように作られた「たて堀」とみられるものがある。

考 察

中世寺院がそれぞれ城砦としての構築物をもっていたものが多いから、これらもその名残りと思われるものではなかろうか。

あるいは法性寺裏山の久木大切岸の北端である 103.3m 高地を経て尾根伝いにここに達することができるから、岩殿寺境内から裏山伝いの攻撃に対する防禦として、名越切通防禦陣地の一部であったかもわからない。「たて堀」は室町末の城砦に見られるものだから、この遺構が古いものとしても後世の補修が考えられる。尚、この尾根路は観音霊場めぐりの巡礼路として江戸時代に使われたと伝える。

逗子駅裏山横穴群

所在

逗子駅裏山（今亡——駅裏の崖。山野根1丁目）。

発見事情

昭和6年9月10日逗子駅裏開札口工事のため、裏山を切崩中、横穴4穴を発見したもの。遺物出土により逗子警察署より工事中止を命ぜられ、町役場職員・荒井友三郎逗子小学校長・嶋原教員らによって16日ひる頃より発掘が開始せられ、遺物は役場及び小学校に保存された。赤星（神奈川県史蹟名勝天然記念物調査委員）は17日午後3時より発掘に立合い、遺物出土状況の聞き取りと残存遺物出土状況を記録した。遺物は小学校に保存。以下記すものは赤星ノートに記録されたまま今日まで発表の機会に接しなかったものであり、ここにその全貌を明らかにする。

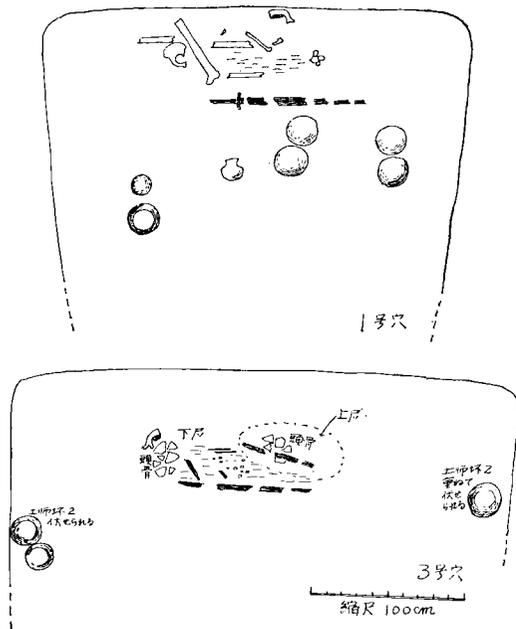
位置と現状

逗子駅裏開札口真正面である。現在切崩された山腹はコンクリート吹付けによって崩壊を防いでいる部分であり、中腹よりやや上方に横に4穴がならんでいた。コンクリート吹付け以前までは横穴奥壁を残した部分には草が生えており、その位置を知ることができた。

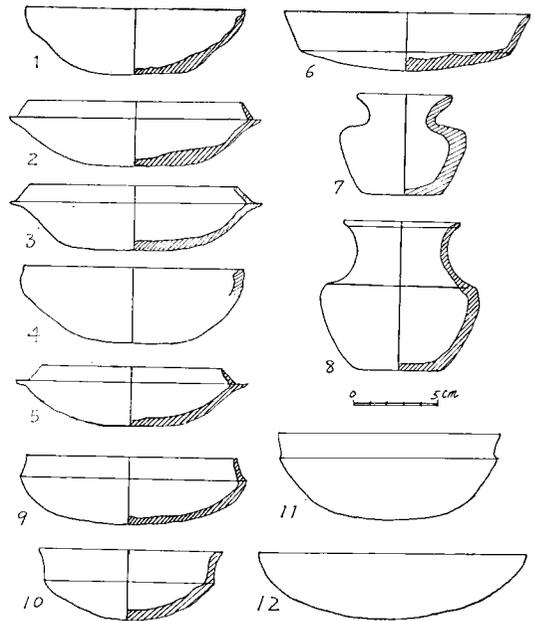
横穴の記録（番号は左から）

第1号穴 調査時既に前半が切りとられていたため、玄室と羨道との関係を示す形は不明であった。又奥壁と天井との形態は記録されていないため不明である。残存部平面形は隅丸であり、奥幅が広く（280cm）前方へ次第に狭くなるもの（奥壁より180cmのところ幅250cm）である。奥壁から50cmほどの間に人骨がわずかに残存したが、多くは粉状であり、奥壁中央辺に接して顎骨があり、奥壁より20cmから40cmほどはなれた中央より左部分に腕の骨とみられる残欠が数本あり、これとともに頭骨片及び歯もみられたが、それらはかなり甚しく移動したもので、とうてい埋葬のままとは思われぬ状態であった。これらの残存状況からは奥壁に平行に頭を左方にして屍が置かれたと思われるが人骨の散乱が甚しい。次に記す如く、遺物が当初のままの状態と考えられるのに何故人骨のみが散乱状態であるのかは不明である。

遺物状況 安置されたと思われる人骨位置に平行にその手前に直刀1が茎を右にしておかれていた。土器はその前にならべ置かれていたが、何れも伏せられていたことは注目すべきである。左方には土師器の埴^{つぼ}と坏^{つぎ}が前後にならべて伏せてあり、その右に同じ形の土師埴が横にたおれていたが恐らくこれも伏せられていたものがたおれたと考えられよう。右方とその左とには蓋^{ふた}坏^{つぎ}と思われる須恵器^{すえき}が身を奥に蓋を手前にならべて伏せられていた。これらのほかに刀子断欠1と須恵器横瓶断欠がでている。



逗子駅裏横穴



逗子駅裏横穴出土品
1号穴 1~5須恵器、6~8土師器、3号穴 9~12土師器

第2号穴 不詳。

第3号穴 同じく前半が切りとられたので形ははっきりしないが奥壁が最も広く、前方に次第に幅を減ずるものと思われた。奥幅335cm、残存奥行140cm。奥壁に平行に頭を左にした1体が葬られたらしい。この人骨は床についており、顎骨・頭骨が碎けて検出され、頭骨よりややはなれて玉類（土製小玉9・ガラス小玉24）があり、これと頭骨との間に刀子2・鉄鏃2があり、これらの骨の前方に奥壁に平行に茎を左にした直刀（断欠となる）が検出された。

これらの人骨の上方に10cmほどの土をへだてて頭骨片をふくむ骨残片と直刀1が検出された。これは第1次埋葬後流入土が10cm覆うた時点で更に第2次埋葬があったことが知られる。左壁に接して土師器2個が前後にならべられ伏せて置かれていたといい、右壁に近く土師器2個が重なったまま発見され、その前方に須恵器瓶（口欠）が置かれており、付近から曲玉1個が検出されたという。これらが床面にあったものか、その下に若下の土をへだてていたものか不明である。曲玉は発見後失なわれた由で実見していない。これらのほか土師器壺破片と高坏脚部断欠が出ている。

第4号穴 不詳。

山野根切崩山腹発見横穴群

A横穴

所 在

逗子駅わきガード北側より山野根谷へ入ってつきあたりの山腹（今亡一山野根2丁目）。

発見事情

昭和6年11月20日ころ、山野根299番地北側山腹を切崩中横穴1個発見。11月23日荒井友三郎逗子小学校校長・鳴原馨教員・竹川貿易新聞記者らによって発掘されたもの。翌24日赤星は現地について横穴を見、発掘者から遺物位置を聞書した。遺物は小学校に保管した。

横穴形態

平面実測図によると奥幅に比べて前幅の狭くなった隅丸台形であり、前壁中央に羨道がある。天井はドーム型と註記されている。奥幅320cm、前幅270cm、奥行300cm、高120cm、羨道幅110cm、羨道長100cm。

遺 物

直刀……イ、左壁に近く（20cmはなれる）壁に平行な直刀1検出。断片となっており、茎方向不詳。ロ、玄室中央より少し前に主軸に直角方向に直刀2、重なった形で検出（発掘中断片となった由）。幅広。鐔が右にあるから茎を右にして置かれたもの。鐔1は透窓付。他の1は透窓なし。何れも破片となる。

刀子……直刀の奥近くにあったが断欠。

鉄鏃……左壁際の直刀より50cmへだてたところに尖根鉄鏃断欠があったが何本か不詳。尖端を残すもの1。鏃形は楕円に近い形。

銀環……4個検出。直刀付近より3右壁中央より約40cmはなれて1。何れも銅に鍍銀したもの。

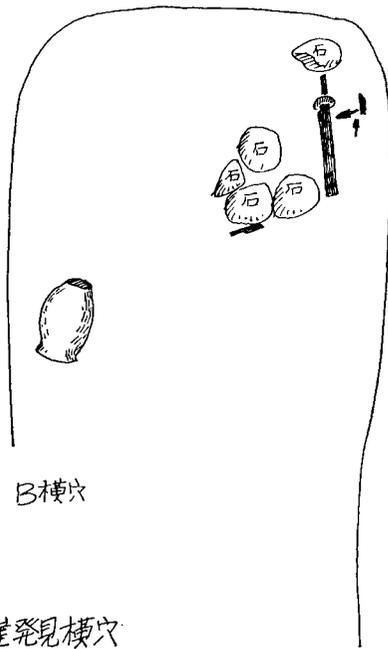
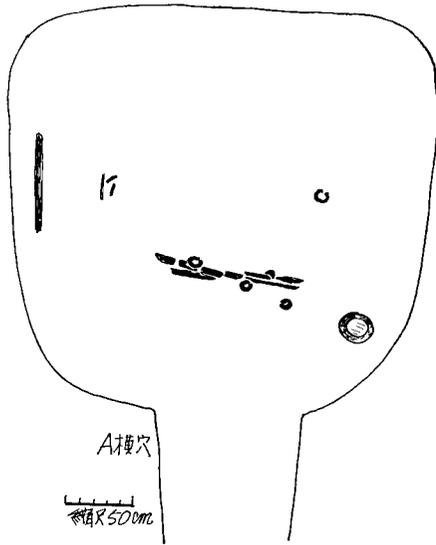
土師器坏……玄室右前隅近くに上向になっておかれていた。径13cm、高4cm。

人骨状況……全く不明。残存骨の有無も不詳。

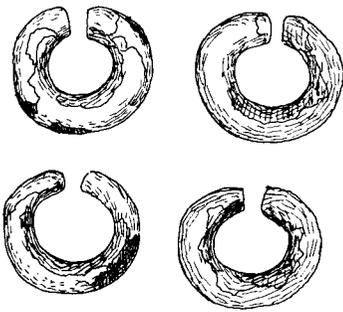
B横穴

所 在

山野根谷に入ってつき当り。切崩中の山腹。前回発見（昭和6年11月）横穴の左方（今亡一山野根2丁目）。



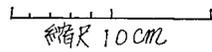
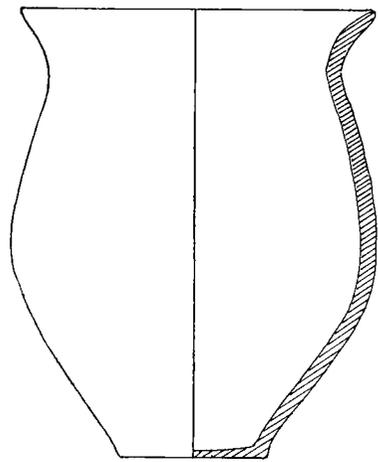
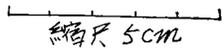
逗子山野根切崩崖発見横穴



A横穴出土



B横穴出土



B横穴

発見事情

昭和7年5月20日。切崩中の崖に横穴発見の旨荒井返子小学校長より電話あり、21日午後4時ころ現場に至り、工事中の土工に一時中止を依頼し、荒井校長・鳴原教員と赤星とにて発掘した。横穴前半部は既に土がかき出されており、奥半部に流入土厚さ約50cmを残していた。土工に発掘させ、遺物位置を記録した。人骨は全く残っていなかった。遺物は小学校に保管した。

横穴形態

平面形は隅丸の矩形。断面アーチ形の筒形。但し、天井は奥壁に向ってドーム状に低くなる。前壁なく玄室前方でわずかに幅を狭めて玄室と羨道との境となる。玄室奥幅200cm・前幅200cm・奥行250cm。羨道幅不詳（左壁切崩されたため）。奥行約100cm。

遺物

直刀1……玄室右奥に右壁より約40cmはなれ、壁に平行な直刀を検出。切先部分を欠く。長49cm。茎を奥にしておかれたらしい。直刀の奥に1個と左側に4個の岩塊が床面におかれており、直刀はこの内側にある。卵倒形鐔はあるが、これには透窓がない。

刀子……イ、断欠。切先及び茎を欠く。4個の岩塊の手前にて検出。ロ、茎部と身部の一部を残す断欠。イの近くに検出。ハ、茎部の断欠。同。

鉄鏃……1個。やや長い身。わたくりが後へのびる形。柄は短い。平根式に属するもの。刀子断欠ロの付近より検出。

土師器甕……完形。左壁より30～40cmはなれたところに口を入口方向にして横たおしになって検出。高22.5cm・口径17.5cm・底径7.5cm。

山野根本田光氏裏山横穴群

所在

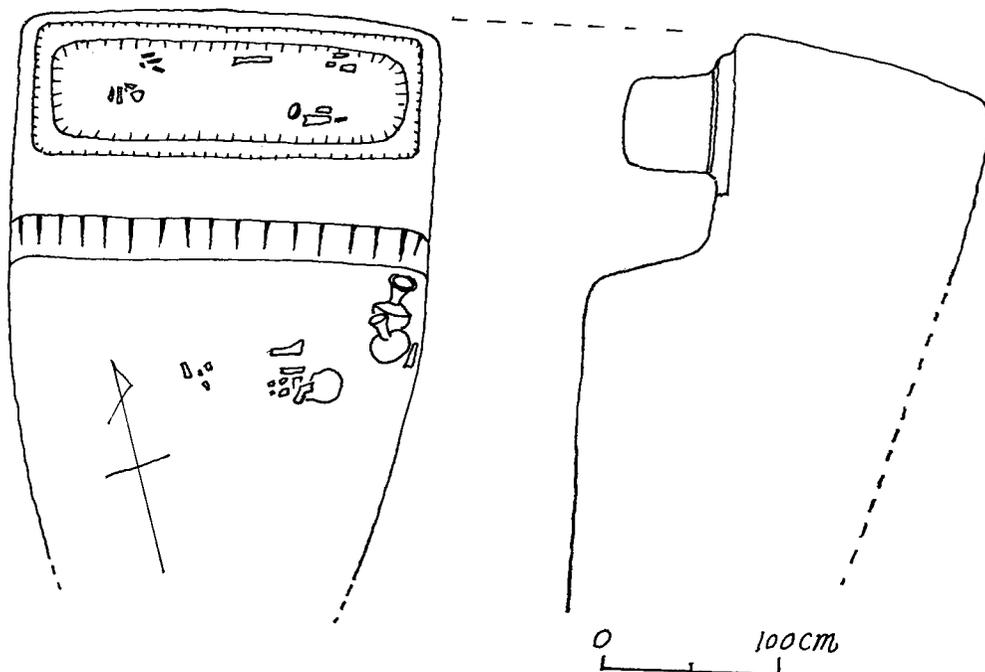
山野根2丁目3、本田光氏裏山。

発見事情

昭和12年12月、山野根413本田泰氏方で裏山に四阿を建てるため、山腹に路を作っていたとき、横穴3穴を発見したもの。本田泰氏から連絡が知人である鎌倉の亀田輝時氏にあったので、12日にこれを調査した。同行者は亀田輝時氏のほか太刀川総司郎氏・進藤舜氏及び赤星である。2穴を発掘した、出土品は本田泰氏宅に保管した。当日の情況は当時亀田氏が主催していた雑誌「鎌倉」第4巻第1号（昭和13年1月発行）にのせられた。執筆は赤星。

調査

鎌倉第4巻第1号にのせられたものをそのまま転記しておく。現在では雑誌「鎌倉」を持つものはほとんどなくなったからである。仮名は現代仮名使に改め、むずかしい漢字は若干仮名に改めた。（ ）内は註乃至解説として加えた。



山野根本田泰氏裏山2号穴

鎌倉史跡めぐり会記録 (13)

○第61回 昭和12年12月12日

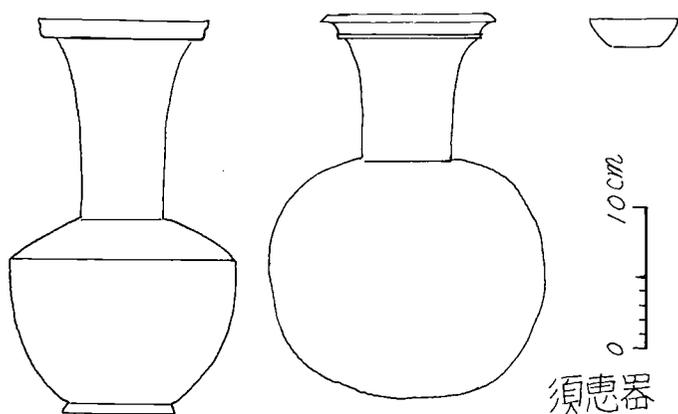
参加者 亀田・太刀川・進藤・

赤星

扇ヶ谷に史跡めぐりの杖ひくはずが予定変更で逗子町へ。古鎌倉の郊外であるはずの地形でありながら、鎌倉関係の遺跡遺物のきわめて少ない逗子である。何か新資料があつての予定変更かと思つたら、駅裏の本田泰氏方で裏山にあずまやを作ろうとして山腹の横穴

の土をかきだしたら土器がでたというので、実地踏査というわけである。きてみると先年山腹を崩したおり、数個の横穴が発見されて、土器・土小玉・ガラス小玉などが少しばかりでたことのある山の西隣の山腹である。ここには東方の松林中からここへかけて10数個の横穴が存し、数年前これを踏査して山野根横穴群と名をつけたものであった。

本田氏方の横穴は3個で、西端を1号とすれば、この1号は天井が崩れおち奥壁がわずかに上半部を出しているばかりである。2号はこれよりわずかに東下方にあり、入口の大部分がうもれていたのを、今回土を大部分だして前面を平にしかけてある。土器の出たのはこの横穴である。入口(羨道部)は崩れて原形を知り得ないが、現存部で見るとこの横穴はほぼ方形の平面を有し、天井はドーム形である。奥行220cm、幅230cm。わずかに胴がふくらんでいるかにみられる。この横穴の後半部は一段高くなって棚乃至床といった状態にある。土器はこの床の下方からでたもの。東隅に2個が口を奥にむけて倒れていたもの。奥の方にあつたのが長頸瓶(高さ27.5cm)で他の一つは横瓶(高さ27cm)でともに祝部土器(現在は須恵器とよぶ)だ。我々は土器の出土状況をあきらかにし得たことを甚だうれしく思う。土器そのものはありふれた品だけれども、出土状況ということが一層重要な役割をするのであって、今日の考古学資料中、横穴における遺物位置ということ即ちその発見状態が不明である場合が甚だ多いからである。今後充分な注意がはらわれねばならぬ点である。横穴の構造を充分見学するつもりで、^{とこ}床の土を床の下にかき落していたら、意外の発見をした。床の上面に奥壁に並行に深い長方形の凹所を発見したのだ。床の上面にこんな凹所のあることはこれが造付石棺であることを意味する。一同は急に緊張し、充分な注意をもって土を除いた。中央部で上面から15cm下に祝部土器(須恵器)の小坏(径6cm、高さ1.9cm)が発見された。注意はますます加えられたが、その後はついに何もみられなかった。ただ土に混じて木炭の小片がでただけだ。ついに土がみな出された。東隅に近く脛骨の一片が充分注意することによって、それとみわけられる腐朽状態で発見された。ここに1遺骸がかつて安置せられたことが明らかになった。膝のあたりに小白菌の断片1個がみいだされた。他にわずかな褐色の骨片を



山野根本田泰氏裏山才2号穴出土

みた。古い時代に既に発掘されたものである。何らかの遺物が存したかも知れないが既にその時失なわれたものらしい。土とみまがう骨片をていちょうに造付石棺内に埋めて土で覆った。この石棺は長さ2m、幅56cm、深さ55cmあって、前後が丸くなっていた。棺の周囲は一段低くほられていたらしく、東西両端及び奥壁に接した部ではそれが明らかである。この棺中の土に混じていた土器はおそらく以前発掘の際、土に混じて見失なわれたものにちがいない。したがってその位置は埋葬当初のものではないのである。横穴中に床（棺座）を有する形式は三浦半島ではむしろ後期的なもので、遺物などほとんど発見されたことのないものである。まれに今回の如く発見されても、その形式が新しいものに属するのである。この造付石棺の例は鎌倉町長谷の長楽寺に1個と、横須賀市公郷町神金に1個があるほか知らない。今回のを合わせて3例である。

第3号横穴はこれの東上にある。ここは近頃内部がかきあらされた形せきがあったが、やはり古い頃に既に発掘されたもので、何ら遺物をとどめていないらしい。土に極めて小さい土師器断欠と鉄の小断片がみられたから、やはり何か遺物があったものであろう。この横穴はやはり入口が崩れてしまっていた。奥行450cm、幅290cm。入口にむかって少し狭まっている。主軸は正南北である。

横穴見学を終えて昼食をした。午後は山ふところの暖かいこの本田氏方で座談した。

山野根本田庄作氏裏山横穴群

所 在

山野根 294 本田庄作氏裏山（山野根 2 丁目 4）

発見事情

昭和 2 年 4 月 24 日、駅踏切の北方山野根墓地上方の山腹の松林中に、逗子小学校の鳴原馨教員と 10 穴の分布を確認し、各穴の形態と寸法を記録したことがあるもの。

調 査

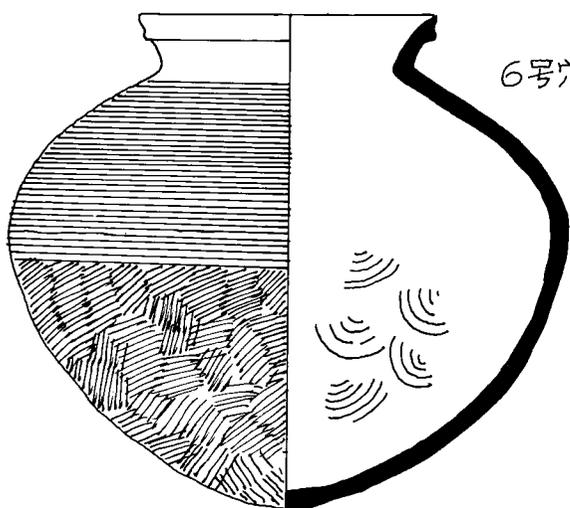
昭和 29 年 1 月 17 日～27 日。県教育委員会主催調査。従来古墳時代後期のものとして研究され、発表された横穴中には出土品あるいは横穴形式において、これらを一様に古墳時代後期と考えることのできぬもののあるを考え、横穴形式とその内容（埋葬法乃至副葬品）について再確認のために本横穴群に対して学術調査を行なったもので、発掘は横須賀考古学会員がおこなった。この結果は県文化財調査報告第 21 集（1954 年）に「逗子市山野根横穴群」（赤星執筆）として記載された。以下この中から調査の事実をぬき書する。10 穴の存在が明らかにされているが、下方の 3 穴（1 号～3 号）は土が邸内に崩れおちるおそれがあるので発掘をさしひかえ、上方に一列にならぶ 7 穴（4 号～10 号）について実施された。左から番穴がつけられた。

第 3 号 奥壁アーチ形、断面アーチ形。奥幅広く、入口にむかって狭くなる。高さは奥が高く、入口にむかって低くなる。天井は奥だけ残って前半は崩壊している。奥壁に接して棺座がある。玄室と羨道との境はない。奥行 300cm、奥幅 360cm、高さ 233cm、棺座奥行 180cm、棺座高さ 50cm。主軸方向南々東。遺物なし。棺座上に鎌倉期のぶ厚い素焼皿（かわらけ）断片数個検出。

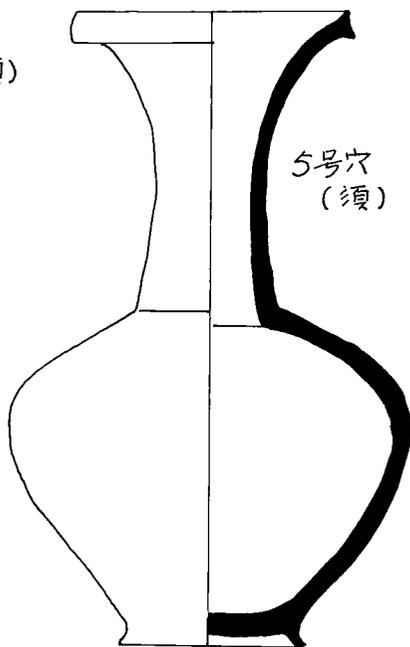
第 4 号穴 奥壁アーチ形、断面アーチ形。奥は幅、高さとも最大で入口にむかって幅と高さを減ずる。床は前方へゆるく傾斜。奥壁に接して棺座がある。玄室と羨道との境がない。奥行 577cm、棺座上奥幅 400cm、高さ 240cm。奥壁前傾。棺座奥行 150cm、棺座高さ 100cm。主軸方向南東。

棺座上に遺骨及び遺品は全くなかったが棺座前方中央左右 2 ヵ所に床に接して火葬骨が納められている。骨は極めて細片となり、灰とともにおかれていた。副葬品は骨とともに火葬されたと思われ、左方火葬骨に混じて曲玉 1（石質不明、深緑色と淡緑色とまだらになっているもの。長さ 2.9 cm）、切り玉 4（水晶製、ひびわれている）、須恵器断片 2 が検出された。右方の火葬骨には何も伴出しない。左右火葬骨の中間あたり、入口に近い部分に土師器坏小断片 5 と鉄小片 1 が検出された。

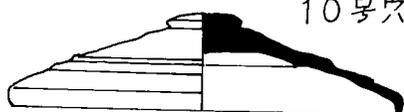
第 5 号穴 奥壁に接して造られた棺座の前縁に中央を方形に開いた障壁（切り残された岩壁）があるので、複室状にみえる。これは棺室である。奥幅広く前方は狭い。高さも手前が低い。前室奥壁はアーチ形。その中央に棺室の入口を開くもの。前室は奥幅広く入口にむかって狭くなる。高さも奥が高く、



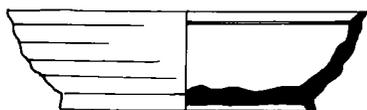
6号穴(須)



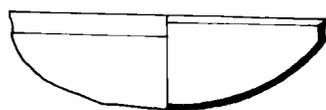
5号穴
(須)



10号穴(須)



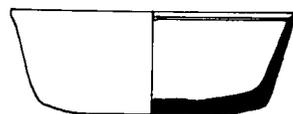
7号穴(須)



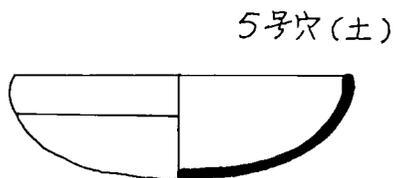
6号穴(土)



6号穴(土)

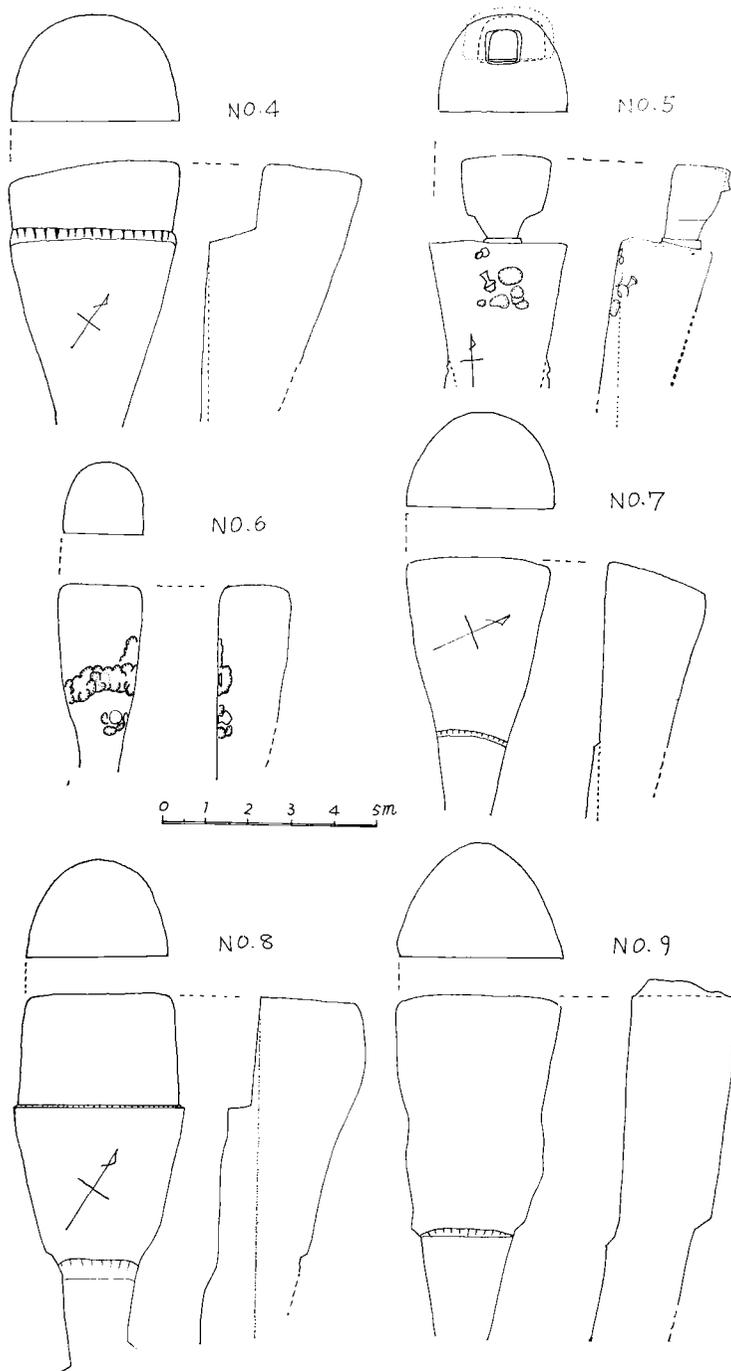


5号穴(土)



5号穴(土)

穴横山裏氏作庄田根本野山



山野根本田庄作氏裏山横穴

前方が低くなる。床は前方に傾斜。玄室と羨道との境はない。棺室奥幅200cm、前幅160cm、奥行150cm、奥高120cm、前高100cm。奥壁アーチ形。棺室羨道断面もアーチ形。前室奥幅317cm、高さ240cm、奥行350cm。天井は前半部崩壊。

棺室内には骨片も遺物もない。前室奥に骨片2。遺物は前室奥から検出された。須恵器長頸瓶（高さ24.8cm）、土師器杯（径14cm）、土師器浅鉢（径11.5cm）。他に須恵器断片1がある。

第6号穴 奥壁アーチ形、断面アーチ形。奥幅最も広く、入口にむかって幅と高さを減ずる。玄室と羨道との境がない。床面略水平。奥壁の前傾はないが少し凹面になっている。奥幅185cm、高さ165cm、奥行450cm。羨門幅80cm。主軸方向南々東。玄室と羨道の境はない。奥から200cmまで幅があまり狭くならず、この辺から幅を減ずる。この部分に玄室を横断して幅60~70cm高さ35cmの岩塊積部分がある。この内が玄室であろう。奥左半部に骨片散在（頭骨・腕など）。後世ほりあらされた

たあとである。玄室中央部では床から5cmへだてた土中にガラス小玉（浅黄色半透明、径6.5cm）1個

検出。玄室と羨道を境したとみられる岩塊積の外方、右壁に接し、口を下にしてふせた須恵器甕（高さ19.9cm）1個。岩塊積中央部床面上にふせられた状態で土師器盤1（径20cm）が検出されたほか、人骨散乱部分に土師器坏断欠1が検出された。

第7号穴 奥壁アーチ形、断面アーチ形。奥幅と高さが最も大きく、入口にむかって幅と高さを減ずる。玄室と羨道の境はないが床面が急に5cm低くなる部分から前方が羨道であろう。床面略水平。玄室奥幅350cm、高さ220cm、奥行420cm、前幅170cm、羨道長さ200cm、幅85cm。主軸方向東々南。遺骨全くなし。玄室と羨道との境付近に須恵器坏（復原径14.2cm）断欠検出。尚、かきまわされた上中から素焼小皿断欠（鎌倉期のもの。所謂かわらけ皿）と人骨小片や歯を検出。

第8号穴 奥壁アーチ形、断面アーチ形。奥幅広く前方へ次第に狭くなる。奥壁に接し棺座がある。床面は前方へ緩傾斜する。玄室と羨道との間に10cm内外の喰違いがある。これは側壁から天井を経て反対側の壁に達し、羨道と玄室を区別する。前壁の退化したものである。床面はここから急傾斜して羨門にむかって低くなる。棺座奥行255cm、棺座前縁幅370cm、奥幅355cm、奥壁高さ230cm、棺座高65cm、棺座下幅400cm、玄室前幅228cm、棺座を含め奥行350cm。主軸方向東南。人骨残存なく、埋葬状況不詳。羨門部に須恵器瓶断欠検出。尚、棺座前方の室中央辺に灰と素焼皿1（鎌倉期）を検出。

第9号穴 奥壁上部と、玄室と羨道との境の左右壁とが原形を残すだけで、大部分が崩壊していた。奥壁アーチ形、断面アーチ形、奥幅広く、前方にむかって幅と高さを減ずるもの。玄室前部の幅が急に狭くなり、この部分で床面が22cm低くなって羨道となる。玄室奥幅400cm、奥行430cm、前幅260cm、羨道奥幅220cm、長さ300cm、羨門幅30cm。人骨も遺物も検出されない。

第10号穴 奥壁アーチ形、断面アーチ形。奥で幅と高さが最大で、前方にむかって幅と高さを減ずる。玄室前方で急に狭くなり、前壁の名残りとなる。この部で床が急に25cm低くなり、羨道となる。奥幅390cm、高さ252cm、奥行560cm、前幅270cm、前高209cm、羨道奥幅220cm、長さ250cm。玄室左側中程と奥とに人骨残片をみる。玄室左手前に須恵器蓋1（径15.6cm）と玄室中央前方に土師器坏断欠1を検出した。

まとめ

すべての横穴が盗掘されていたから当初の状況は不詳。調査8横穴が何れも断面アーチ形で天井と側壁との境がなく入口が狭く、奥にゆくにつれて幅と高さを増し、奥壁は若干前傾し、アーチ形である。床は入口にむけて緩傾斜する。奥壁に接した棺座（No. 3・4・8）又は棺室（No. 5）の設けられたものがあること、玄室の側壁延長がそのまま羨道に移行するものが多いこと、但し、玄室と羨道との境で床が急に低くなるものはその部分からが羨道とみられる。玄室前壁の名残りのあるもの（No. 8・9・10）があるが、それらは右方（東）に集合している。内部がひどくかくらんざれているから当初の埋葬の仕方はわからないが、火葬骨を埋納した例がある。遺物の大部分が失なわれているが、第5号穴では棺室直前に、第6号室では岩塊積の前に土器がおかれている。その他は玄室前方（羨道奥）におかれたと思われる。第4号穴では火葬骨に玉類が伴ったが焼けていた。これは火葬後骨混りの灰を遺物と

もに埋納したものである。

横穴の形態と遺物とからこれらを8世紀代のものとする。火葬骨埋納のあることは一層これを確かにするものである。尚、これら横穴内から厚手の鎌倉期素焼皿（所謂かわらけ皿）の出ることは開口された横穴が鎌倉期に再び埋葬穴として使われたことを物語るものである。

山野根谷奥横穴群

所 在

山野根1丁目6 小沢勉氏裏山。

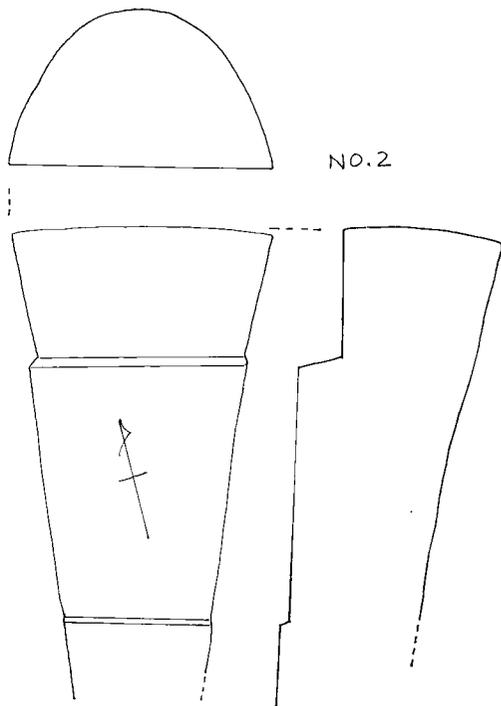
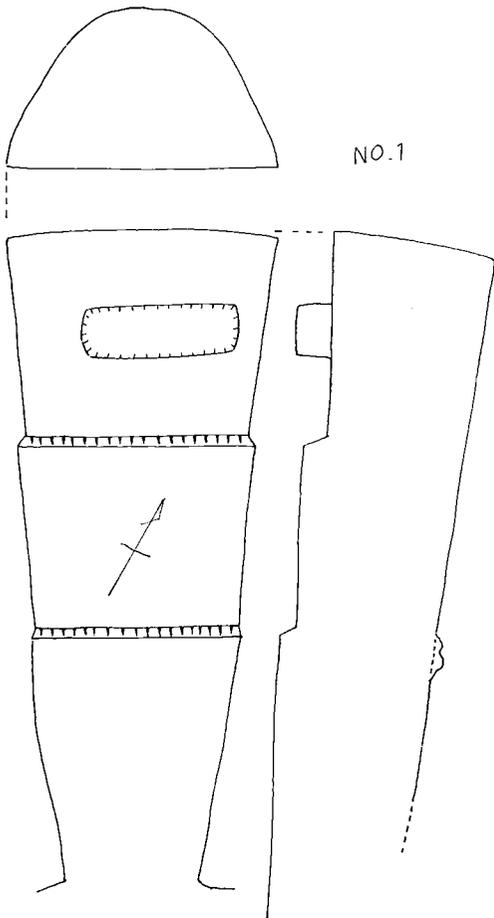
発見事情

久木トンネル南入口の東方、小谷奥山腹が宅地造成されたため発見されることになったもの。昭和29年横須賀考古学会員の肥後呂治君がその存在を知らせてきたもの（当時山野根433 真田氏裏山）。11月25日現地を訪問し、実測した。2穴よりなる群。山頂より約10m南に下ったところにある。

形 態

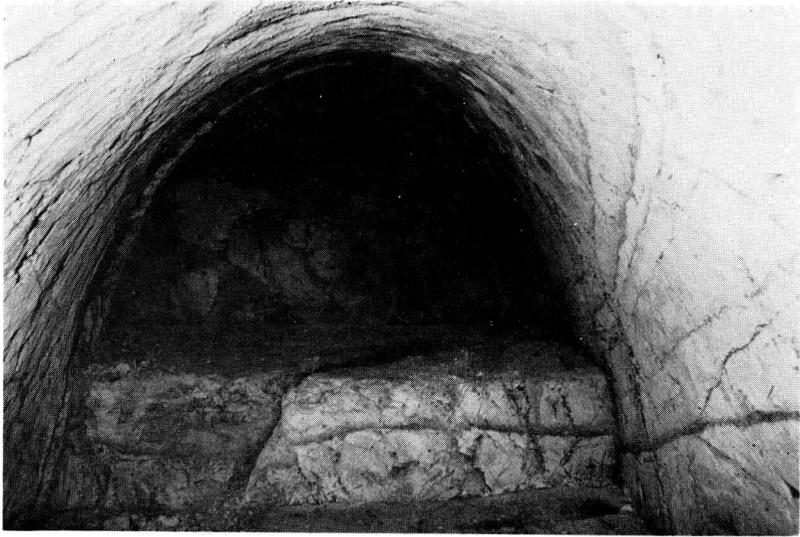
1号穴 断面アーチ形。奥幅が最大。前方へ次第に幅と高さを減ずるもの。玄室と羨道との境のない膨脹筒形。奥壁に接して棺座がある。棺座高40cm。棺座奥行280cm。奥壁アーチ形、前傾。奥幅377cm、棺座前幅309cm、前縁より100cm入ったところに横長に造付石棺がある。長さ210cm、幅80cm、両端は丸味をもつ。深さ50cm。前壁がなく、玄室と羨道との境がないが床面は玄室と羨道との境で26cm低くなっている。したがって玄室奥行530cm、羨道長さ330cm。本穴で特筆すべきは玄室全面が丹塗（丹色はよいものではなく、レンガ色）になっていることである。側壁下部は丹がきえているが上方から天井にかけてはよく色が残っている。内部の上はすべてかき出されているので人骨及び遺物は全く不明である。主軸方向東南。

2号穴 断面アーチ形。奥幅が最大、前方へ次第に幅と高さを減ずる形。平面形では玄室と羨道との境がないが、床面では玄室との境で15cm低くなって区別できる。奥壁に接して高さ65cm、奥行185cmの棺座がある。奥壁アーチ形、前傾する。奥幅362cm、棺座前縁幅287cm、棺座下から羨道境まで340cm、羨道長さ73cm、羨門幅185cm。側壁がくわ日をたてに揃えて仕上げているが、くわ日はあまりはつきりせず、壁面はむしろ平滑である。土がかき出されているので、人骨及び遺物は全く不明である。主軸方向南々西。



0 100
cm

山野根谷奥横穴



熊野神社境内第2号横穴



山野根谷奥第2号横穴

山野根熊野神社境内横穴群

所 在

山野根熊野神社裏（山野根2丁目4）。

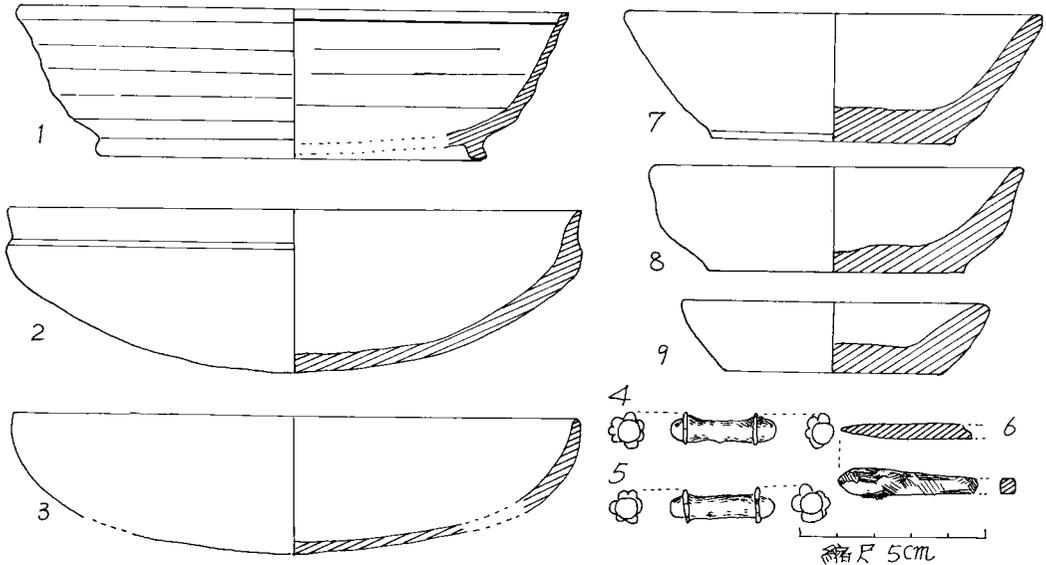
発見事情

昭和2年4月24日山野根東方の横穴として5穴の存在をノートに記しているのがこれであろう。すべて入口が埋もれてわずかに存在が知れる程度と記してある。昭和46年2月踏査の際、すべての入口が大きく開いていたので、実測した。神社屋根棟と同じくらいの高さに横に配列する。このとき西方にずっと離れた1穴（山野根2～4～8 山口氏裏山腹）の存在を知り、総数6穴となる。3月末逗子市教育委員会にて、第2・第3穴を発掘調査した。

横穴構造

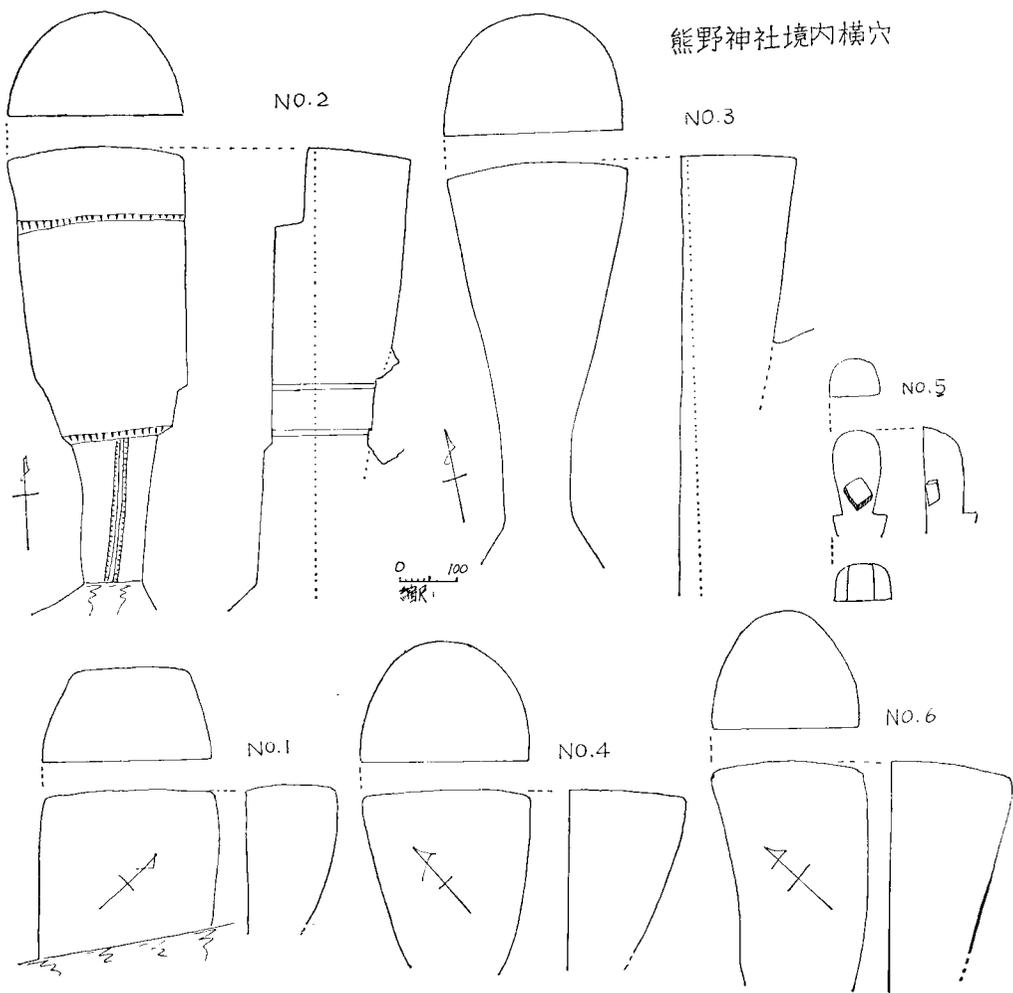
第1号穴 前半が切りとられ大きく開口する。内部の土がすべてかきだされている。断面アーチ形。奥幅が広く、前方に次第に狭くなる形。隅丸。奥壁と天井との境が丸く移行する形。奥幅300cm、高さ154cm、残存奥行200cm。主軸方向南東。

第2号穴 断面アーチ形。奥壁に接して高さ54cm、奥行124cmの棺座がある。奥壁アーチ形。前傾。奥幅303cm、高さ170cm。棺座前方305cmに側壁が左右から7～8cm張出して前壁の名残りを示す。更に



1 須恵器坏復原 2-3 土師器復原 4-5 飾金 6 鉄鍔片 7-9 鎌倉期黄焼皿

逗子市熊野神社2号穴出土品



125cm 前方で再び側壁が左右から13~14cm張出してこの部分にも前壁の存在したことを示す。これから前方が羨道と思われる。羨道長250cm。羨道幅103cm。羨門外壁は外にひろがる。

内部は古く発掘されており、わずかの須恵器片・土師器片・鉄片を検出した。須恵器は高台付坏1、土師器は坏2として復原せられるもの。他に須恵器片若干あり、復原できないが断片の形から高台付長頸瓶であろうと推測される。鉄片は尖根鉄鏃断片6~7片と両頭釘2である。尖根鉄鏃断片中、頭部残欠1があり、この形は断面四角な細棒の先をたたきうすめ、先端を圭頭形にしたもの。両頭釘は厚さ1.8cmの厚板にうたれたもので、釘の両端に円頭をもち、花形の座があったことが知られる。これは楯の飾釘と推定されるもの。羨門部には閉塞の岩塊がわずか残っていた。主軸方向南。

尚、遺物中には土に混在していた厚手、焼成不良の素焼小皿断欠があり、3個の小皿として復原せられるものであるが、これは鎌倉期のものであり、墳墓に使われる厚手かわらけ皿である。この出土は本穴が中世既に開口せられ、墳墓穴（やぐら）として利用されたことを物語るものである。

第3号穴 断面アーチ形。奥壁アーチ形。奥幅が最大で前方に次第に幅が狭くなる形。玄室と羨道との境がない。奥幅311cm、高さ200cm、奥行610cm、羨門幅122cm。羨門外壁は急に左右に開く。主軸方向南々西。古く発掘せられたもので、壁面風化甚しく、内部には土に混じて土師器細片2片があっただけである。

第4号穴 断面アーチ形。奥壁アーチ形。奥で幅と高さが最大で、前方に次第に幅と高さを減ずるもの。奥幅295cm、奥高210cm、奥行300cm。壁面の仕上は極めて雑。主軸方向東南。

第5号穴 極めて小形。平面形は隅丸胴張矩形。奥壁から天井にかけてはドーム形。奥行145cm、最大幅84cm、高さ70cm。羨門幅47cm。羨門は切石で閉じられていたらしく、羨門の大きさに近い大きさの厚さ25cmの泥岩切石が内部におしたおされている。この切石は羨門上半びつたりの大きさであるから、もう1枚この下になるものがあつたと考えられる。羨門外は左右に若干(幅30cmほど)ひろげられている。主軸方向南西。本穴は他と違った構造で且つ甚しく小さい。

第6号穴 断面アーチ形、奥壁アーチ形。奥で幅と高さが最大であり、次第に前方へ幅と高さをちぢめる膨脹筒形構造。玄室と羨道との境はない。奥幅255cm、奥高200cm、奥行400cm。壁面は肋状仕上になっている。主軸方向南西。

要するに断面アーチ形。奥で幅と高さが最大で、前方に進むにつれて幅と高さを減ずるもの即ち断面アーチ形の膨脹筒型構造をもつものがすべてである。第5号穴だけは例外。他のものが玄室と羨道との境のない最末期型であるのに第2号穴だけが前壁の名残りとしての狭い袖がある。すべての穴が盗掘されており、わずかに残された第2号穴出土の土器片から8世紀のものと推測された。他はより新しい形態であるが、恐らく8世紀後半の造営であろう。

<発掘参加者>

赤星直忠	魚住祐子	宇内城一	宇内正成	川上久夫
軽部一一	剣持輝久	芥藤彦司	須賀由也	竹沢嘉範
塚田明治	湧川秀明			

山野根居合口横穴群

所在

仲の谷入口東側。小字居合口（山野根3丁目4、企業庁水道局逗子事務所背後）

発見事情

昭和2年仲の谷入口東側の山裾がきりとられたとき横穴が発見された。このとき出土した鉄製品断欠をもらいうけたが、それは大形刀子の茎部分ともみえるもので、柄先が蕨手状になったものである（註）。

昭和5年7月、仲の谷入口東側山端の横穴群として4穴を図示した。福岡正夫氏（山野根230）、中里重夫氏（山野根222）宅がその前にたっていた。昭和29年11月これらの東側にある穴を山本道平氏（山野根223）裏山の横穴として実測した。（註 考古学雑誌17—10「三浦記(三)」）

横穴形態

昭和46年2月これら横穴再踏査に際し、第1号穴から第4号穴前にかけては藤巻房吉氏（山野根3丁目4～13）、宮原正徳氏（山野根3丁目4～11）宅になっており、藤巻氏裏の第1号穴はもとのままとみられたが、他は存否不詳。山本道平氏裏には水道局建物を建築中であった。昭和5年、昭和29年の記録によると次の如くである。

第1号穴 前半を切りとられ半円状の平面を残す。残部奥行270cm、前幅331cm。天井はドーム形であり、中央での高さ160cm。切崩中須恵器瓶1と土師器坏2を出したという。

第2号穴 第1号穴の右。隅丸。奥幅250cm、残部奥行240cm、前幅が少し狭い。天井はドーム形。

第3号穴 第2号穴の右。隅丸。奥幅245cm、残存部奥行280cm、前幅220cm。天井はドーム形。

第4号穴 第3号穴の下方にある。前を若干切りとられただけ。奥幅200cm、奥行250cm、前幅180cm、前幅は前方で急に狭くなっているが、側壁はそのまま羨道につづくものらしく、前壁はないが、玄室と羨道との境で玄門部が狭くなる形と思われた。天井はドーム形。

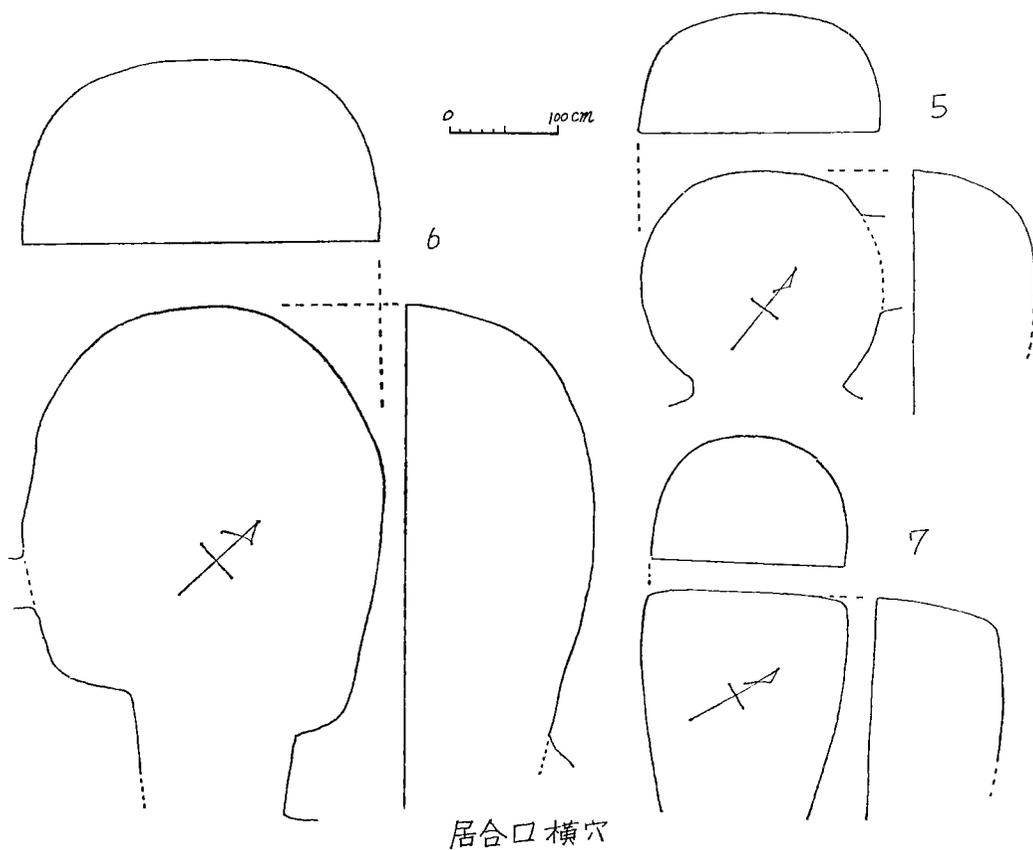
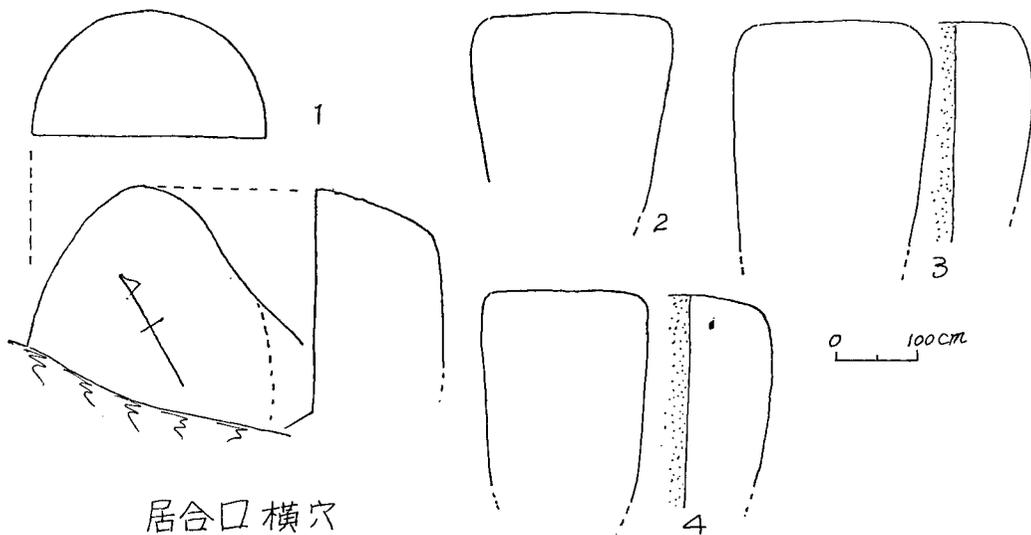
第5号穴 隅丸洞張。ほとんど円形に近い平面。入口が崩壊して大きく口を開く。中央幅225cm、奥行200cm、高さ100cm、羨道幅100cm。天井ドーム形。内部の土がかきだされており、礫若干を残しているから礫床であろう。主軸方向南東。

第6号穴 隅丸洞張平面。奥半部はほとんど楕円形。最大幅330cm、奥行400cm。前壁を大きく残す。羨道幅145cm、奥行80cm、高さ175cm。天井ドーム形。主軸方向南東。もと人骨若干と鉄鏃と土器と水晶切子玉を出土したという。

第7号穴 奥幅180cm、奥行200cm、前幅140cm、高さ120cm。前幅が若干狭い台形平面。天井はドーム形。主軸方向南東。

4号と5号の間がややはなれすぎるから1～4号と5～7号とは別の群であろう。しかしともにドーム

ム形天井をもつ同系統のものである。第6号穴が古いほかは新しいものの如くであるが、多く前半を失なっているので、前壁が不明のため、年代推定が困難である。



山野根仲の谷横穴

所在

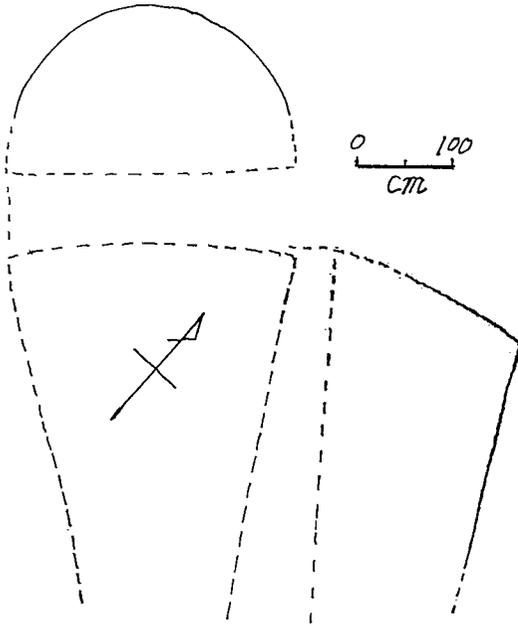
仲の谷、吉原氏背後山腹（山野根2～10）

発見事情

昭和28年11月、小池威人氏（当時逗子町川間523住）の知らせによって踏査した。昭和46年2月再踏査のときには発見できなかった。

遺跡

流入土深く、床面の寸法が測れなかったから、覆土上の寸法を記した。断面アーチ形。奥で幅と高さが最大で、前方に次第に幅と高さを減ずるもので、玄室と羨道との境のない形。膨脹筒形。奥幅288cm、高さ120cm、奥行360cm、羨門幅150cm。奥壁がひどく前傾する。主軸方向南東。



仲の谷横穴

山野根土師遺跡

所 在

山野根2丁目2。

久木へぬけるトンネルの方に進むために、駅裏を東西に通る路から山野根谷に入る（踏切の少し西方）。40mで左へ折れる。120cmほどで右にカーブし、70mで斜左へ折れるとトンネルに向う。この部で二又になっている。二又路を右に折れ、20mほどで斜左に折れる。この部分の右側には浅い谷があって、もと杉林だったところである。2丁目2～13あたりであろう。ここが杉林だったころ、ここに土師器の遺跡があった。海拔10m余。宅造により亡。

発見事情

昭和11年3月21日、画家の中村岳陵先生を訪れた帰り路、路わきの削られた部分に土師器の壺が出ているのをみつけた。路から1mばかり上である。路をひろげるため削りとられたらしい部分に縦に半分に切り残された壺があったのである。その後5月18日に再び岳陵先生宅を訪れたら、同じところに又土器が顔を出していた。壺をほりとった穴から左下20cmのところである。少し痛んではいたがほとんど形を残した深鉢であった。

遺 跡

当時ここは狭く浅い谷間で杉林になっていた。路に面した部分が削られていたのは路をひろげるとき削られたのであろう。杉林の地下は山腹から崩れおちた土で埋まっていたが、上部1mほどはやわらかい黒土だった。左（北側） $\frac{1}{2}$ ほどのところに下のやや堅い土を弧状にほりこんだような部分があって、土器はこの中に2個とも立っている形で発見されたのである。最初の壺は長甕といわれる形。後のものは深鉢である。径10cm、高さ8cm。小さい平底である。少々破損していた。これらの土器はそのころ新しい弥生式土器と呼んで、所謂弥生式土器と区別していた。今の区分からいうと土師器五領式であろう。現品は横須賀考古学会資料庫にあるはずだが、探し出せないのが、当時のノート（赤星ノート第5冊、昭和9年3月～13年6月）に記してあったものによった。

やや堅い土を掘りくぼめたと思われるところに土器が完形のまま近接して埋もれていたことから、その断面が堅穴家の形でなかったのからみて、埋葬地ではなかったかと考えられる。今考えるとその部分をほりひろげてみるべきだったと思うが、当時狭い谷間への路であり、掘るものもなし、落した土のやり場もなし、やたらに路傍を破壊しては悪いとの考えもあって、掘ってみなかったのである。今そのあたりは人家が立ちならんでいて、果してどのあたりだったかもはっきりしないが、返子市としては記録すべき遺跡の一つであろう。

久木小山氏裏山横穴群

所 在

久木2丁目4（小山氏裏山）。

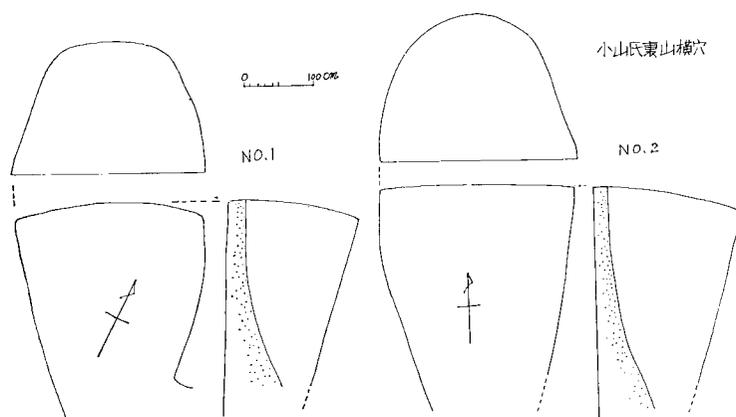
発見事情

昭和30年頃久木入口東側の谷（今の2丁目）に横穴があることを聞いたが調査の機会がなかった。昭和46年2月、久木・山野根方面横穴の再確認に歩いたとき、所在を確かめ、流入土で埋没のまま略測した。第1号穴（左）と第2号穴（右）との間隔約4m。

横穴形態

第1号穴 羨門部崩壊のため、玄室と羨道との境の形態不詳だが、残部の形から奥の幅と高さが最大で、前方にすすむにつれて幅と高さを減ずる断面アーチ形の膨脹筒形構造の横穴とみられた。奥壁アーチ形。流入土は最奥で25cmに及んでいる。計測は流入土上で行なったから若干の誤差がある。奥幅280cm、奥高190cm。奥より200cm前方での幅220cm。残存部分奥行320cm。主軸方向南々東。

第2号穴 第1号と同形。流入土最奥にて20cm。羨門部崩壊。壁はたてに削られていたが、肋状仕上になっていない。やや平滑。奥幅285cm、奥高215cm。奥から300cm前方での幅180cm。残存部奥行350cm。主軸方向南。



久木岩殿寺横穴

所在

逗子市久木5丁目7。

現状

岩殿寺本堂背後山腹に岩穴があり、石段（9段）をのぼって達する。石段上に石玉垣を設ける。奥壁中央に幅約60cm、高さ113cm、奥行225cmの切込をもうけ石造観音立像を安置する。この切込は後刻。現在この岩穴は入口が大きく崩壊しているが、戦前の記憶では家形天井の平入横穴の形であった。

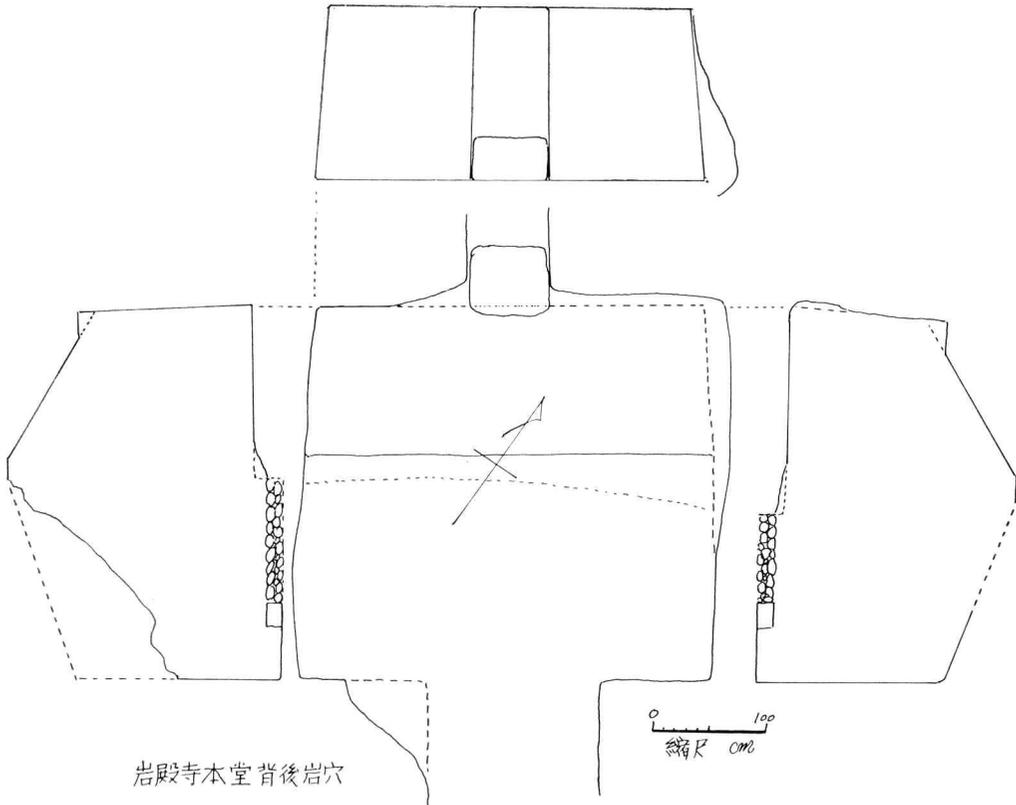
横穴形態

地質が泥岩のため風化甚しく形態の崩れがはげしい。奥幅344cm、奥行333cm、前幅360cmで方形に近い台形。右壁前部は崩壊して旧状不明であるが、左壁前部には前壁の残存部分（37cm）あり、もと前壁が左右にあり、中央に羨道があったことがわかる。左右壁はかなり前方へ傾斜し、崩壊部分が多いが残存部でみると側壁は左右同形、天頂部に幅23～25cmの平らな部分があり、室天井を左右に通る狭い平面部のあることがわかる。天井はこの狭い平面部から前方及び後方へ傾斜して低くなっている。即ち家形天井であり、入口は前面中央にあるから、家形平入形態の穴であると知られる。奥壁中央の穴は勿論後刻のもの。即ち本穴は通称やぐらと呼ばれているが、実は家形平入横穴の形態であると知られる。

源実朝が岩殿寺に参詣した記事が吾妻鏡にあるが、岩殿寺の呼称から恐らくこの穴を岩殿と称し、観音像が安置されていたものと考えてよいであろう。鎌倉時代にはこのような岩穴を仏殿としたものを岩殿・巖堂などと呼んだことは吾妻鏡に数所散見する。当時この穴が既にこの位置に存在していたということは、この穴の形が横穴の一形態と同形であること、鎌倉後半期に盛んに行なわれた岩穴墳墓堂である所謂「やぐら」と全く形態を異にするとところからも、これを横穴の開口したものとするものである。主軸方向南東。



岩殿寺本堂背後岩穴（横穴）



岩殿寺本堂背後岩穴

久木岩殿寺蛇やぐら横穴

所 在

久木5丁目7、岩殿寺境内。

形 態

岩殿寺本堂右前方、墓地わきに蛇やぐらと称する岩穴があり、内部に水をたたえているから詳細にみることはできないが、断面アーチ形で前壁のある穴と知られた。これは所謂「やぐら」にない形であり、横穴の退化形に多くみられるものである。即ちその形から本穴も恐らく横穴であり、本堂裏の奥の院とともに横穴群を形成するものと考えられ、尚、付近に埋没するものがあると思われる。

お猿島やぐら群

所在

逗子市久木1,790。

地形と分布

名越切通の北200mにある95.3m高地山頂平場の東側にある山腹のいくつかの切岸や平場を下ったところにある最も高い切岸(7~8m)の下に幅7~8mの大きい平場がこの大切岸をめぐって南北に長くつづき大テラスを形成している。やぐらはこのテラスを前面にした大切岸に作られており、95.3m高地の東約30m(70m等高線の通る付近)、法性寺裏山の日朗墓堂の西約100mにある。4穴ならんでいるが右の3穴が接しているのに対し、左の1穴は少しはなれている。所謂お猿島のやぐらはこの西方にある山頂をめぐるまんだらどうのやぐら群全体をも含んで古くから呼びならわされたものであるが、お猿島と呼ばれる地は現在の小字区分からは法性寺墓地より北側にある山腹から谷を含む一帯の呼名である。江戸時代には現在のまんだらどう辺までも含む広い地域のよび名であったかも知れない。本やぐら群所在地は小字名からすれば「西名越」である。

現状

1号やぐら——切岸の自然崩壊により、このあたりには山腹を構成する凝灰岩の崩壊した大小岩塊が積み重なっている。やぐらは前半が崩壊して奥半部が残る。間口215cm、奥行105cm。流入土が厚いらしく現在高さ66cmしかない。奥壁右方に幅37cm、高さ30cm、奥行17cmの矩形の籠^{がん}がある。主軸方向南東。本やぐらの右壁外が右(北)に130cm、深さ20cm切りこまれているのはこの部分で後世石切されたあとであるかも知れない。

2号やぐら——1号やぐらの残存する切岸面から100cm切りこんだ面に掘りこまれたやぐらである。間口250cm、奥行250cm、高さ135cm。左側前壁は残っている。奥壁中央上部に幅120cm、高さ40cm、奥行20cmの矩形籠がある。右壁前半から右前壁にかけてを失っている。主軸方向南東。

3号やぐら——前壁を失っている。現在間口190cm、奥行220cm、高さ140cm。左壁は150cmを残して前方を失ない、前壁のすべても失っている。主軸方向南東。

4号やぐら——これ1穴だけが完全な形で残っている。切岸下面に幅160cm、奥行150cmの羨道を切りこみ、その奥に幅410cm、奥行494cmの少し縦長の玄室を作ったもの。高さ約200cm。奥壁の左側に幅130cm、高さ180cm、奥行60cmの籠を作り、右側に幅150cm、高さ160cm、奥行60cmの籠を作っている。籠の床面は玄室床間と同高。羨道奥、玄門に近く左右壁対称に深さ10cm、幅18cmの溝を上下に切りこんである。これは門扉の柱をはめこんだあとと考えられる。本やぐら内に五輪塔断石が散在する。凝灰岩製地輪2、空風輪1、安山岩製空風輪1。空風輪の示す形態は鎌倉期。主軸方向南東。

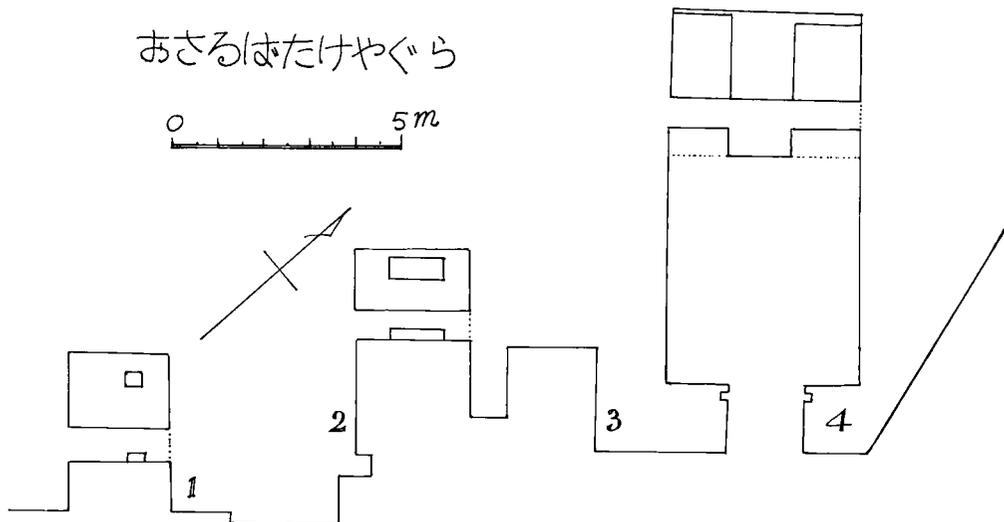
まとめ

戦前にこの地を訪れたときこれらすべての穴に乞食が住んでいたが今は全くいない。

やぐらは大体方形の平面をもち、壁は垂直に立ち、天井も平らである。前壁中央に出入路としての羨道部があるのが一般形態である。内壁下に低い段が作られ、この上に納骨穴を作って納骨し、五輪塔などの供養塔をこの上に安置する形をとるのはやぐら盛行期以後であり、当初のものは単に方形の室であり、段の施設のないのが普通である。

このような観点からこれらのやぐらが鎌倉期のものであり、やぐら盛行期以前の姿をもつものとすることができる。4号穴内にだけ五輪塔断石が残存していた。従来研究されたところでは一般に古い供養塔（五輪塔など）は地山の岩と同じ凝灰岩で作られており、安山岩製のものは少ないが、後には次第に安山岩製が増してゆく。現存五輪塔空風輪の形からこれらが鎌倉期のものであることは、やぐら形態がやぐらとしても古い形であることとともに、やぐらを造営した時点においてこれら切岸が既に存在したことを証するものであり、これら切岸が鎌倉期に構築されたことを証するものである。

1号・2号・3号とも原形を失なっているのは後世、この部分で小規模の石切りをしたためらしい。農家が自家用石材を切りとるには最も労をかけずにすむからであろう。付近農家では古来自家必要石材は自分の山からきってきて使ったことを伝えており、各所に石切あとが残っている。鎌倉をめぐる丘陵尾根の外側には尾根線を残してその外側を垂直に切りとった石切場あとが各所に残っている。これは石切によって残された尾根外側の切岸状が鎌倉防衛に重要な役目をすることから、鎌倉で必要な石の採掘場はすべて尾根外側に設けられていたのではないかと推測される。これによって尾根外側に切岸をめぐるすことになるという一石二鳥の考慮によるものではあるまいか。名越切通の北方尾根外側に延々とつづく切岸が石切場あとであるか、どうか、わからぬけれど、現状で見られるかぎり、名越切通防衛線の一部として重要な役割をもつものと解さなくてはならず、鎌倉期やぐらがこの切岸にあるところから少なくともその部分の切岸は当時のものとして誤りない。



久木松岡氏裏やぐら群

所 在

逗子市久木5丁目4。

松岡富士男氏宅裏山裾。庭つづきの竹藪わきに2穴開口。左穴の右隅で右穴の側壁とつづいている。ともに壁面の風化がひどい。

現 状

左穴——玄室幅370cm、奥行350cm、高さ190cm。羨道幅85cm、羨道長さ105cm。左奥に板碑2と五輪塔及び宝篋印塔の断石がある。

板碑(1)弥陀種子・蓮座・華瓶と中央にならび、華瓶の左右に「文和二年八月日」と刻む。緑泥片岩製。高さ69.2cm。(2)弥陀種子・蓮座・華瓶と中央にならび、華瓶の左右に「文和三年二月日」と刻む。緑泥片岩製。高さ64.5cm。

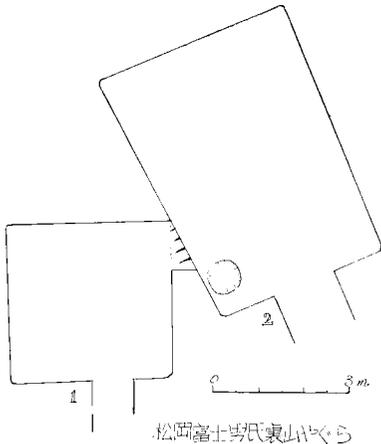
五輪塔 安山岩製。水輪3(室町中期)、火輪3(室町中期)、空風輪3(室町初期2、室町中期1)

宝篋印塔 安山岩製。塔身1、笠2。形態からは年代が判明しにくい。

蓮座 やぐら外に蓮座1個がある。室町中期。安山岩製。

右穴——玄室前幅380cm、奥幅440cm、奥行585cm、高さ255cm。羨道幅145cm、羨道長さ110cm。左前隅に径1mほどの丸穴が作られ水がたまっており、傍の石碑に「霊泉不老」の字がみえる。丸穴の新古不詳。

尚、邸内南側山端(2個のやぐらのある山腹の東方)少し高いところに少しばかりの平場があり、これに面して開口するやぐら(?)が1個ある。前部を切りとられ物置として使われている。



(備考) 1. 塚田明治君から久木にやぐらがあり、内部に板碑や五輪塔があるとき踏査。同行相原社会教育課長、内田囑託、塚田明治。

2. 赤星ノート第3冊(昭和5~6年分)に年月の記入なく、「久木横穴——石井氏・松岡富義氏」と記したものがある。横穴があるときいて記しておいたものらしいが、松岡富義氏は富士男氏の父だというから、両者が同じものだったとわかる。横穴は誤りでやぐらが正しい。

建 造 物

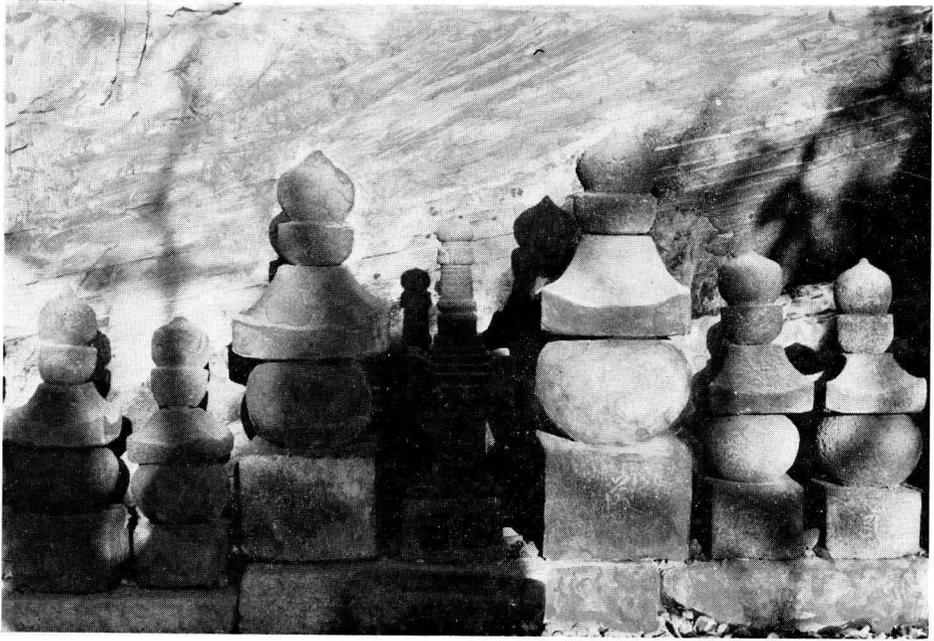
赤 星 直 忠

久木岩殿寺の石造塔婆.....	101
久木妙光寺の石造塔婆.....	104

れ、各所に出土例がある。



岩殿寺境内石造塔婆



久木妙光寺の板碑と石造塔婆

妙光寺の石造塔婆

所在

久木6丁目1～5。

妙光寺本堂右前の墓地には五輪塔が若干ある。昭和28年11月踏査のときには墓地わきの山裾に板碑2枚がおかれていたが、今は堂内に納められている。

板碑

1. ひどく風化しているから細部不詳。全長50cm、上幅16.5cm。緑泥片岩製。上部には弥陀種子の下に蓮座、下の中央に華瓶1個を刻む。華瓶に挿された蓮華の左右に何か文字があるがわからない。右上はかるうじて「厂」らしくみえる。康暦の略なら南北朝末。華瓶の形からはそのくらいの古さのものとしていい。

2. 上端下端欠。その上残部も二断しており、全面相当風化する。現存長53cm。折れた部分での幅21.5cm。上に瓔珞の下部が残る。中央に「南無妙法蓮華經」と漢字で刻み、下に蓮座がある。右に少し小文字で「南無多宝如来」左に同じく小文字で「南無釈迦牟尼仏」と刻む。左右下に細長い異様な華瓶を陰刻し、蓮華二本をさす。一は花を開き、一はつぼむ。中央下にあるべき年号はない。緑泥片岩製。細い枠を周にめぐらす点は一般通りであるが、下の線が蓮座の下を通過しており、したがって華瓶は頸部分をこの線できられた形となる。一般には周の線はもっと下まであって華瓶はその中に刻まれる。文字の刻み方は薬研形のような部分もあり、そうでない部分もあるらしいが風化のため充分わからない。蓮座は大層よい形であり、みごとな姿であるが一般にみられる板碑に刻まれた蓮座とは異なる。華瓶の形は全く見たことのない異形であり、どの時代のものにも類例をみた記憶がない。さされた蓮華は3本であることが一般であるのに、これは2本という特別形である。花は鎌倉期の板碑にみられるものと同じ表現である。以上のことからこの板碑の真疑及び年代の推定は保留する。

石造塔婆

墓地内のやぐら及び無縁塔群中に五輪塔宝篋印塔がある。大部分安山岩製、小数凝灰岩製。大体正規の姿に積まれているが形態上、時代の合致せぬものが積まれているのがみえるが、これはいたし方あるまい。古いのは南北朝期、新しいのは室町中期のものである。水輪の形が球の上下を等分に切りとった形、即ち最大径が中央にあるものが鎌倉期、最大径が若干上の方に移動したのが南北朝期、ずっと上に移動したため球の上部を多く切りとり、下部を少し切りとった形になるのが室町中期。室町初期はその中間とみるのが形態の時間的変化である。この変化は空風輪の空輪に大体あてはまる。火輪は軒厚が中央と端と同じものが鎌倉期。端がやや厚くなったか、同じかとみえるのが南北朝期。中央厚に対し端厚がずっと厚くなったのが室町中期である。宝篋印塔の場合、相輪頂の宝珠形の変化が五輪塔水輪の変化と同じになる。

おわりのことば

昭和43年度より着手いたしました本市の文化財調査は、その衝に当られました本市文化財保護委員の諸先生方の特段のご協力により初期の計画どおり順調に進められております。ここに衷心より感謝を申しあげる次第でございます。

このたびの報告書第3集は山の根・久木地区を中心とした古文書・考古・彫刻等並びに沼間・池子・山の根・久木地区の建築関係について一括ご報告いたしました。

この報告書を調査執筆されました貫達人・赤星直忠・三山進・関口欣也の先生方に対し深甚なる敬意を表しますとともにこの調査にご協力をくださいました関係者各位に厚く御礼申し上げます。

今後とも市民の皆さまの文化財に対する一層のご理解とご協力を切にお願いしてあとがきといたします。

なお、ご参考までに逗子市指定文化財について次のとおりお知らせをいたします。

名 称	所 在 場 所	指定年月日
1.薬 師 堂	神 武 寺	昭和45. 5. 1
2. 木造薬師如来坐像及び 日光月光両菩薩立像	神 武 寺	同 上
3.木造不動明王像	神 武 寺	同 上
4.こんびら山やぐら群	神 武 寺	同 上
5.みろくやぐら	神 武 寺	同 上
6.先祖やぐら横穴	桐ヶ谷政次氏裏山	昭和46.12.23
7.木造阿弥陀如来立像	光 照 寺	同 上
8.木造阿弥陀如来坐像	東 昌 寺	同 上
9.観 音 堂	岩 殿 寺	同 上

社会教育課長 相 原 多 一 郎

昭和47年 3月30日印刷

昭和47年 3月31日発行

逗子市文化財調査報告書 第3集

久木・山の根

編集者 逗子教育委員会

横浜市金沢区六浦町4033番地

印刷所 村松印刷株式会社